

Oracle® Server X5-2L 設置ガイド

ORACLE®

Part No: E58193-01
2014 年 10 月

Part No: E58193-01

Copyright © 2014, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel、Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	11
設置手順について	13
設置手順の概要	13
サーバーの設置準備	17
サーバーの物理仕様	17
スペース要件	18
受け取りおよび開梱のガイドライン	19
保守用スペースのガイドライン	19
電力の要件	20
施設の電力のガイドライン	20
回路遮断器および UPS のガイドライン	21
アースのガイドライン	21
環境要件	21
温度のガイドライン	22
湿度のガイドライン	23
通気と冷却	23
通気のガイドライン	24
適合規格	24
出荷梱包内容一覧	25
設置に必要な工具と装置	26
ESD と安全対策	26
オプションのコンポーネントの取り付け	27
サーバーの機能とコンポーネント	29
サーバーコンポーネント	29
フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ	31
2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル	32
3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル	33

2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル	34
バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット	36
サーバー管理ソフトウェアの概要	37
Oracle System Assistant	37
Oracle ILOM の概要	37
UEFI の概要	38
サーバーファームウェアおよびソフトウェアアップデートの入手	41
ファームウェアとソフトウェアのアップデート	41
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	42
ソフトウェアリリース	42
MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得	44
▼ My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする	44
物理メディアのリクエスト	45
物理メディアのリクエスト用の情報を収集する	45
その他の方法によるアップデートのインストール	48
サーバーのラックへの設置	49
設置の前提条件	49
ラックの要件	50
サーバーのラックマウント作業時の安全対策	50
ラックマウントキットの内容	51
▼ 取り付け用にラックを固定する	52
▼ 固定部品を取り付ける	53
▼ ラックの取り付け位置を決める	55
▼ 工具不要スライドレール構成部品を取り付ける	56
▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け	58
▼ ケーブル管理アームを取り付ける	60
▼ ケーブル管理アームを取り外す	73
▼ ケーブル溝付き出荷用留め具を取り付ける	77
サーバーの配線	81
背面のケーブル接続およびポート	81
Ethernet ポート	83
▼ データケーブルを接続する	84
▼ 電源コードを接続する	85

Oracle ILOM への接続	87
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース	88
ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	88
▼ ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする	88
リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	89
▼ リモートから Oracle ILOM にログインする (Web)	89
▼ リモートから Oracle ILOM にログインする (CLI)	91
サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更	93
ネットワークのデフォルト設定	93
サービスプロセッサの IP アドレスリクエストのタイムアウト	94
▼ サービスプロセッサの一般的なネットワーク設定を表示または変更する (Web)	94
▼ サービスプロセッサの一般的なネットワーク設定を表示または変更する (CLI)	95
▼ サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する (Web)	96
▼ サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する (CLI)	97
▼ サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する (Web)	98
▼ サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する (CLI)	99
Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス	100
▼ マウスモードを設定する	100
▼ グラフィカルリモートホストコンソールにアクセスする (Web)	101
▼ シリアルリモートホストコンソールにアクセスする (CLI)	104
サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング	105
▼ サーバーのバックパネルからサービスプロセッサをリセットする	105
▼ root アカウントのパスワードを回復する	106
Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定	109
Oracle System Assistant へのアクセス	110
▼ Oracle System Assistant をローカルで起動する	110
▼ Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する	112
Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定	113

▼ Oracle System Assistant を使用してソフトウェアとファームウェアを設定する	113
オペレーティングシステムおよびドライバの設定	114
OS インストール用のサーバードライブの構成	115
RAID 構成ツール	115
RAID 構成の要件	116
Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ポリユームの構成	118
▼ ストレージドライブ上での RAID の構成	118
BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成	124
▼ UEFI ブートモードでの RAID を構成する	124
レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成	129
インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムの構成	133
Oracle Solaris のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限	133
インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限	134
オペレーティングシステムのオプション	134
Oracle Solaris の構成ワークシート	135
▼ インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムを構成する	137
Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール	139
関連情報	139
Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント	140
インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムの構成	141
Oracle Linux のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限	141
インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限	142
オペレーティングシステムのオプション	142
Oracle Linux 6.5 構成ワークシート	143
▼ インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムを構成する	144
Oracle Linux の登録と自動更新の有効化	146
Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムのドキュメント	146
インストール済みの Oracle VM 3.3 ソフトウェアの構成	147
Oracle VM のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限	147
インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限	148

インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件	148
オペレーティングシステムのオプション	148
Oracle VM Server 構成ワークシート	149
▼ インストール済み Oracle VM Server を構成する	150
Oracle VM のドキュメント	153
システム電源の制御	155
サーバーの電源切断による正常停止	155
▼ 電源ボタンを使用して正常に停止する	156
▼ Oracle ILOM CLI を使用して正常に停止する	156
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する	157
サーバーの電源切断による即時停止	157
▼ 電源ボタンを使用して即時停止する	158
▼ Oracle ILOM CLI を使用して即時停止する	158
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用して即時停止する	159
サーバーをリセットする	159
▼ Oracle ILOM CLI を使用してサーバーをリセットする	160
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用してサーバーをリセットする	160
設置の問題のトラブルシューティング	161
設置のトラブルシューティング	161
トラブルシューティングと診断のリファレンス	163
技術サポート情報ワークシート	163
システムのシリアル番号の確認	164
サイト計画のチェックリスト	165
準備のためのチェックリスト	165
搬入経路およびデータセンターのチェックリスト	165
データセンター環境のチェックリスト	166
施設の電源のチェックリスト	167
ラックマウントのチェックリスト	167
安全性のチェックリスト	169
Auto Service Request のチェックリスト	169
納入のチェックリスト	170
索引	173

このドキュメントの使用方法

- **概要** – この設置ガイドでは、Oracle が提供する Oracle Server X5-2L のハードウェア設置および構成手順について説明します。
- **対象読者** – この設置ガイドは、装置内で危険についての指導を受け、ハードウェアの取り外しまたは交換の資格を持つ、訓練を受けた技術者および認定された保守担当者を対象としています。
- **必要な知識** – ハードウェアの設置とインストール済みオペレーティングシステムの構成に関する豊富な経験。

製品ドキュメントライブラリ

この製品の最新情報や既知の問題は、ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs>) に含まれています。

Oracle サポートへのアクセス

Oracle サポートサービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> を参照してください。聴覚に障害をお持ちの場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのアクセシビリティ

アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについては、Oracle Accessibility Program の Web サイト (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>) を参照してください。

フィードバック

このドキュメントに関するフィードバックを <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

設置手順について

このセクションでは、設置手順の概要について説明します。

説明	リンク
設置手順全体を確認し、各手順の詳細情報へのリンクを示します。	13 ページの「設置手順の概要」

関連情報

- [17 ページの「サーバーの設置準備」](#)
- [29 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」](#)
- [on page 41“サーバーファームウェアおよびソフトウェアアップデートの入手”](#)
- [on page 49“サーバーのラックへの設置”](#)
- [on page 81“サーバーの配線”](#)
- [on page 87“Oracle ILOM への接続”](#)
- [on page 109“Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定”](#)
- [on page 115“OS インストール用のサーバードライブの構成”](#)
- [on page 133“インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムの構成”](#)
- [on page 141“インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムの構成”](#)
- [on page 147“インストール済みの Oracle VM 3.3 ソフトウェアの構成”](#)
- [on page 155“システム電源の制御”](#)
- [on page 161“設置の問題のトラブルシューティング”](#)
- [on page 165“サイト計画のチェックリスト”](#)

設置手順の概要

次の表に、Oracle Server X5-2L の設置を完了するために必要なタスクの一覧を示します。

手順	説明	リンク
1	プロダクトノートでサーバーの最新の情報について確認します。	『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』 (http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs)
2	サイト計画チェックリストを確認します。	on page 165“サイト計画のチェックリスト”
3	サーバーのサイト要件、仕様、およびコンポーネントを確認し、注文したすべての品目が揃っていることを確認し、ESD や安全対策について確認し、必要なツールや装置を集めます。	17 ページの「サーバーの設置準備」
4	サーバーの機能を確認します。	29 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」
5	別途出荷されたオプションのコンポーネントを取り付けます。	『Oracle Server X5-2L サービスマニュアル』の「システムコンポーネントについて」
6	サーバーのファームウェアやソフトウェアを取得する手順を確認します。	on page 41“サーバーファームウェアおよびソフトウェアアップデートの入手”
7	サーバーをラックに取り付けます。	on page 49“サーバーのラックへの設置”
8	データ管理ケーブルとサーバー管理ケーブルをサーバーに接続します。	on page 81“サーバーの配線”
9	Oracle System Assistant を使用してシステムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	on page 109“Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定”
10	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続します。	on page 87“Oracle ILOM への接続”
11	該当する場合は、インストール済みのオペレーティングシステムを構成します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ on page 133“インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムの構成” ■ on page 141“インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムの構成” ■ on page 147“インストール済みの Oracle VM 3.3 ソフトウェアの構成”
12	<p>該当する場合は、次のいずれかのオペレーティングシステムまたは仮想マシンをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Solaris ■ Linux ■ Windows ■ Oracle VM ■ VMware ESXi 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Server X5-2L Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』の「Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール」 ■ 『Oracle Server X5-2L Linux オペレーティングシステムインストールガイド』の「Linux オペレーティングシステムのインストール」 ■ 『Oracle Server X5-2L Windows Server オペレーティングシステムインストールガイド』の「Windows Server オペレーティングシステムのインストール」 ■ 『Oracle Server X5-2L Oracle VM インストールガイド』の「Oracle VM のインストール」

手順	説明	リンク
13	システムの電源を制御する手順を確認します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Server X5-2L VMware ESXi インストールガイド』の「VMware ESXi のインストール」 on page 155“システム電源の制御”
14	設置の問題をトラブルシューティングします。	on page 161 “設置の問題のトラブルシューティング”

サーバーの設置準備

このセクションでは、サーバーの設置準備に必要な情報を提供します。

説明	リンク
サーバーの物理仕様を確認します。	17 ページの「サーバーの物理仕様」
サーバーのラックマウント、梱包されたサーバーの受け取り、およびラック内のサーバーの保守を行うためのスペース要件を準備します。	18 ページの「スペース要件」
サイトの電气的要件とサーバーの電源要件を確認します。	20 ページの「電力の要件」
サーバーの温度、湿度、およびその他の環境要件を確認します。	21 ページの「環境要件」
ラックマウントサーバーの通気や冷却の要件を確認します。	23 ページの「通気と冷却」
サーバーの適合規格の仕様を確認します。	24 ページの「適合規格」
サーバーの梱包を解き、出荷キットの内容を確認します。	25 ページの「出荷梱包内容一覧」
設置に必要な道具を組み立てます。	26 ページの「設置に必要な工具と装置」
ESD に関する要件を確認し、安全対策を施します。	26 ページの「ESD と安全対策」
オプションのコンポーネントがあれば、それらをサーバーに取り付けます。	27 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」

関連情報

- [13 ページの「設置手順の概要」](#)
- [29 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」](#)

サーバーの物理仕様

次の表に、Oracle Server X5-2L の物理仕様の一覧を示します。

表 1 Oracle Server X5-2L の物理仕様

寸法	サーバーの仕様	仕様
幅	サーバーシャーシ	44.5 cm (17.5 インチ)
奥行き	最大値	73.7 cm (29 インチ)
高さ	2 ラックユニット (2U) 公称	8.76 cm (3.45 インチ)
重量	完全装備のサーバー	<ul style="list-style-type: none"> ■ 24.494 kg (54 ポンド) ■ 8 ディスク構成 ■ 29.937 kg (66 ポンド) ■ 12 ディスク構成 ■ 29.030 kg (64 ポンド) ■ 24 ディスク構成

関連情報

- [18 ページの「スペース要件」](#)
- [on page 50“ラックの要件”](#)

スペース要件

Oracle Server X5-2L は 2 ラックユニット (2U) のサーバーです。物理的な寸法については、[表1](#) を参照してください。

Oracle Server X5-2L は Oracle の Sun Rack II のような、ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に準拠する 4 ポストラックキャビネット内に設置できます。Oracle ラックのスペース要件はすべて同じです。次の表に、ラックの仕様の一覧を示します。

表 2 Sun Rack II モデル 1242 および 1042 の仕様

要件	仕様
使用可能なラックユニット	42
高さ	199.8 cm (78.6 インチ)
幅 (側面パネルを含む)	60 cm (23.6 インチ)
奥行き (モデル 1242)	120 cm (47.24 インチ)
奥行き (モデル 1042)	105.8 cm (41.66 インチ)
(前面ドアハンドルから背面ドアハンドルまで)	
重量 (モデル 1242)	150.6 kg (332 ポンド)
重量 (モデル 1042)	123.4 kg (272 ポンド)
最大動荷重	1005 kg (2215 ポンド)

キャビネットの最小天井高は 230 cm (90 インチ) ですが、これは、本物の床、上げ床のいずれかから測定した値 (どちらか高い方) になります。追加の 91.4 cm (36 インチ)

は、上部のスペースを確保するためのものです。キャビネットの上のスペースやその周囲は、エアコンとキャビネットとの間の冷たい空気の流れや、キャビネットの上面から吹き出す高温の空気の流れを妨げないものでなければいけません。

- [19 ページの「受け取りおよび開梱のガイドライン」](#)
- [19 ページの「保守用スペースのガイドライン」](#)

受け取りおよび開梱のガイドライン

次の表に、Oracle Server X5-2L を含む出荷用梱包箱の寸法と重量の一覧を示します。

表 3 出荷用梱包箱の仕様

要件	仕様
出荷用梱包箱の高さ	30.5 cm (12 インチ)
出荷用梱包箱の幅	59.9 cm (23.6 インチ)
出荷用梱包箱の長さ	98.4 cm (38.7 インチ)
出荷用梱包箱の重量	5.8 kg (12.8 ポンド)

現場で Oracle Server X5-2L の荷下ろしを行う際は、設置場所に辿り着くまでサーバーを出荷用梱包箱に入れたままにしておいてください。データセンターに入る前に、粒子汚染を減らすために別の場所で梱包材を取り除いてください。Oracle Server X5-2L を開梱場所から設置場所まで動かすための搬入口や搬入経路が確保されていることを確認してください。

保守用スペースのガイドライン

ラックマウントされた Oracle Server X5-2L を保守する場所には、必要なアクセススペースがなければいけません。次の表に、ラック内に設置された Oracle Server X5-2L の保守アクセス要件の一覧を示します。

表 4 保守用スペースの要件

場所	保守用スペースの要件
サーバーの背面	91.4 cm (36 インチ)
ラックの上部	91.4 cm (36 インチ)
サーバーの前面	123.2 cm (48.5 インチ)

電力の要件

サーバーは AC 電源を使用します。次の表の値は、電源の仕様を示しています。

注記 - 次の表に表示されている電力消費数は、システムで使用される電源装置の最大定格出力数です。これらの数値は、システムの実際の消費電力の定格ではありません。消費電力の最新情報については、Oracle の Power Calculators Web サイト (<http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/sun-power-calculators/index.html>) にアクセスし、Oracle Server X5-2L のリンクをクリックしてください

表 5 電源装置仕様

パラメータ	AC の要件
電圧 (公称)	100 から 127 / 200 から 240 VAC
入力電流 (最大)	12 A-8.5 A @ 100-127 VAC 5.7 A @ 200-240 VAC
周波数 (公称)	50/60Hz (47 - 63Hz の範囲)

Oracle Server X5-2L は実際上、ある範囲の電圧や周波数で動作可能となっています。ただし、それには信頼できる電源が必要です。その範囲を超えるとサーバーが破損する可能性があります。次のような電気的な外乱があると、システムが破損する可能性があります。

- 電圧低下による揺らぎ
- 入力電圧レベルや入力電力周波数の、大規模かつ高速な変動
- 雷雨
- 配電システムの欠陥 (配線ミスなど)

そのような外乱からサーバーを保護するには、専用の配線システムや電力調整装置を用意するほか、雷雨の影響を防ぐための避雷器や電源ケーブルも用意すべきです。

次の各セクションでは特定の電力要件について説明します。

- [20 ページの「施設の電力のガイドライン」](#)
- [21 ページの「回路遮断器および UPS のガイドライン」](#)
- [21 ページの「アースのガイドライン」](#)

施設の電力のガイドライン

電気的な作業および設置では、適用される現場、地方、および国の電気工事規定に従う必要があります。施設の管理者または有資格の電気技師に連絡して、建物に供給されている電力のタイプを確認してください。

致命的な障害を避けるため、配電盤 (PDU) に十分な電力が供給されるように入力電源を設計してください。PDU に電力を供給するすべての電源回路に、専用の AC ブレーカパネルを使用してください。配電要件を計画する際には、使用可能な AC 電源分岐回路間で電力負荷をバランスよく振り分けるようにしてください。米国やカナダでは、システム全体の AC 入力電流負荷が、分岐回路の AC 電流定格の 80 パーセントを超えないようにしてください。

たとえば、Oracle Sun Rack II の PDU 電源コードの長さは 4 メートル (13.12 フィート) ですが、そのコードの 1 から 1.5 メートル (3.3 から 4.9 フィート) 分は、ラックキャビネット内の配線に使用される可能性があります。設置場所の AC 電源コンセントは、ラックから 2 メートル (6.6 フィート) 以内になければいけません。

回路遮断器および UPS のガイドライン

致命的な障害を避けるため、Oracle Server X5-2L に十分な電力が供給されるように電源システムを設計する必要があります。Oracle Server X5-2L に電力を供給するすべての電源回路に、専用の AC ブレーカパネルを使用してください。電気的な作業および設置では、適用される現場、地方、および国の電気工事規定に従う必要があります。Oracle Server X5-2L では電気回路をアースする必要があります。

注記 - 回路遮断器は顧客側で用意します。回路遮断器は、サーバーの電源コードごとに 1 つずつ必要です。

回路遮断器のほかに、コンポーネントで障害が発生する可能性を減らすために、UPS (Uninterruptable Power Supply) のような安定した電源も用意してください。コンピュータ装置が電力の遮断や変動に繰り返しさらされると、コンポーネントで障害が発生する確率が高くなります。

アースのガイドライン

ラックは、Oracle Server X5-2L と互換性のあるアース付き電源コードを使用している必要があります。たとえば、Oracle Sun Rack II にはアース付きの電源コード (3 線) が備わっています。コードは必ず、アースされた電源コンセントに接続してください。地域によって使用されるアース方式が異なるため、アースのタイプをチェックし、現地の電気工事規定などのドキュメントを参照してください。建物のアース方法の検証およびアース工事は、必ず施設の管理者または有資格の電気技師が行ってください。

環境要件

次の表では、温度、湿度、高度の仕様のほか、騒音、振動、衝撃の仕様も示します。

表 6 環境仕様

仕様	動作時	非動作時
周囲温度 (リムーバブルメディアには当てはまりません)	最大 900 m (2,953 フィート) まで 5°C - 35°C (41°F - 95°F) 最適温度: 21°C - 23°C (69.8°F - 73.4°F) 注記 - 900 m を超える場合 (最大高度 3,000 m) の動作時の最大周囲温度は、300 m 上がるごとに 1°C 下がります。	-40°C - 68°C (-40°F - 154°F)
相対湿度	<ul style="list-style-type: none"> ■ 10 - 90% 結露なし、短期間最高温度: -5°C - 55°C (25°F - 113°F) ■ 5 - 90% 結露なし、ただし乾燥空気 1kg 当たりの水 0.024kg 以下 (乾燥空気 2.205 ポンド当たり 0.053 ポンドの水) 	最大 93% 結露なし、最大湿球温度 35°C (95°F)
高度	35°C (95°F) で最高 3,000 m (9,840 フィート) 注記 - 中国市場では、規制により設置が最大高度 6,562 フィート (2,000 メートル) に制限されることがあります。	最高 12,000 m (39,370 フィート)
騒音	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最大状態: 8.1 ベル ■ アイドル状態: 5.8 ベル 	該当なし
振動	0.15 G (z 軸)、 0.10 G (x 軸、y 軸)、5 - 500Hz 掃引正弦 IEC 60068-2-6 Test FC	0.5 G (z 軸)、 0.25 G (x 軸、y 軸)、5 - 500Hz 掃引正弦 IEC 60068-2-6 Test FC
衝撃	3 G、11 ms 半正弦 IEC 60068-2-27 Test Ea	ロールオフ: 前面から背面方向への 1.25 インチロールオフ自由落下 しきい値: 13 mm の段差、衝突時の速度 0.65 m/s
ETE-1010-02 Rev A		

コンポーネントの故障によって停止時間が発生する可能性を最小限に抑えるには、条件を最適な温度範囲と湿度範囲に設定します。Oracle Server X5-2L を、動作時範囲の境界やその付近で長時間動作させたり、非動作時範囲の境界やその付近にとどまるような環境で設置したりすると、ハードウェアコンポーネントの故障が大幅に増える可能性があります。関連項目:

- [22 ページの「温度のガイドライン」](#)
- [23 ページの「湿度のガイドライン」](#)

関連情報

- [23 ページの「通気と冷却」](#)

温度のガイドライン

サーバーの信頼性やオペレータの快適さを維持するには、摂氏 21°から 23° (華氏 70°から 74°) の周囲温度範囲が最適です。ほとんどのコンピュータ装置は広い温度範

囲で動作可能ですが、摂氏 22° (華氏 72°) 付近が、安全な湿度レベルを維持しやすいので望ましい値といえます。この温度範囲で動作させれば、エアコンシステムがある一定期間停止した場合の安全性が高まります。

湿度のガイドライン

安全なデータ処理の動作には、45 から 50 パーセントの周囲相対湿度範囲が適しています。ほとんどのコンピュータ装置は広い範囲 (20 から 80 パーセント) で動作可能ですが、次の理由で 45 から 50 パーセントの範囲をお勧めします。

- 最適範囲では、高湿度レベルと関係する腐食の問題がコンピュータシステムで起こりにくくなります。
- 最適範囲では、エアコン制御が故障した場合でも動作時間を最大限に延長できます。
- この範囲では、相対湿度が低すぎる場合に発生する可能性のある静電気放電による間欠的干渉に起因する故障や一時的な機能不全を回避しやすくなります。相対湿度レベルが 35% より低い環境では、静電放電 (ESD) が発生しやすく、除去も難しくなります。レベルが 30% より低くなると、ESD がクリティカルな状態になります。

通気と冷却

ラックマウントサーバーで適切な通気を実現するには、常にラックの前後に十分なスペースを確保してください。ラック内での空気の流れを妨げる可能性のある装置や物体で、ラックの前後をふさがないようにしてください。Oracle Server X5-2L のようなラックマウント可能なサーバーや装置は通常、ラックの前面から冷たい空気を取り込み、ラックの背面から暖かい空気を排出します。冷却は前面から背面へ行うため、左右の側面に関するエアフロー要件はありません。

コンポーネントを取り付けていないラック内の空いている部分には、フィルターパネルを取り付けます。コンポーネント間の隙間は、ラック内のエアフローや冷却に悪影響を及ぼす可能性があります。関連項目:

- [24 ページの「通気のガイドライン」](#)

関連情報

- [21 ページの「環境要件」](#)

通気のガイドライン

Oracle Server X5-2L は、自然対流のエアフロー内に設置された場合に機能するように設計されています。環境仕様を満たせるように、次の要件に従う必要があります。

- 吸気口がシステムの前面に、排気口がシステムの背面に存在していることを確認します。ラックまたはキャビネット内で排気が再循環しないように考慮してください。
- システムの前面に 123.2 cm (48.5 インチ) 以上、背面に 91.4 cm (36 インチ) 以上の通気用のスペースを確保します。
- シャーシの通気が妨げられていないことを確認してください。指定されている正常な動作条件を超える場合、サーバーは合計 100 CFM の通気を達成できる内蔵ファンを使用します。
- サーバーの吸気および排気の両方に使用されるキャビネットドアなどの通気口がふさがれていないことを確認してください。Sun Rack II は冷却に最適化されています。前面ドアと背面ドアの穿孔はどちらも 80 パーセントなので、ラック内で高レベルのエアフローを実現できます。
- サーバーを取り付ける際のキャビネットドアからの距離は、正面は 1 インチ (2.5 cm) 以上、背面は 3.15 インチ (80 mm) 以上である必要があります。これらのスペースの値は、前述の吸気および排気のインピーダンス (使用可能な開口部) に基づいたもので、開口部が吸気および排気面に均一に分散していると仮定しています。これらの値により冷却パフォーマンスも向上します。

注記 - キャビネットドアやドアからサーバーまでのスペースなど、吸気および排気に関する制限の組み合わせは、サーバーの冷却パフォーマンスに影響を与える可能性があります。これらの制限を評価する必要があります。サーバーの配置は高温の環境で特に重要です。

- サーバーの排気口の妨げにならないように、ケーブルをまとめてください。

適合規格

このサーバーは次の仕様に準拠しています。

カテゴリ	関連規格
規制 ^{†,‡}	<ul style="list-style-type: none"> ■ 製品の安全性: UL/CSA 60950-1、EN 60950-1、IEC 60950-1 CB Scheme (各国で異なる) ■ EMC <ul style="list-style-type: none"> ■ 放射: FCC CFR 47 Part 15、ICES-003、EN55022、EN61000-3-2、EN61000-3-3

カテゴリ	関連規格
	<ul style="list-style-type: none"> ■ イミューニティー: EN55024
動作保証 [‡]	<ul style="list-style-type: none"> ■ 北米 (NRTL) ■ 欧州連合 (EU) ■ International CB Scheme ■ BIS (インド) ■ BSMI (台湾) ■ RCM (オーストラリア) ■ CCC (PRC) ■ MSIP (韓国) ■ VCCI (日本) ■ 関税同盟 EAC
欧州連合指令	<ul style="list-style-type: none"> ■ 2006/95/EC 低電圧指令 ■ 2004/108/EC EMC 指令 ■ 2011/65/EU RoHS 指令 ■ 2012/19/EU WEEE 指令

[†]記載されている規格および認証はすべて正式な最新バージョンを示しています。詳細は、販売担当者に確認してください。

[‡]その他の国の規制/認証が適用されることがあります。

関連情報

- [Oracle Server X5-2L 安全およびコンプライアンスに関するガイド](#)
- [Oracle のハードウェアシステムの重要な安全に関する情報](#)

出荷梱包内容一覧

出荷用梱包箱を検査して、物理的な損傷がないかどうかを確認してください。出荷用梱包箱に損傷がある場合は、開梱の際に運送業者の立ち会いを要請してください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。

Oracle Server X5-2L の出荷キットには、次の品目が含まれています。

- 電源コード (カントリーキットに別途梱包)
- ラックレールと設置指示書を含むラックマウントキット
- その他のハードウェア、ケーブル、コネクタなど
- 『Oracle Server X5-2L スタートガイド』
- 使用条件と安全性に関するドキュメント

関連情報

- [27 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」](#)

設置に必要な工具と装置

サーバーを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよびアースストラップ

さらに、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスを用意する必要があります。

- ASCII 端末
- ワークステーション
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

関連情報

- [on page 49“サーバーのラックへの設置”](#)

ESD と安全対策

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電放電 (ESD) を防止します。



注意 - 電子コンポーネントが静電気によって損傷すると、システムが永続的に使用できなくなるか、保守技術者による修復が必要になる可能性があります。電子コンポーネントを静電気による損傷から保護するには、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面にコンポーネントを置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

サーバーを設置する前に、*Oracle Server X5-2L* 安全およびコンプライアンスに関するガイドおよび *Oracle* のハードウェアシステムの安全に関する重要な情報に記載された安全性に関する情報をお読みください。



注意 - 取り付け作業を開始する前に、装置ラックに転倒防止バーまたは転倒防止脚を設置してください。



注意 - 構成にもよりますが、サーバーの重量は約 28.5 kg (63 ポンド) です。このドキュメントの手順に従って、2 ラックユニット (2U) のサーバーを持ち上げてラックユニットに取り付けるには、2 人の作業員が必要です。



Caution - 2 人で行う手順を実行する際には、各手順の開始前後および作業中に常に意思疎通を図り、混乱が起こらないようにしてください。

関連情報

- [on page 50 “サーバーのラックマウント作業時の安全対策”](#)

オプションのコンポーネントの取り付け

標準のシステムコンポーネントは工場に取り付けられています。標準構成とは別に購入したオプションのコンポーネントは、個別に出荷され、ほとんどの場合、サーバーをラックに設置する前に取り付ける必要があります。

次のオプションのコンポーネントを注文および別途購入できます。

- PCIe カード
- DDR4 DIMM メモリーキット
- ストレージドライブ
- ソフトウェアメディア

工場出荷時に取り付けられていないオプションを注文した場合は、『[Oracle Server X5-2L サービスマニュアル](#)』の「[システムコンポーネントについて](#)」を参照してください。

サポートされるコンポーネントとそのパーツ番号は、将来通知なしに変更される可能性があります。最新の一覧については、次の Oracle システムハンドブックを参照してください。

https://support.oracle.com/handbook_private/Systems/Oracle_Server_X5_2L/Oracle_Server_X5_2L.html

注記 - Oracle システムハンドブックにアクセスするには、My Oracle Support にログインする必要があります。詳細は、[on page 41](#)「[サーバーファームウェアおよびソフトウェアアップデートの入手](#)」を参照してください。

このサイトにアクセスするには、My Oracle Support にログインします。「ナレッジ」タブを選択して「Oracleシステム・ハンドブック」を選択します。ハンドブック内で「システム」をクリックし、サーバーの名前とモデルをクリックします。表示されたサーバーの製品ページで、フルコンポーネントのリストをクリックしてコンポーネントの一覧を表示します。

オプションの現場交換可能ユニット (FRU) または顧客交換可能ユニット (CRU) を注文した場合は、上部のカバーにある保守ラベルまたは、『[Oracle Server X5-2L サービスマニュアル](#)』の「[システムコンポーネントについて](#)」のコンポーネントの取り外しおよび交換手順に記載されている取り付け手順を参照してください。

関連情報

- [29 ページの「サーバーコンポーネント」](#)
- 『[Oracle Server X5-2L サービスマニュアル](#)』の「[システムコンポーネントについて](#)」

サーバーの機能とコンポーネント

このセクションでは、サーバーの各種コンポーネント、ステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびディスク管理オプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーの機能とコンポーネントを確認します。	29 ページの「サーバーコンポーネント」
サーバーのフロントパネルおよびバックパネルにあるステータスインジケータ、コネクタ、およびストレージドライブの場所を確認します。	31 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」 36 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」
サーバー管理ソフトウェアを確認します。	37 ページの「サーバー管理ソフトウェアの概要」

関連情報

- [on page 81“サーバーの配線”](#)

サーバーコンポーネント

表 7 Oracle Server X5-2L のコンポーネント

機能	説明
プロセッサ	それぞれ 4 つの組み込み DDR4 メモリーコントローラを搭載した 1 基または 2 基のプロセッサ。次の機能を備えたプロセッサがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none">■ 18 コア、2.3 GHz、145W プロセッサ■ 12 コア、2.6 GHz、135W プロセッサ■ 10 コア、2.6 GHz、105W プロセッサ■ 8 コア、2.4 GHz、85W プロセッサ
メモリー	プロセッサごとに最大 12 個の DIMM を搭載可能。デュアルプロセッサシステムでは、最大 24 個の DDR4 DIMM で 768G バイトの最大メモリー容量がサポートされています。 注記 - シングルプロセッサシステムでは、最大 12 個の DDR4 DIMM で 384G バイトの最大メモリー容量がサポートされています。 RDIMM (8G バイトと 16G バイト) および LRDIMM (32G バイト) がサポートされています。

機能	説明
ストレージ (前面)	<p>ストレージデバイスは、ハードディスクドライブ (HDD) と半導体ディスクドライブ (SSD) の両方で構成できます。構成の内容:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホットプラグ対応 3.5 インチ SAS HDD (12 台まで) ■ ホットプラグ対応 2.5 インチ SAS HDD/SSD (24 台まで)、およびオプションで PCIe ベースの NVM-Express SSD (4 台まで) をサポート ■ ホットプラグ対応 2.5 インチ SAS HDD/SSD (8 台まで)、およびオプションで SATA DVD、PCIe ベースの NVM-Express SSD (4 台まで)、またはその両方をサポート <p>注記 - 12 台の 3.5 インチストレージドライブまたは 24 台の 2.5 インチストレージドライブが含まれるストレージドライブ構成には、内蔵 SAS エクスパンダとそれに関連付けられた PCIe ホストバスアダプタ (HBA) カードが必要です。 注記 - NVM-Express SSD は Oracle Linux または Oracle Solaris オペレーティングシステムを実行しているサーバーでのみサポートされています。 注記 - NVM-Express SSD を含むストレージドライブ構成には、NVM-Express PCIe スイッチ HBA カードが必要です。</p>
ストレージ (背面)	<p>2.5 インチ SAS ストレージドライブ (2 台まで)。これらのストレージドライブは、12 台の 3.5 インチストレージドライブ構成または 24 台の 2.5 インチストレージドライブ構成でのみサポートされます。</p> <p>注記 - 背面にマウントされた 2.5 インチ SAS ストレージドライブには、内蔵 SAS エクスパンダとそれに関連付けられた PCIe HBA カードが必要です。</p>
PCI Express (PCIe) I/O スロット	<p>ロープロファイル PCIe カード装着可能な PCIe Gen3 スロット 6 基:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ スロット 1、2、5、および 6: x8 電気インタフェース ■ スロット 3 および 4: x16 電気インタフェース <p>注記 - シングルプロセッサシステムでは、PCIe スロット 1、2、および 3 は機能しません。</p>
内蔵 HBA	<p>PCIe スロット 6 は、SAS ストレージドライブを制御および管理するための HBA カードスロットです。</p>
NVM-Express スイッチ	<p>オプションの NVM-Express ストレージドライブを制御および管理するための PCIe HBA カード。</p>
Ethernet ポート	<p>背面パネルに 10GBASE-T RJ-45 ギガビット Ethernet (10GbE) ポート (4 基まで)。</p> <p>注記 - シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET 2 および NET 3 は機能しません。</p>
Ethernet ポート	<p>背面パネルに 10GBASE-T RJ-45 ギガビット Ethernet (GbE) ポート 4 基。</p> <p>注記 - シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。</p>
USB 2.0 ポート	<p>前面 2 基、背面 2 基、内蔵 2 基。</p> <p>注記 - 内蔵 USB ポートのうち 1 基は、Oracle System Assistant が格納された USB ドライブに事前に組み込まれていることがあります。詳細は、on page 109 "Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定"を参照してください。</p>
ビデオ (VGA) ポート	<p>高密度 DB-15 ビデオポートが背面に 1 基。</p>
サービスプロセッサ (SP)	<p>サーバーには統合サービスプロセッサ (SP) が搭載されています。SP は、IPMI 2.0 準拠のリモート管理機能を提供します。SP の機能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2.4 (初期バージョン) ■ シリアル接続を使用したローカル Oracle ILOM コマンド行アクセス

機能	説明
管理ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> ■ 専用の 10/100/1000BASE-T 管理ポート (NET MGT) およびオプションでホストの Ethernet ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用して、SP への Ethernet アクセスをサポート ■ IP 経由のリモートのキーボード、ビデオ、マウス、およびストレージ (KVMS) をサポート
電源装置	2 台のホットスワップ対応の 1000W 冗長電源装置。
冷却ファン	4 つの 80mm、ホットスワップ対応ファンモジュール。各ファンモジュールは 2 枚の逆回転ファンベアを備えています。各電源装置はそれぞれ個別に冷却ファンを備えています。
オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none"> ■ オプションで、Oracle Solaris または Oracle Linux オペレーティングシステムをサーバーにプリインストールできます (注文した場合)。 ■ Oracle Solaris、Linux、および Windows がサポートされています。サーバーでサポートされている OS バージョンの完全な一覧については、http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs にある『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。
仮想化ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> ■ サーバーに Oracle VM ソフトウェアをオプションでプリインストールできます。 ■ Oracle VM と VMware ESXi がサポートされています。

関連情報

- [31 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」](#)
- [36 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」](#)

フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ

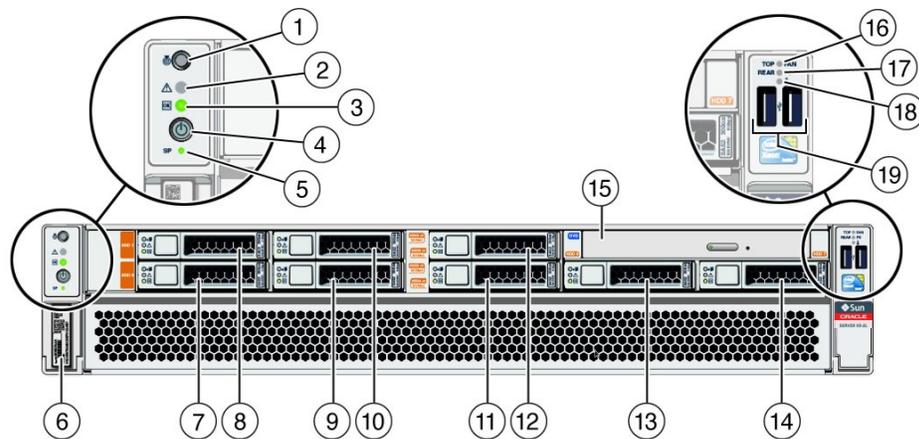
これらのセクションでは、Oracle Server X5-2L で使用可能な 3 つのドライブ構成のフロントパネルにあるステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブについて説明します。

- [32 ページの「2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル」](#)
- [33 ページの「3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル」](#)
- [34 ページの「2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル」](#)

2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル

次の図は、8 台の 2.5 インチストレージドライブとオプションの DVD ドライブで構成された Oracle Server X5-2L のフロントパネルのステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブを示しています。

図 1 2.5 インチドライブ 8 基と DVD 構成のサーバーフロントパネル



図の説明

- 1 ロケータ LED/ロケータボタン: 白色
- 2 保守要求 LED: オレンジ色
- 3 電源/OK LED: 緑色
- 4 電源ボタン
- 5 SP OK LED: 緑色
- 6 システムのシリアル番号
- 7 ストレージドライブ 0
- 8 ストレージドライブ 1
- 9 ストレージドライブ 2 (オプションの NVM-Express SSD)
- 10 ストレージドライブ 3 (オプションの NVM-Express SSD)
- 11 ストレージドライブ 4 (オプションの NVM-Express SSD)
- 12 ストレージドライブ 5 (オプションの NVM-Express SSD)
- 13 ストレージドライブ 6
- 14 ストレージドライブ 7
- 15 オプションの SATA DVD ドライブ
- 16 保守要求 LED: Top: ファンモジュール (オレンジ色)
- 17 保守要求 LED: Rear: 電源 (オレンジ色)
- 18 保守要求 LED: 異常な温度上昇アイコン: システムの異常な温度上昇警告 (オレンジ色)

19 USB 2.0 コネクタ (2)

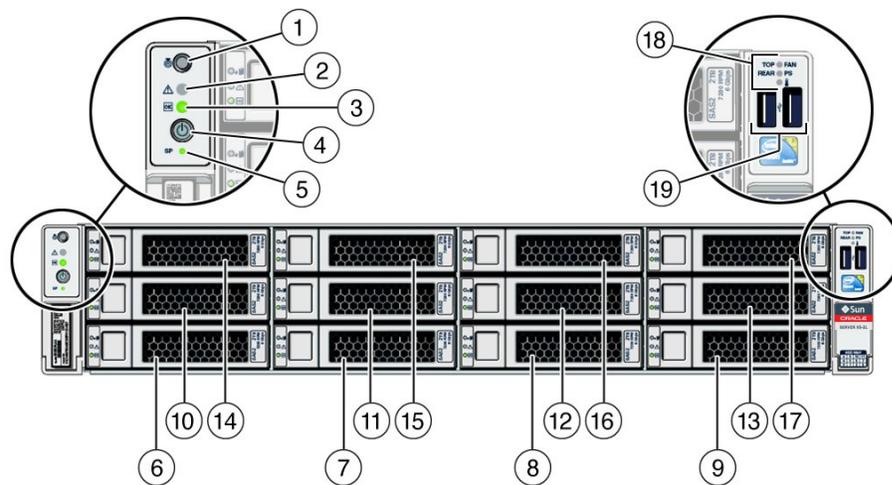
関連情報

- 33 ページの「3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル」
- 34 ページの「2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル」
- 36 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」

3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル

次の図は、3.5 インチのストレージドライブ 12 基構成の Oracle Server X5-2L のフロントパネルに配置されたステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブを示しています。

図 2 3.5 インチドライブ 12 基構成のサーバーフロントパネル



図の説明

- 1 ロケータ LED/ロケータボタン: 白色
- 2 保守要求 LED: オレンジ色
- 3 電源/OK LED: 緑色
- 4 電源ボタン

- 5 SP OK LED: 緑色
- 6 ストレージドライブ 0
- 7 ストレージドライブ 1
- 8 ストレージドライブ 2
- 9 ストレージドライブ 3
- 10 ストレージドライブ 4
- 11 ストレージドライブ 5
- 12 ストレージドライブ 6
- 13 ストレージドライブ 7
- 14 ストレージドライブ 8
- 15 ストレージドライブ 9
- 16 ストレージドライブ 10
- 17 ストレージドライブ 11
- 18 保守要求 LED (3): 上部: ファンモジュール (オレンジ色)、背面: 電源装置 (オレンジ色)、温度超過アイコン: システム温度超過警告 (オレンジ色)
- 19 USB 2.0 コネクタ (2)

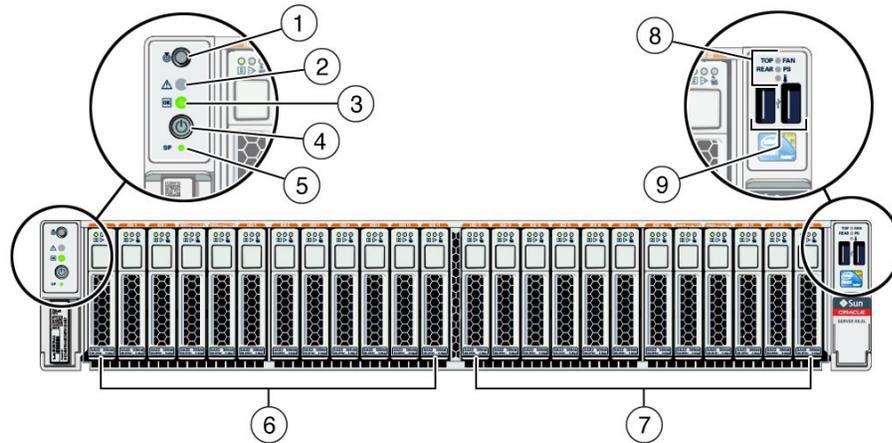
関連情報

- [34 ページの「2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル」](#)
- [32 ページの「2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル」](#)
- [36 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」](#)

2.5 インチドライブ 24 基搭載のフロントパネル

次の図は、2.5 インチのストレージドライブ 24 基構成の Oracle Server X5-2L のフロントパネルに配置されたステータスインジケータ (LED)、コネクタ、およびドライブを示しています。

図 3 2.5 インチドライブ 24 基構成のサーバーフロントパネル



図の説明

- 1 ロケータ LED/ロケータボタン: 白色
- 2 保守要求 LED: オレンジ色
- 3 電源/OK LED: 緑色
- 4 SP OK LED: 緑色
- 5 電源ボタン
- 6 ストレージドライブ 0 - 11 (ストレージドライブ 3 および 4: オプションの NVMe-Express SSD)
- 7 ストレージドライブ 12 - 23 (ストレージドライブ 19 および 20: オプションの NVMe-Express SSD)
- 8 保守要求 LED (3): 上部: ファンモジュール (オレンジ色)、背面: 電源装置 (オレンジ色)、温度超過アイコン: システム温度超過警告 (オレンジ色)
- 9 USB 2.0 コネクタ (2)

関連情報

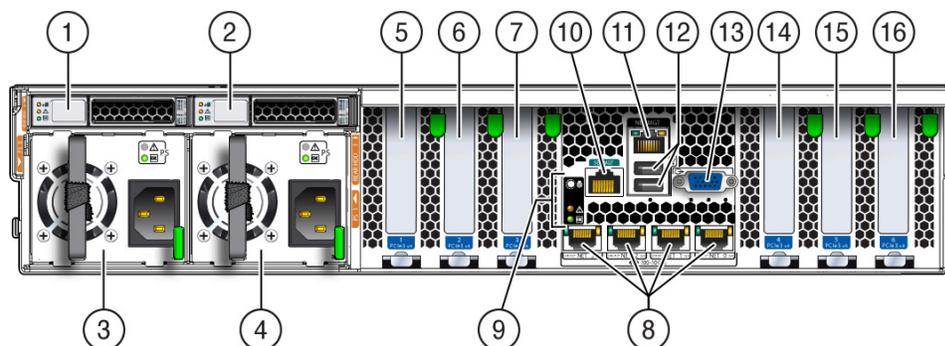
- [33 ページの「3.5 インチドライブ 12 基搭載のフロントパネル」](#)
- [32 ページの「2.5 インチドライブ 8 基と DVD 搭載のフロントパネル」](#)
- [36 ページの「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」](#)

バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット

このセクションでは、Oracle Server X5-2L のバックパネルを示し、そのコントロール、コネクタ、およびステータスインジケータ (LED) について説明します。

注記 - 12 および 24 基のフロントパネルストレージドライブで構成されているシステムには、背面にマウントされるストレージドライブ 2 基を搭載することもできます。8 基のフロントパネルストレージドライブで構成されているシステムには、背面にマウントされたストレージドライブは搭載されていません。

図 4 サーバーのバックパネル



図の説明

- 1 背面ストレージドライブ 0
- 2 背面ストレージドライブ 1
- 3 電源ユニット 0 (PSU0)
- 4 電源ユニット 1 (PSU1)
- 5 PCIe スロット 1 (シングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 6 PCIe スロット 2 (シングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 7 PCIe スロット 3 (シングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 8 ネットワーク (NET) 100/1000/10000 ポート (NET3-NET0) (NET2 および NET3 はシングルプロセッサシステムでは機能しません。)
- 9 システムステータス LED: ロケータ/ボタン: 白色、保守要求: オレンジ色、電源/OK: 緑色
- 10 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
- 11 Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) サービスプロセッサ (SP) ネットワーク管理 (NET MGT) 10/100/1000BASE-T ポート
- 12 USB 2.0 ポート (2)
- 13 DB-15 ビデオコネクタ
- 14 PCIe スロット 4
- 15 PCIe スロット 5

16 PCIe スロット 6

関連情報

- 31 ページの「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」
- 29 ページの「サーバーコンポーネント」

サーバー管理ソフトウェアの概要

次の各セクションでは、サーバー管理ソフトウェアについて説明します。

- 37 ページの「Oracle System Assistant」
- 37 ページの「Oracle ILOM の概要」
- 38 ページの「UEFI の概要」

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant を使用すると Oracle Server X5-2L をセットアップして管理できます。Oracle System Assistant アプリケーションは、Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守を行うときに役立つタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle VM、Solaris、Linux、または Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。

Oracle Server X5-2L には、Oracle System Assistant を含む内蔵 USB フラッシュドライブが含まれている可能性があります。

Oracle System Assistant の使用方法については、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

Oracle ILOM の概要

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用すると Oracle Server X5-2L を管理できます。Oracle ILOM は、サーバーのサービスプロセッサ (SP) に接続するために使用します。サーバーは Oracle ILOM バージョン 3.2.4 が搭載された状態で出荷されます。

Oracle ILOM ソフトウェアはサーバーのサービスプロセッサ内に存在します。サーバーコンポーネントのモニターや管理を行うには、Oracle ILOM ソフトウェアを使用します。Oracle ILOM ソフトウェアの機能を次に示します。

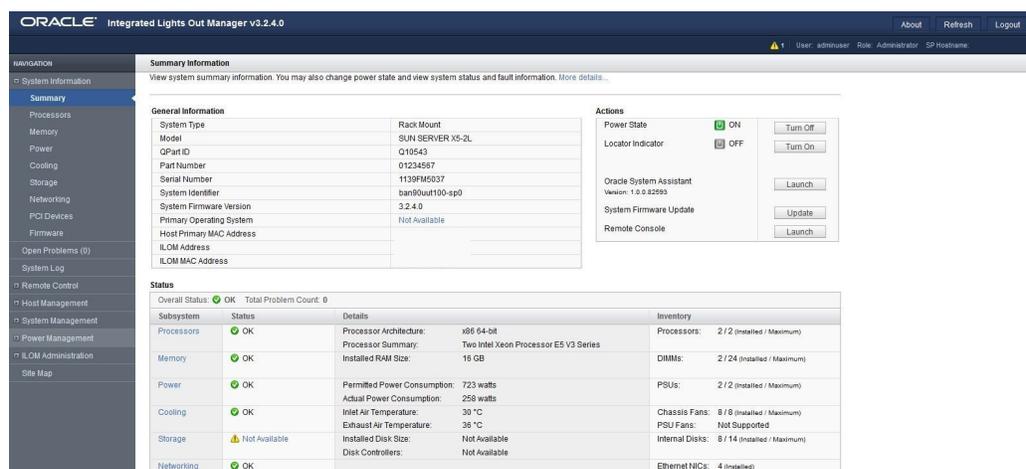
- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示と編集
- 重要なシステム情報のモニタリングと記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

サーバーの SP にアクセスするには、次のいずれかの方法を使用します。

- [on page 89“リモートから Oracle ILOM にログインする \(Web\)”](#)
- [on page 91“リモートから Oracle ILOM にログインする \(CLI\)”](#)

Oracle ILOM の詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 のドキュメントライブラリを参照してください。

Oracle ILOM にログインしたときの Web インタフェースの例を次の図に示します。



UEFI の概要

Oracle Server X5-2L には Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) が含まれており、UEFI またはレガシー BIOS モードのいずれかをサポートするように構成できます。レガシー BIOS がデフォルトのモードで、UEFI ドライバのないソフトウェアやアダプタにはこれを使用する必要があります。

次の各セクションで UEFI モードとレガシー BIOS モードについて詳しく説明します。

- 39 ページの「ブートモードの選択」
- 39 ページの「レガシー BIOS ブートモード」
- 39 ページの「UEFI ブートモード」

UEFI BIOS の詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

ブートモードの選択

レガシー BIOS ブートモードまたは UEFI ブートモードのいずれかを選択できます。レガシー BIOS ブートモードがデフォルトです。

BIOS ブートモードを変更すると、以前に選択したモードのブート候補は BIOS 設定ユーティリティの「Boot Options Priority」リストから使用できなくなります。新しいモードのブート候補は、BIOS 設定ユーティリティーメニューから「Save Changes and Reset」を選択したあとに「Boot Options Priority」リストに表示されます。以前に選択したモードに切り替える可能性がある場合は、Oracle ILOM BIOS バックアップおよび復元機能を使用すると BIOS 構成を維持できます。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

サポートされているオペレーティングシステムのほとんどは、UEFI ブートモードもレガシー BIOS ブートモードも使用できます。ただし、ブートモードを選択してオペレーティングシステムをインストールすると、インストールしたイメージはインストール時に使用したモードでしか使用できません。UEFI ブートモードまたはレガシー BIOS ブートモードを選択する手順については、『Oracle Server X5-2L サービスマニュアル』の「UEFI の使用」を参照してください。

レガシー BIOS ブートモード

ホストバスアダプタ (HBA) でオプションの ROM を使用する場合は、ソフトウェアまたはアダプタに UEFI ドライバがない場合は、レガシー BIOS ブートモードを選択します。レガシー BIOS ブートモードでは、レガシー BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの「Boot Options Priority」リストに表示されます。

UEFI ブートモード

ソフトウェアとアダプタで UEFI ドライバを使用する場合は、UEFI ブートモードを選択します。UEFI ブートモードは、システムの設定中に手動で選択できます。UEFI ブートモードでは、UEFI ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの「Boot Options Priority」リストに表示されます。

サーバーファームウェアおよびソフトウェアアップデートの入手

このセクションでは、サーバーファームウェアおよびソフトウェアアップデートにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーファームウェアとソフトウェアのアップデートについて学びます。	“ファームウェアとソフトウェアのアップデート” on page 41
ファームウェアおよびソフトウェアへのアクセスオプションについて学びます。	“ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション” on page 42
使用可能なファームウェアおよびソフトウェアのリリースを確認します。	“ソフトウェアリリース” on page 42
Oracle System Assistant、My Oracle Support、または物理メディアのリクエストを使ってファームウェアおよびソフトウェアを取得する方法について学びます。	“MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得” on page 44
ファームウェアおよびソフトウェアのアップデートをその他の方法を使ってインストールします。	“その他の方法によるアップデートのインストール” on page 48

ファームウェアとソフトウェアのアップデート

サーバーのファームウェアやソフトウェアは定期的に更新されます。これらのアップデートはソフトウェアリリースとして使用可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバーで使用できるすべてのファームウェア、ソフトウェア、ハードウェアドライバ、ツール、およびユーティリティを含む、ダウンロード可能なファイル(パッチ)のセットです。これらのファイルはすべて一緒にテストされ、使用するサーバーで動作することが確認されています。

サーバーファームウェアおよびソフトウェアは、新しいソフトウェアリリースが入手可能になりしだい、更新してください。ソフトウェアリリースには、多くの場合はバグの修正が含まれており、サーバーを更新することで、サーバーファームウェアおよびソフトウェアが最新であることが保証されます。

ソフトウェアリリースの各パッチに付属する ReadMe ドキュメントには、そのパッチに関する情報(前回のソフトウェアリリースから変更された点や変更されていない点、今回のリリースで修正されたバグなど)が含まれています。

サーバードキュメントの一部であるプロダクトノートでは、サーバーでサポートされる最新リリースのサーバーソフトウェアリリースが特定されます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

サーバーのファームウェアやソフトウェアの最新リリースを取得するには、次のいずれかのオプションを使用します。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、出荷時にインストールされている Oracle x86 サーバー用のオプションであり、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードおよびインストールできるようにします。

Oracle System Assistant の使用方法については、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

- **My Oracle Support** – すべてのシステムソフトウェアリリースは、<http://support.oracle.com> の My Oracle Support から入手できます。

My Oracle Support Web サイトで入手可能なものについては、“ソフトウェアリリース” on page 42 を参照してください。

My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする方法は、“My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする” on page 44 を参照してください。

- **物理メディアのリクエスト (PMR)** – My Oracle Support から入手可能な 1 つ以上のソフトウェアリリースを含んだ DVD をリクエストできます。

詳細は、“物理メディアのリクエスト” on page 45 を参照してください。

- **その他の方法** – Oracle Enterprise Manager Ops Center、Oracle Hardware Management Pack、または Oracle ILOM を使ってサーバーのソフトウェアおよびファームウェアを更新できます。

詳細は、“その他の方法によるアップデートのインストール” on page 48 を参照してください。

ソフトウェアリリース

My Oracle Support 上のソフトウェアリリースは、製品ファミリ (Oracle サーバーなど)、続いて製品 (特定のサーバーやブレード)、そして最後にソフトウェアリリースのバージョンによってグループ化されています。ソフトウェアリリースには、サーバーまたはブレードの更新されたソフトウェアやファームウェアがすべてダウンロード可能な一連のファイル (パッチ) として含まれており、それに含まれるファームウェア、ドライバ、ツール、ユーティリティーはすべて一緒にテストされ、サーバーとの互換性が保証されています。

各パッチは zip ファイルで、ReadMe ファイル、およびファームウェアやソフトウェアファイルを含むサブディレクトリセットが格納されています。ReadMe ファイルには、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントおよび修正されたバグの詳細が記載されています。

My Oracle Support では、次の表で説明するようなサーバー用の一連のソフトウェアリリースが提供されています。これらのソフトウェアリリースを取得するには、My Oracle Support からファイルをダウンロードするか、あるいは物理メディアのリクエスト (PMR) を Oracle に対して発行します。あるいは、Oracle System Assistant を使って同じファームウェアやソフトウェアをサーバーにダウンロードすることもできます。

TABLE 8 ソフトウェアリリースパッケージ

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
X5-2L SW release – Firmware Pack	Oracle ILOM、BIOS、オプションカードファームウェアなど、すべてのシステムファームウェアを含みます。	最新のファームウェアが必要です。
X5-2L SW release – OS Pack	特定の OS のすべてのツール、ドライバ、およびユーティリティからなるパッケージを含みます。OS Pack は、サポートされているオペレーティングシステムのバージョンごとに入手できます。 含まれているソフトウェアは、Oracle Hardware Management Pack、LSI MegaRAID ソフトウェア、および Oracle 推奨のオプションのソフトウェアです。 Linux、Solaris、および Windows の場合、この OS Pack には Intel Network Teaming and Install Pack も含まれます。	OS 固有のツール、ドライバ、またはユーティリティを更新する必要があります。
X5-2L SW release – All Packs	Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントを含みます。 このパックには、Oracle VTS や Oracle System Assistant イメージは含まれません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合わせを更新する必要があります。
X5-2L SW release – Diagnostics	Oracle VTS 診断イメージを含みます。	Oracle VTS 診断イメージが必要です。
X5-2L SW release – Oracle System Assistant Updater	Oracle System Assistant 回復および更新 ISO イメージを含みます。	Oracle System Assistant を手動で回復および更新する必要があります。

MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得

Oracle System Assistant を使えば、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

ただし、更新されたファームウェアやソフトウェアを取得するには、My Oracle Support (MOS) を使用するか、または物理メディアのリクエスト (PMR) を Oracle に送信することもできます。詳細については、次を参照してください。

- “My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする” on page 44
- “物理メディアのリクエスト” on page 45

▼ My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする

1. My Oracle Support の Web サイト (<http://support.oracle.com>) にアクセスします。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページの上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
画面右に「パッチ検索」ペインが表示されます。
4. 「検索」タブ領域内で、「製品またはファミリー (拡張)」をクリックします。
検索フィールドを含む「検索」タブ領域が表示されます。
5. 「製品」フィールドのドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、製品名 (たとえば、Oracle Server X5-2L) の全体または一部を、一致するものが表示されるまで入力します。
6. 「リリース」フィールドのドロップダウンリストから特定のソフトウェアリリースを選択します。
使用可能なすべてのソフトウェアリリースを表示するには、リストを展開します。
7. 「検索」をクリックします。
「パッチの詳細検索結果」画面が表示され、ソフトウェアリリースのパッチが一覧表示されます。

入手可能なソフトウェアリリースの説明については、“[ソフトウェアリリース](#)” on page 42を参照してください。

8. ソフトウェアリリースのパッチを選択するには、ソフトウェアリリースバージョンの横のパッチ番号をクリックします。

Shift キーを使用すると複数のパッチを選択できます。

ポップアップアクションパネルが表示されます。パネルには、「README」、「ダウンロード」、「計画に追加」オプションを含め、いくつかのアクションオプションがあります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。

9. このパッチの ReadMe ファイルを確認するには、「README」をクリックします。
10. ソフトウェアリリースのパッチをダウンロードするには、「ダウンロード」をクリックします。
11. 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの zip ファイル名をクリックします。
ソフトウェアリリースのパッチがダウンロードされます。

物理メディアのリクエスト

手続き上、Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) を Oracle に対して発行することで最新のソフトウェアリリースパッケージを入手できます。PMR を発行するための推奨の方法は、My Oracle Support (MOS) の Web サイトを使用することです。

次のセクションでは、物理メディアのリクエストを発行する際の大まかなタスクについて説明します。

- “[物理メディアのリクエスト用の情報を収集する](#)” on page 45
- “[物理メディアのリクエスト \(オンライン\)](#)” on page 46
- “[物理メディアのリクエスト \(電話\)](#)” on page 47

物理メディアのリクエスト用の情報を収集する

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次を行なってください。

- **製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必須パッチを入手します。** 最新のソフトウェアリリースバージョンおよびリクエストしているソフトウェアリリースのパッチの名前を知っていると、リクエストを実行しやすくなります。
- **My Oracle Support にアクセスできる場合** – “My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする” on page 44 の手順に従って、最新のソフトウェアリリースバージョンを確認し、入手可能なソフトウェアリリースパッケージ (パッチ) を表示します。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチの詳細検索結果」画面からほかのページに移動できます。
- **My Oracle Support にアクセスできない場合** – “ソフトウェアリリース” on page 42 の情報を使用して必要なソフトウェアリリースのパッチを特定し、最新のソフトウェアリリースバージョンのそれらのパッチをリクエストします。
- **送付先情報を用意します。** リクエストの際に、連絡先の名前、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および送付先住所を提供する必要があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

リクエストを行う前に、“物理メディアのリクエスト用の情報を収集する” on page 45 に記載されている情報を収集します。

1. **My Oracle Support の Web サイト (<http://support.oracle.com>) にアクセスします。**
2. **My Oracle Support にサインインします。**
3. ページの右上隅にある「問合せ」リンクをクリックします。
「サービス・リクエストの作成」の「問題」画面が表示されます。
4. リクエストを次のように記述します。
 - a. 「問題のサマリー」フィールドに **PMR for latest software release** と入力します。
 - b. 「問題タイプ」ドロップダウンリストからソフトウェアと OS メディア・リクエストに関する項目を選択します。
 - c. 「サポート ID」フィールドに、サポート契約に関連付けられたカスタマサポート ID を入力します。
5. 「サービス・リクエストの作成」の「ソリューション」画面をスキップするため、画面右上隅の「次へ」ボタンを 2 回クリックします。
「サービス・リクエストの作成」の「詳細」画面が表示されます。

6. 次のように、リクエストに関する追加情報を提供します。

a. 「追加情報」セクションで、次の表に記載した質問に答えます。

質問	回答
物理ソフトウェアメディアの送付リクエストですか。	はい
どの製品ラインに関するメディアのリクエストですか。	Sun 製品
パッチのダウンロードに必要なパスワードの確認ですか。	いいえ
CD/DVD でのパッチのリクエストですか。	はい
パッチを CD や DVD でリクエストする場合、パッチの番号、OS とプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
物理メディア送付を要望されている製品の名前とバージョンをリストしてください。	製品名: Oracle Server X5-2L バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
リクエストするメディアの OS とプラットフォームをお知らせください。	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここで OS を指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「一般」と入力します。
この送付に言語は必要ですか。	いいえ

b. 送付先/連絡先情報 (連絡先の名前、電話番号、電子メールアドレス、会社名、送付先住所など) を入力します。

7. 「次へ」 ボタンをクリックします。

「サービス・リクエストの作成: 重大度/連絡先」画面が表示されます。

8. 連絡先電話番号と好みの連絡手段を入力します。

9. 「発行」 ボタンをクリックします。

これで、物理メディアのリクエストが完了します。物理メディアを受け取るまで、最大 7 営業日かかる可能性があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

リクエストを行う前に、「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」 on page 45 に記載されている情報を収集します。

1. 次の Oracle Global Customer Support Contacts Directory にある該当する番号を使用して、Oracle サポートに電話をかけます。

<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>

2. **Oracle Server X5-2L の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を Oracle サポートに伝えます。**
 - My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースパッケージおよびパッチ番号の情報が得られる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
 - ソフトウェアリリースパッケージの情報が見つからない場合は、Oracle Server X5-2L の最新のソフトウェアリリースパッケージをリクエストします。

その他の方法によるアップデートのインストール

Oracle System Assistant や My Oracle Support を使用する方法のほかに、次のいずれかの方法を使って更新されたファームウェアやソフトウェアをインストールすることもできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller を使って Oracle から自動的に最新のファームウェアをダウンロードするか、Enterprise Controller 内にファームウェアを手動でロードできます。どちらの場合も、Ops Center で 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシ上にファームウェアをインストールできます。
詳細については、次にアクセスしてください。
<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html>
- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用すると、システム内部のファームウェアを更新できます。
詳細については、次にある Oracle Hardware Management Pack のドキュメントライブラリを参照してください。
<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs>
- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM の Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使って Oracle ILOM および BIOS のファームウェアを更新できます。
詳細は、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 のドキュメントライブラリを参照してください。
<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>

サーバーのラックへの設置

このセクションでは、ラックマウントキットのレール構成部品を使用して、サーバーをラック内に設置する方法について説明します。レール構成部品を購入された場合は、これらの手順に従ってください。

説明	リンク
設置の前提条件タスクをすべて完了します。	“設置の前提条件” on page 49
ラックがサーバーの設置要件を満たしていることを確認します。	“ラックの要件” on page 50
安全上の注意事項を確認します。	“サーバーのラックマウント作業時の安全対策” on page 50
ラックマウントキットのコンポーネントがすべて届いていることを確認します。	“ラックマウントキットの内容” on page 51
ラックを安定させます。	“取り付け用にラックを固定する” on page 52
サーバーに固定部品を取り付けます。	“固定部品を取り付ける” on page 53
ラックマウントの位置にマークを付けます。	“ラックの取り付け位置を決める” on page 55
工具不要のスライドレール構成部品をラックに取り付けます。	“工具不要スライドレール構成部品を取り付ける” on page 56
サーバーをスライドレール構成部品に取り付けます。	“スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け” on page 58
(オプション) サーバーケーブルを引き回すためのケーブル管理アームを装着します。	<ul style="list-style-type: none">■ “ケーブル管理アームを取り付ける” on page 60■ “ケーブル管理アームを取り外す” on page 73

関連情報

- [「設置手順について」 13 ページの](#)
- [「サーバーの設置準備」 17 ページの](#)

設置の前提条件

ラックマウント手順を開始する前に次のタスクが完了していることを確認します。

- サーバー用に購入したオプションのコンポーネントをすべて取り付けます。「[オプションのコンポーネントの取り付け](#)」27 ページのを参照してください。
- 設置サイトが、電気および環境に関する必須の要件を満たしていることを確認します。「[サーバーの設置準備](#)」17 ページのを参照してください。

ラックの要件

Oracle Server X5-2L を設置するラックは、次の表に示す要件を満たしている必要があります。Sun Rack II は Oracle Server X5-2L と互換性のあるラックです。Oracle Sun Rack II の詳細は、「[サーバーの設置準備](#)」17 ページのを参照してください。

TABLE 9 ラックの要件

項目	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。サポートされるラックタイプ: 四角穴 (9.5 mm) および丸穴 (M6 または 1/4-20 ネジのみ)。 2 ポストのラックとは互換性がありません。
ラックの横方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に準拠していること。
前方と後方取り付け面間の距離	61 から 91.5 cm (24 から 36 インチ)。
前方取り付け面の手前のクリアランスの奥行き	キャビネット前面ドアまでの距離が 2.54 cm (1 インチ) 以上あること。
前方取り付け面の背後のクリアランスの奥行き	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット背面ドアまで 90 cm (35.43 インチ) 以上、ケーブル管理アームを使用しない場合は 80 cm (31.49 インチ) 以上の間隔があること。
前方と後方取り付け面間のクリアランスの幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 45.6 cm (18 インチ) 以上であること。
保守用最小スペース	スペース、サーバー前面: 123.2 cm (48.5 インチ) スペース、サーバー背面: 91.4 cm (36 インチ)

関連情報

- 「[サーバーの設置準備](#)」17 ページの

サーバーのラックマウント作業時の安全対策

このセクションでは、サーバーをラックに設置する際に従う必要のある安全対策について説明します。



Caution - ラックの固定: 取り付け作業を開始する前に、装置ラックに転倒防止バーまたは転倒防止脚を設置してください。



Caution - 装置の搭載: 上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。



Caution - 動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラック構成部品またはマルチユニットのラック構成部品にサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内温度より高くなる場合があります。したがって、サーバーに対して指定されている最大周辺温度 (Tma) に適した環境に装置を設置することを検討するようにしてください。サーバーの環境要件については、「[環境要件](#)」21 ページのを参照してください。



Caution - 通気の減少: 装置をラック内に設置する際に、装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないようにしてください。



Caution - 機械荷重: 装置をラック内に取り付ける際に、不均等な機械荷重によって危険な状態が発生しないようにしてください。



Caution - 回路の過負荷: 電源回路への装置の接続、および回路の過負荷を想定した過電流保護や電源配線についても考慮するようにしてください。この問題に対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力を十分に配慮する必要があります。



Caution - 確実なアース: ラックマウント型装置にアースを確実に取り付けてください。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (テーブルタップの使用など) の場合は、特に注意を払うようにしてください。



Caution - 搭載した機器: スライドレールに搭載した機器を柵または作業スペースとして使用しないでください。

関連情報

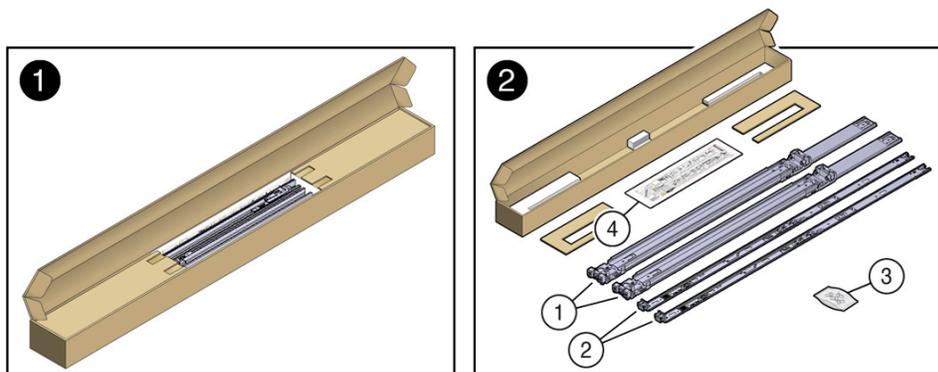
- 「[ESD と安全対策](#)」26 ページの

ラックマウントキットの内容

ラックマウントキットは、2つのスライドレール、2つの固定部品、オプションの取り付け用ネジで構成されます。

Note - オプションのスライドレールとケーブル管理アームを使用して、サーバーを 4 ポストラックに取り付ける簡単な手順については、ラックマウントキットの取り付け手順カードを参照してください。

FIGURE 5 工具不要ラックマウントキットの内容



図の説明

- 1 スライドレール
- 2 固定部品
- 3 4つの M4 x 5 細目固定部品取り付けネジ (使用しません)
- 4 取り付け手順カード

関連情報

- [“ラックの要件” on page 50](#)

▼ 取り付け用にラックを固定する



Caution - 作業員が負傷する危険性を低減するために、ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばしてから、サーバーを取り付けます。

次の手順の詳細な説明については、ラックのドキュメントを参照してください。

1. ラックキャビネットの前面ドアと背面ドアを開いて取り外します。

Note - 前面ドアと背面ドアは取り付け用ベイに当たる場合のみ取り外す必要があります。

2. 設置作業中にキャビネットが転倒しないように、ラックキャビネット前面の下部にある、ラックキャビネットの転倒防止脚または転倒防止バーをいっぱいに伸ばします。
3. 横転を防ぐための平行調整脚がラックの下部にある場合は、それらの調整脚を床まで完全に伸ばします。

関連情報

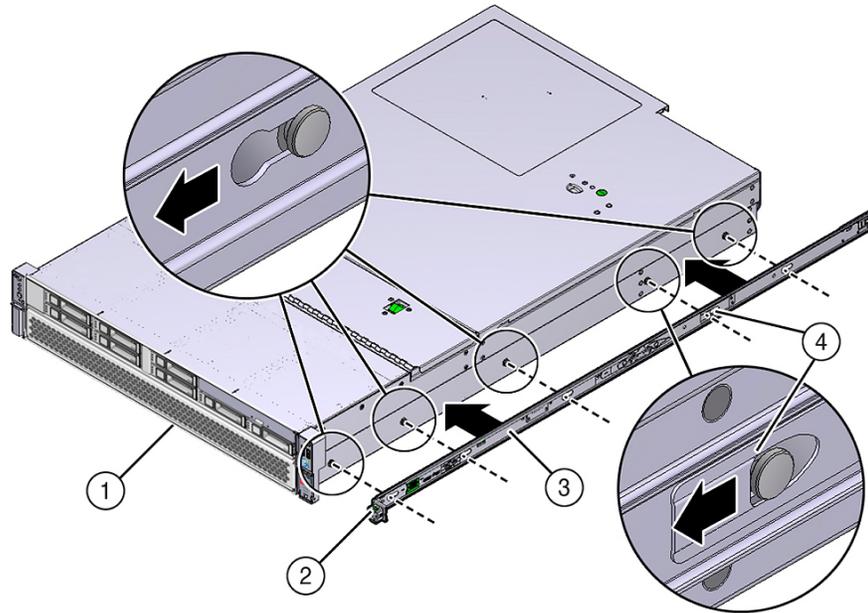
- [“サーバーのラックマウント作業時の安全対策” on page 50](#)
- [「サーバーの設置準備」17 ページの](#)
- [ラックキャビネットに関するドキュメント](#)
- [Oracle Server X5-2L 安全およびコンプライアンスに関するガイド](#)

▼ 固定部品を取り付ける

固定部品をサーバーの側面に取り付けるには:

1. スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の 5 つの鍵穴の開口部がシャーシの側面にある 5 つの位置決め用ピンと整列するように、シャーシに対して固定部品を位置決めします。

FIGURE 6 固定部品とサーバーシャーシの位置合わせ



図の説明

- 1 シャーシ前面
- 2 スライドレールロック
- 3 固定部品
- 4 固定部品クリップ

2. 5つのシャーシ位置決め用ピンの頭を固定部品の5つの鍵穴の開口部に挿入し、固定部品を、クリップがカチッと音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります。
3. 背面の位置決め用ピンが固定部品のクリップにかみ合っていることを確認します。
4. **Step 1** から**Step 3** を繰り返して、サーバーの反対側の側面に残りの固定部品を取り付けます。

関連情報

- “ラックの取り付け位置を決める” on page 55
- “工具不要スライドレール構成部品を取り付ける” on page 56

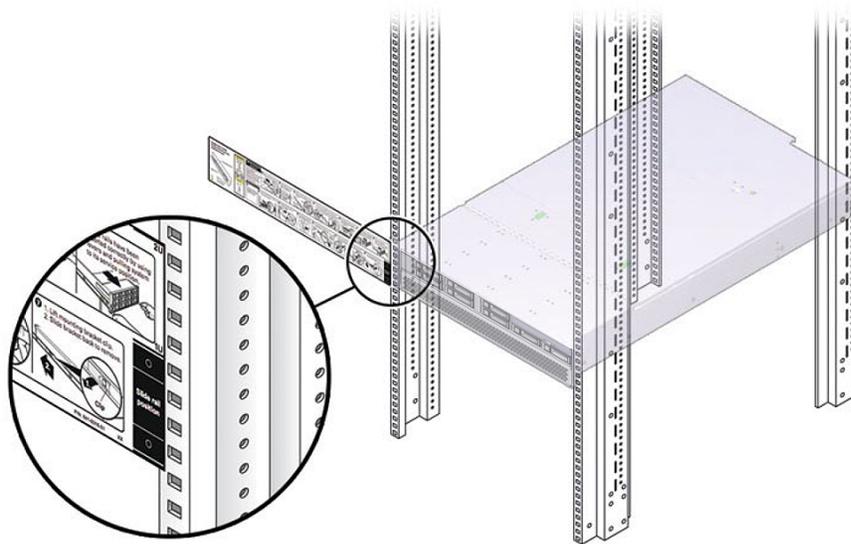
▼ ラックの取り付け位置を決める

ラックマウント取り付けカードを使用して、スライドレールの正しい取り付け穴を特定します。

Note - ラックには下から上に搭載してください。

1. ラックキャビネットに、サーバーを取り付けるために十分な高さがあることを確認します。
“ラックの要件” on page 50を参照してください。
2. ラックマウント取り付けカードを前面レールに差し込みます。
カード下端がサーバーの底に当たります。取り付けカードの下端から上向きに測ってください。

FIGURE 7 ラックマウント取り付けカードテンプレート



3. 前面のスライドレールの取り付け穴にマークを付けます。
4. 背面のスライドレールの取り付け穴にマークを付けます。

関連情報

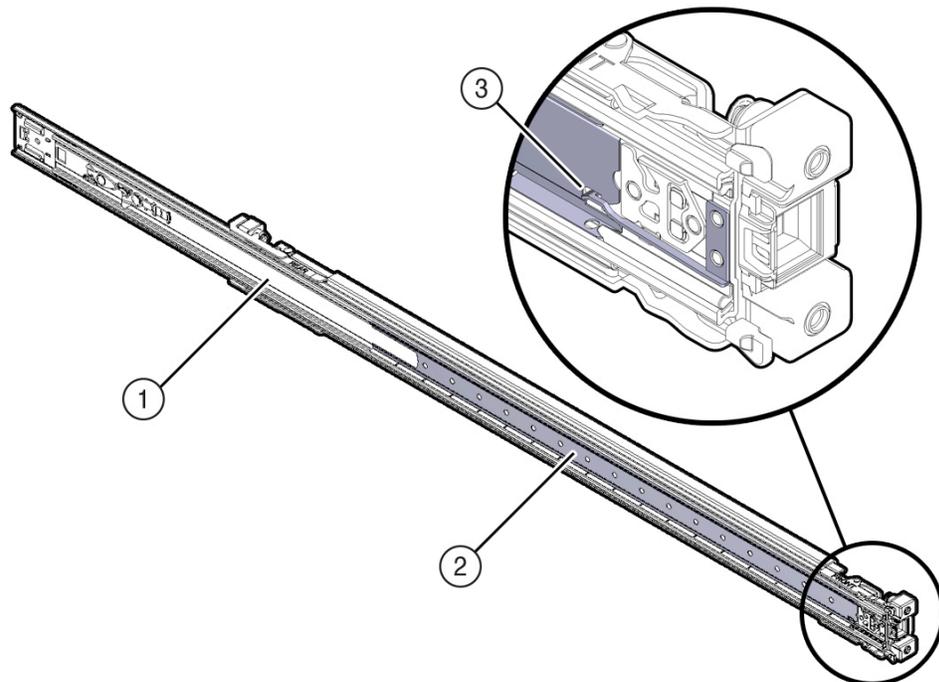
- “ラックの要件” on page 50
- “固定部品を取り付ける” on page 53
- “工具不要スライドレール構成部品を取り付ける” on page 56

▼ 工具不要スライドレール構成部品を取り付ける

この手順を使用して、工具不要スライドレール構成部品をラックに取り付けます。

1. 玉軸受けトラックが前方になり所定の位置にロックされるように、スライドレール構成部品の向きを合わせます。

FIGURE 8 スライドレールと玉軸受けトラックの向き合わせ

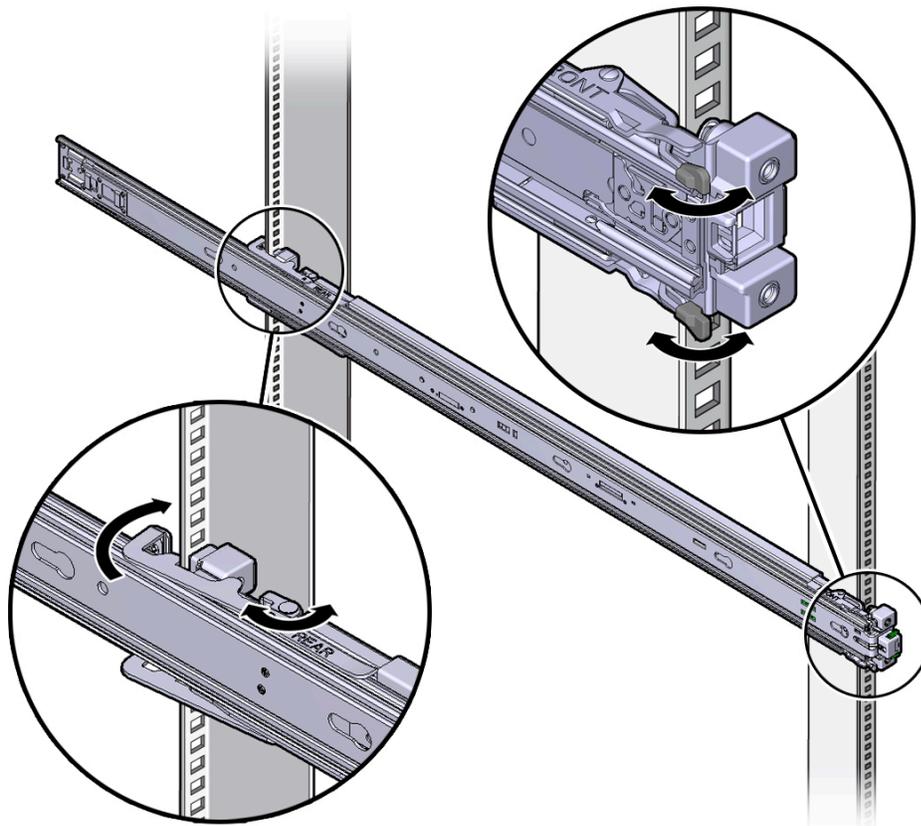


図の説明

- 1 スライドレール
- 2 玉軸受けトラック
- 3 ロックメカニズム

- 2. スライドレール構成部品の背面を背面ラックレールの内側に合わせ、カチッと音がして構成部品が固定されるまで押し込みます (ラックの左右のどちらの側から行なってもかまいません)。

FIGURE 9 スライドレール構成部品とラックの位置合わせ



3. スライドレール構成部品の前面を前面ラックレールの外側に合わせ、カチッと音がして構成部品が固定されるまで押し込みます。
4. **Step 1** から**Step 3** の手順を繰り返して、スライドレール構成部品をラックの反対側にも取り付けます。

関連情報

- “固定部品を取り付ける” on page 53
- “ラックの取り付け位置を決める” on page 55
- “スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け” on page 58

▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け

この手順を使用して、固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品に装着します。



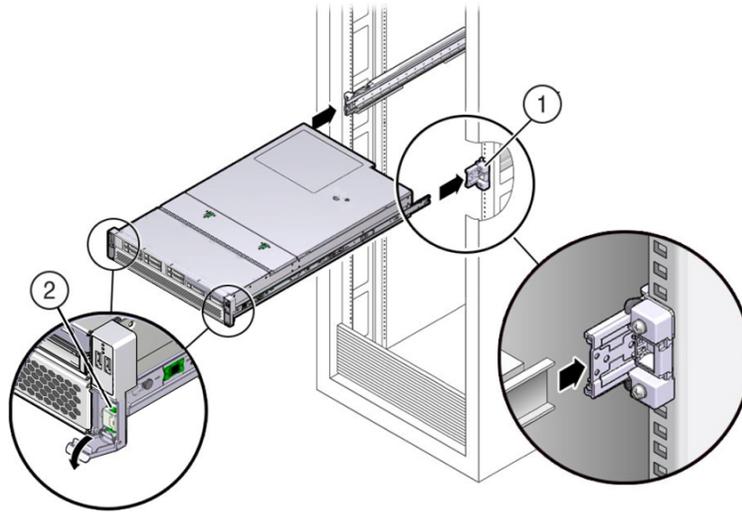
Caution - サーバーは重いので、この手順では少なくとも 2 名の作業者がが必要です。この手順を 1 人で実行すると、機器が損傷したり、作業員が負傷したりする可能性があります。



Caution - 上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。

1. スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能なかぎり奥まで押し込みます。
2. 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と合うようにサーバーを持ち上げます。
3. 固定部品をスライドレールに挿入し、固定部品がスライドレールの留め具に接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 30 cm (12 インチ))。

FIGURE 10 固定部品を取り付けたサーバーのスライドレールへの挿入

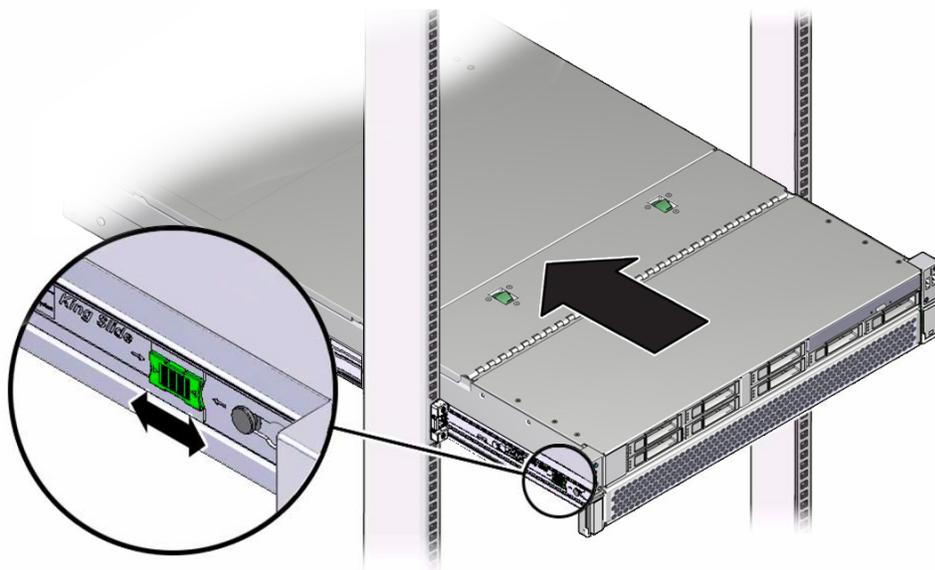


図の説明

- 1 固定部品をスライドレールに挿入する
- 2 スライドレールリリースレバー

4. 各固定部品のスライドレールリリースレバーを同時に引き下げた状態で、サーバーをラック内に押し込みます。固定部品の前面のスライドレールロックがスライドレール構成部品にかみ合うまで、サーバーをラックに押し込みます。
かみ合うと、カチッと音がします。

FIGURE 11 ラックへのサーバーのスライド



Caution - サーバーがラックに確実に固定されており、スライドレールのロックが固定部品とかみ合っていることを確認してから、オプションのケーブル管理アームを取り付けてください。

関連情報

- “ケーブル管理アームを取り付ける” on page 60

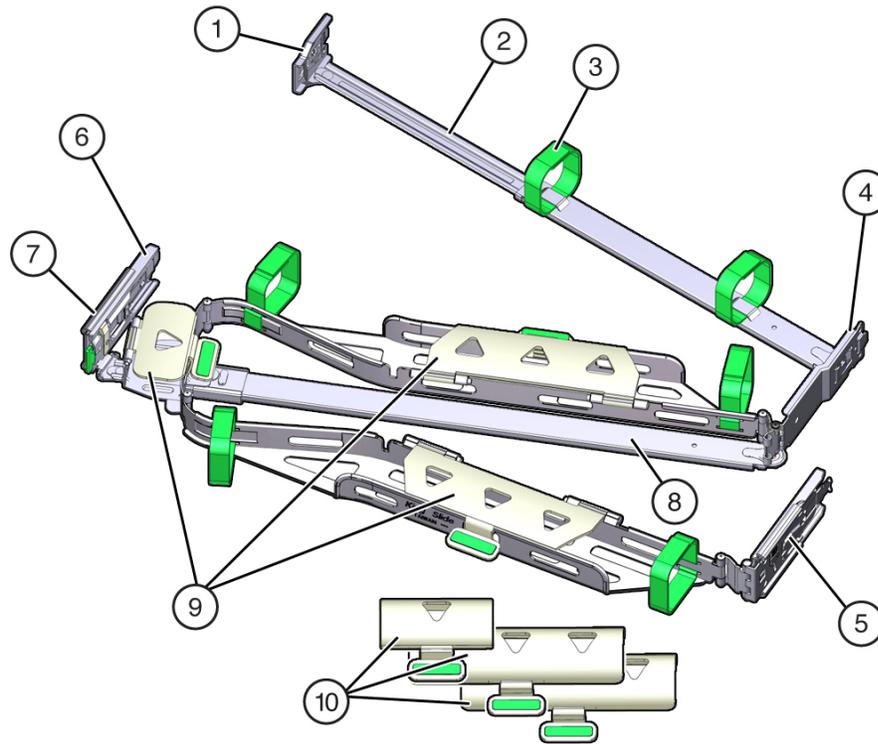
▼ ケーブル管理アームを取り付ける

この手順に従ってケーブル管理アーム (CMA) を取り付け、これを使用してサーバー背面に接続したケーブルを管理できます。

1. **CMA の梱包を解きます。**

次の図は CMA コンポーネントを示しています。

FIGURE 12 CMA コンポーネント



図の説明

- 1 コネクタ A
- 2 前部のスライドバー
- 3 ベルクロストラップ (6)
- 4 コネクタ B
- 5 コネクタ C
- 6 コネクタ D
- 7 コネクタ D に付いているスライドレールのラッチ部品
- 8 後部のスライドバー
- 9 Oracle Server X5-2L ケーブルカバー
- 10 Oracle Server X5-2L ケーブルカバー

2. CMA にサーバーの正しいケーブルカバーが取り付けられていることを確認します。

- Oracle Server X5-2L (1U システム) はフラットケーブルカバーを使用します。

- Oracle Server X5-2L (2U システム) はラウンドケーブルカバーを使用します。

Note - CMA は 3 つのフラットケーブルカバーが取り付けられた状態で出荷されます。CMA を Oracle Server X5-2L に取り付ける場合は、フラットケーブルカバーを取り外してラウンドケーブルカバーを取り付ける必要があります。

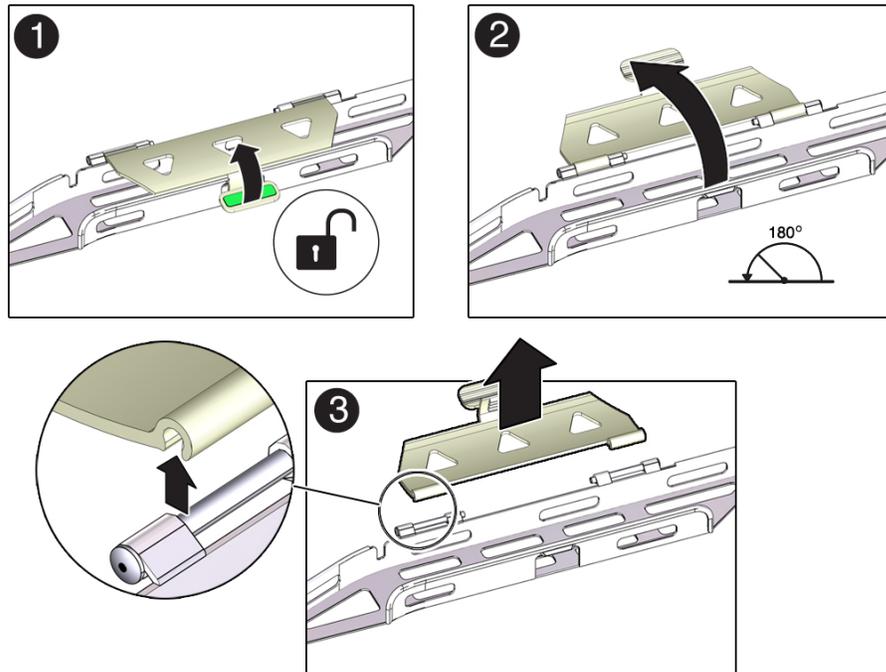
3. **CMA を Oracle Server X5-2L に取り付ける場合は、フラットケーブルカバーを取り外してラウンドケーブルカバーを取り付けてください。それ以外の場合は次の手順に進みます。**

フラットケーブルカバーを取り外してラウンドケーブルカバーを取り付けるには、これらの手順を実行します。

- a. 次の図 [図 1 および 2] に示すように、ケーブルカバーのハンドル (ハンドルには緑の色が付いています) を持ち上げて、水平位置まで **180 度**開きます。

Note - CMA には 3 つのケーブルカバーがあり、2 つのヒンジが付いたものが 2 つ (そのうち 1 つが次の図に示されています)、1 つのヒンジが付いたものが 1 つあります。Figure 12, “CMA コンポーネント,” on page 61 に 3 つのケーブルカバーがすべて示されています。

FIGURE 13 CMA フラットケーブルカバーの取り外し



- b. それぞれのヒンジコネクタの外側を、ヒンジコネクタがヒンジから外れるまで押し上げます [図枠 3]。
- c. **Step 3a** と **Step 3b** を繰り返して、3つのケーブルカバーをすべて取り外します。
- d. それぞれのラウンドケーブルカバーを一度に1つずつヒンジの上に水平に置き、ヒンジコネクタをヒンジに合わせます。
- e. それぞれのヒンジコネクタを親指で押し下げて、ヒンジコネクタを所定の位置にパチンと閉めます。
- f. ケーブルカバーを下にぶら下げて、ケーブルカバーのハンドルを押し下げて閉じた位置に固定します。

4. 6つのベルクロストラップが、[Figure 12, “CMA コンポーネント,” on page 61](#) に示されているように CMA に通されていることを確認します。

Note - 前部のスライドバーにある2つのベルクロストラップが、[Figure 12, “CMA コンポーネント,” on page 61](#) に示されているようにスライドバーの上部の開口部に通されていることを確認します。これにより、サーバーをラックから引き出したりラックに戻したりするときに、ベルクロストラップがスライドバーの伸縮を妨げなくなります。

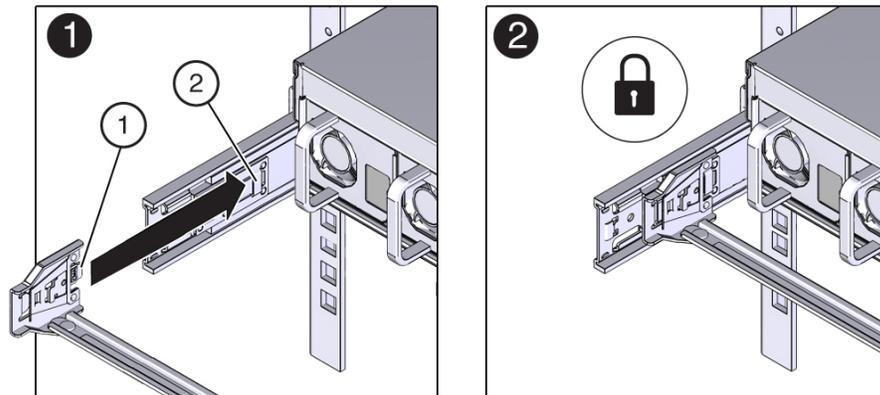
5. CMA を取り付けやすくするため、サーバーをラックの前面から約 13 cm (5 インチ) 伸ばします。
6. CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

Note - この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

Note - この取り付け手順の全体を通して CMA を支えて、4つのすべての接合点で固定されるまではそれ自体の重さで垂れ下がることがないようにしてください。

7. CMA のコネクタ A を右側のスライドレールに取り付けるには:
 - a. CMA のコネクタ A を、カチッと音がして固定されるまで、左側スライドレールの前面スロットに差し込みます [図 1 および 2]。
コネクタ A の爪 (吹き出し番号 1 を参照) がスライドレールの前面スロット (吹き出し番号 2) に入ります。
 - b. 前部のスライドバーの右側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ A が適切に固定されていることを確認します。

FIGURE 14 左側スライドレールへのコネクタ A の取り付け



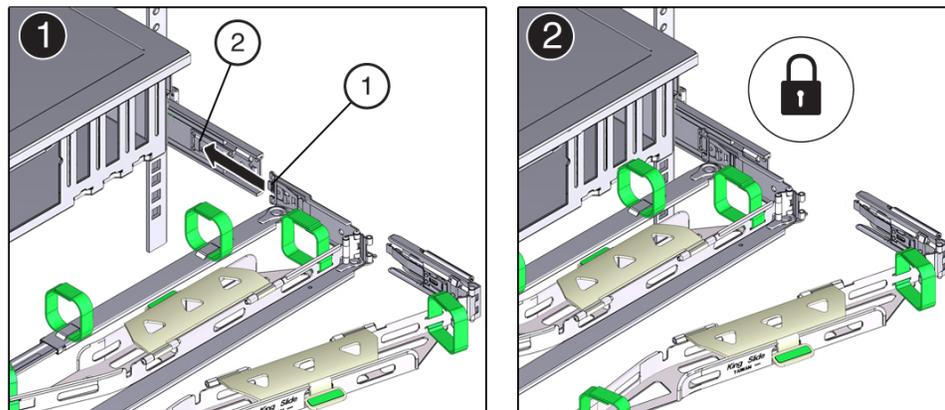
図の説明

- 1 コネクタ A の爪
- 2 左側スライドレールの前面スロット

8. CMA のコネクタ B を右側スライドレールに取り付けるには:

- a. CMA のコネクタ B を、カチッと音がして固定されるまで、右側スライドレールの前面スロットに差し込みます [図枠 1 および 2]。
コネクタ B の爪 (吹き出し番号 1 を参照) がスライドレールの前面スロット (吹き出し番号 2) に入ります。
- b. 前部のスライドバーの右側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ B が適切に固定されていることを確認します。

FIGURE 15 右側スライドレールへのコネクタ B の取り付け



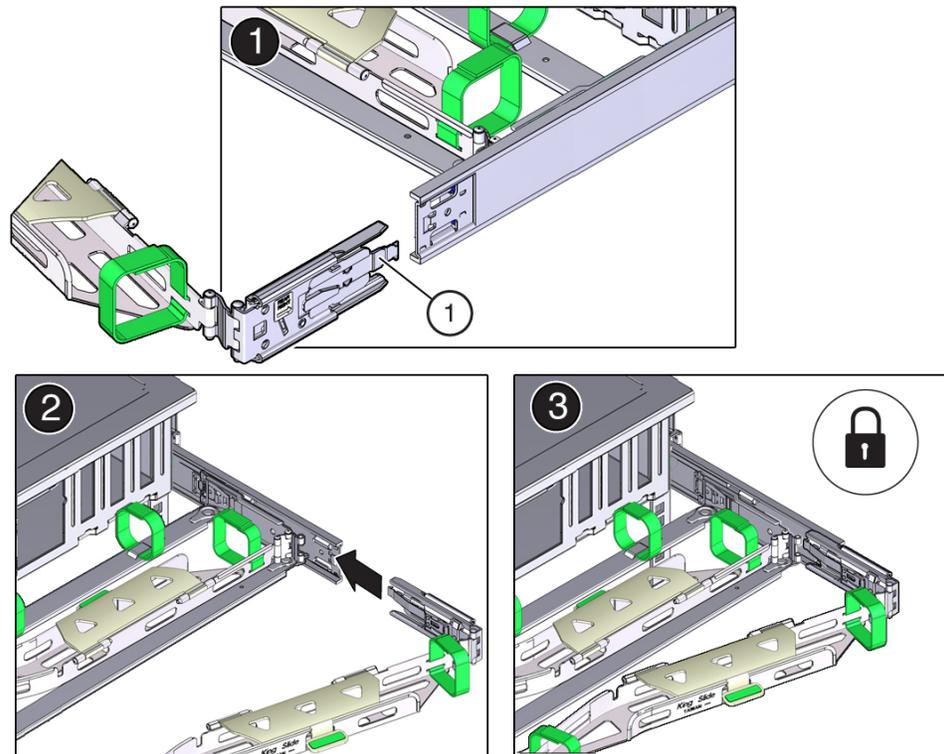
図の説明

- 1 コネクタ B の爪
- 2 右側スライドレールの前面スロット

9. CMA のコネクタ C を右側スライドレールに取り付けるには:

- a. 固定スプリング (吹き出し番号 1) が右側スライドレールの内側 (サーバー側) になるように、コネクタ C をスライドレールの位置に合わせます [図枠 1]。

FIGURE 16 右側スライドレールへのコネクタ C の取り付け



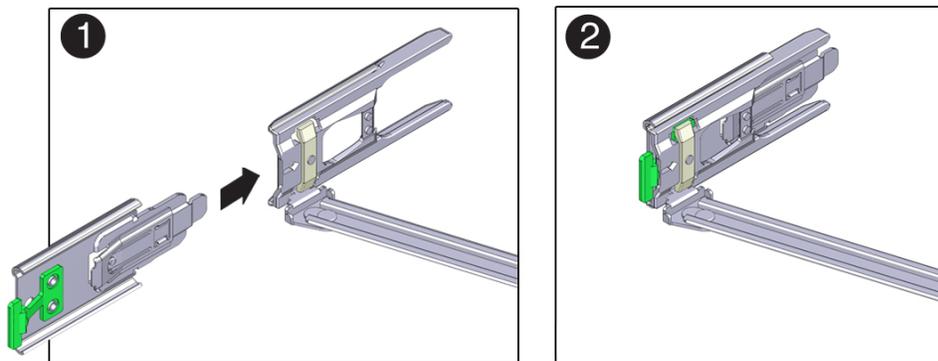
図の説明

1 コネクタ C の固定スプリング

- b. コネクタ C を、カチッと音がして固定されるまで、右側スライドレールに差し込みます [図枠 2 および 3]。
 - c. CMA の後部のスライドバーの右側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ C が適切に固定されていることを確認します。
10. CMA のコネクタ D を取り付ける準備をするため、スライドレールのラッチ部品をコネクタ D に固定するテープを取り外して、ラッチ部品とコネクタ D の位置が合うことを確認します [図枠 1 および 2]。

Note - CMA はスライドレールのラッチ部品がコネクタ D にテープで貼られた状態で出荷されます。このコネクタを取り付ける前に、テープを取り外す必要があります。

FIGURE 17 CMA スライドレールのラッチ部品とコネクタ D の位置合わせ



11. CMA のコネクタ D を左側のスライドレールに取り付けるには:

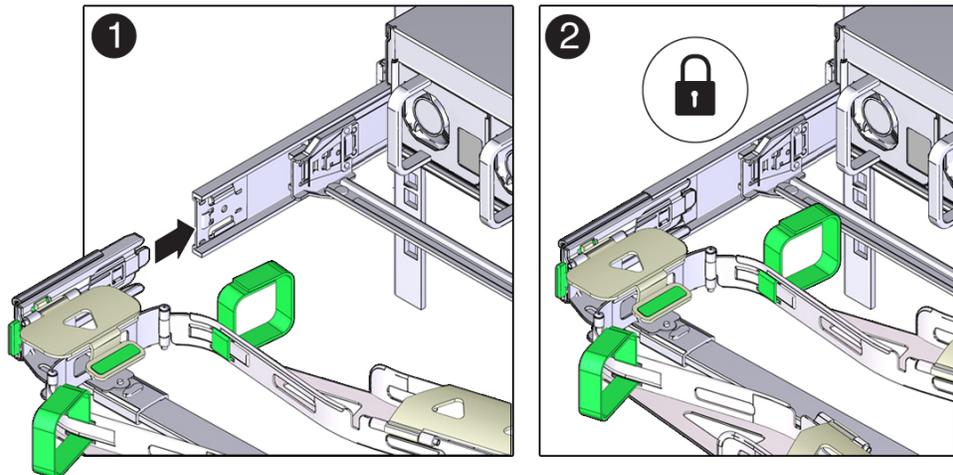
- a. スライドレールのラッチ部品を適切な位置で支えながら、コネクタ D と対応するスライドレールのラッチ部品を、カチッと音がして固定されるまで、左側スライドレールに差し込みます [図枠 1 および 2]。

Note - コネクタ D をスライドレールに差し込む際の推奨される簡単な方法は、コネクタ D とラッチ部品を 1 つの構成部品としてスライドレールに取り付けることです。

- b. CMA のスライドバーの左側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ D が適切に固定されていることを確認します。

Note - スライドレールのラッチ部品には緑色のリリース爪が付いています。このタブを使用してラッチ部品を解除し取り外して、コネクタ D を取り外すことができますようにします。

FIGURE 18 左側スライドレールへのコネクタ D の取り付け



12. 4つのCMA接続ポイントを静かに力を入れて引っ張り、CMAコネクタがしっかり固定されていることを確認してから、CMAがそれ自体の重さで垂れ下がるようにします。
13. CMAにケーブルを通す前にスライドレールとCMAが適切に動作することを確認するには:
 - a. サーバーの引き出し時にラックが前方に倒れないように、ラックのすべての転倒防止装置を伸ばします。

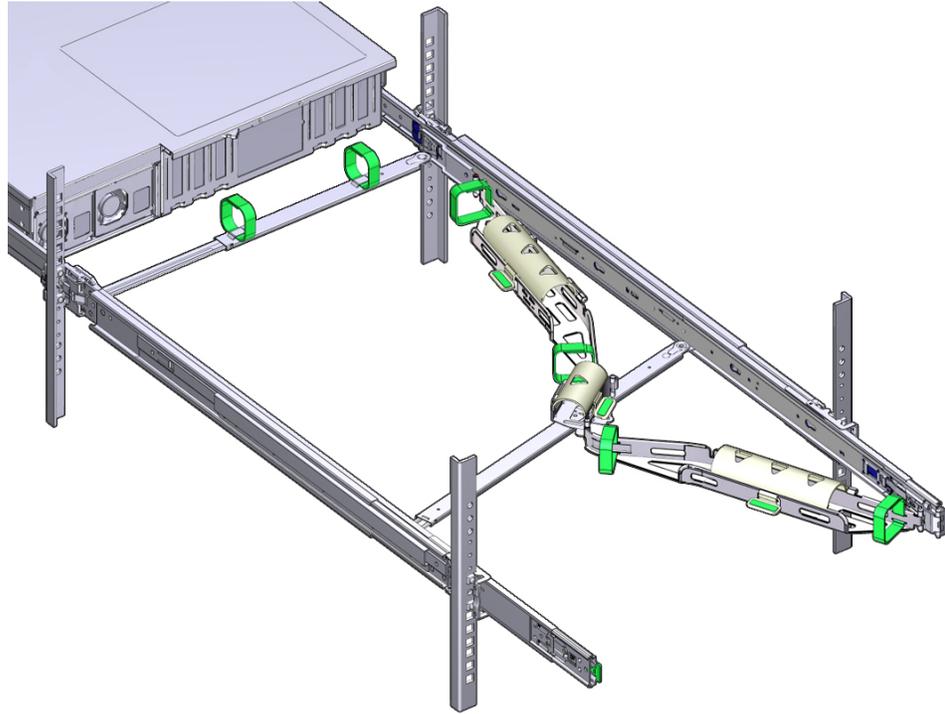


Caution - 作業員が負傷する危険性を低減するために、ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばしてから、ラックからサーバーを引き出してください。

ラックの固定手順については、“[取り付け用にラックを固定する](#)” on page 52を参照してください。

- b. CMAがいっぱい伸びるまで、ラックの前面からサーバーを引き出します。

FIGURE 19 いっぱいまで伸びた CMA

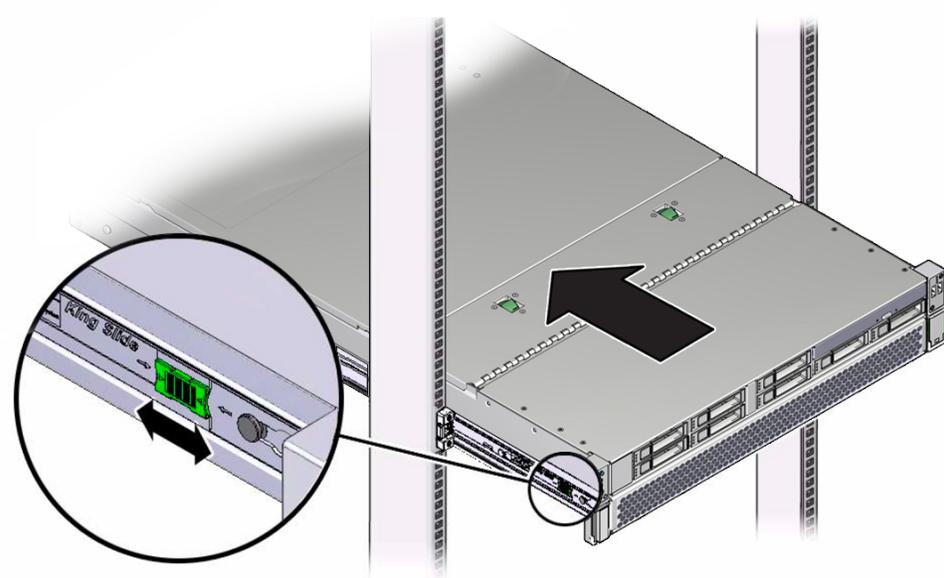


14. サーバーをラックに戻すには:

- a. 2つの緑色のリリース爪 (サーバーの各側面に1つずつ) をサーバーの前面方向へ同時に引きながら、サーバーをラックに押し込みます。サーバーをラック内に押し込むときに、CMA が固着することなく元に戻ることを確認してください。

Note - 緑色のリリース爪を引っ張るには、それぞれの爪の端ではなく中央に指を置いて、サーバーの前面に向けて爪を引っ張るように圧力をかけます。

FIGURE 20 スライドレールのリリース爪の位置

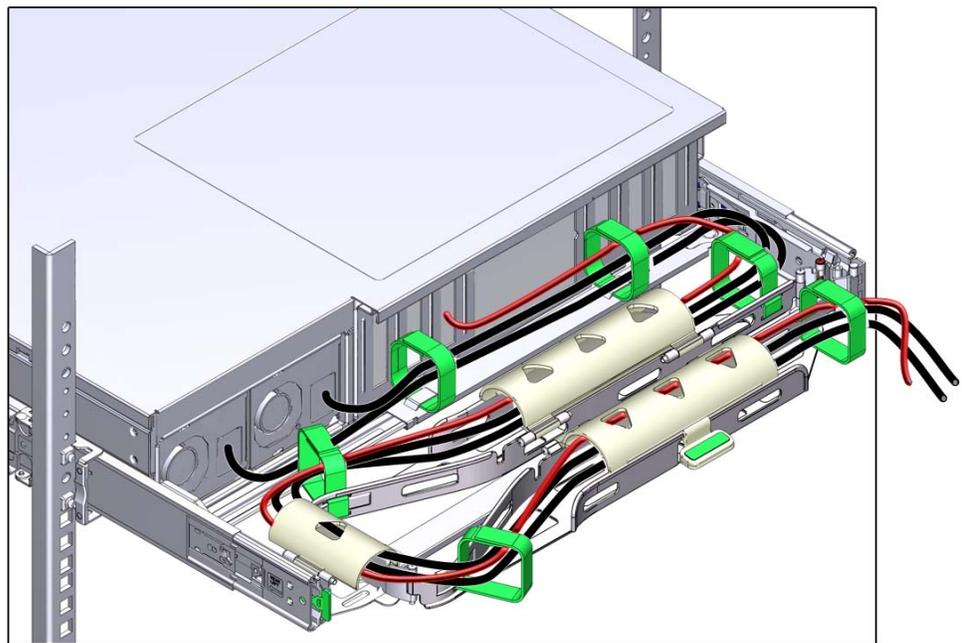


- b. サーバーの前面にあるスライドレールのロックがスライドレール構成部品とかみ合うまで、サーバーをラックに押し込みます。
サーバーが通常のラック位置に戻ると、カチッと音がします。

- 15. 必要に応じて、ケーブルをサーバーに接続します。
サーバーケーブルの接続方法については、“[サーバーの配線](#)” on page 81を参照してください。
- 16. **CMA** ケーブルカバーを開いて、**CMA** のケーブル通し口にサーバーケーブルを通し、ケーブルカバーを閉じて6つのベルククロストラップでケーブルを固定します。
次の順番で、ケーブル通し口にケーブルを通します。
 - a. 最初に最前面のケーブル通し口に通します
 - b. 次に小さいケーブル通し口に通します
 - c. 次に最背面のケーブル通し口に通します

Note - 前部のスライドバーにあるベルクロストラップでケーブルを固定するときは、ベルクロストラップがスライドバーの底部に巻き付いていないことを確認してください。そうしないと、ラックからサーバーを引き出したりラックに戻したりするときにスライドバーの伸縮が妨げられる場合があります。

FIGURE 21 ケーブルが取り付けられ、ケーブルカバーが閉じていて、ケーブルがベルクロストラップで固定されている CMA



17. 固定されたケーブルが、接続されているサーバーの上部の上や底面の下に伸びていないことを確認します。そうしないと、ラックからサーバーを引き出したりラックに戻したりしたときに、ケーブルがラックに取り付けられたほかの装置の邪魔になる場合があります。

Note - 必要に応じて、ほかの装置に接近しないように、追加のベルクロストラップを使ってケーブルを束ねてください。追加のベルクロストラップを取り付ける必要がある場合は、CMA コンポーネントではなく、ケーブルだけをストラップで巻いてください。そうしないと、サーバーをラックから引き出したりラックに戻したりするときに CMA スライドバーの伸縮が妨げられる場合があります。

関連情報

- “ケーブル管理アームを取り外す” on page 73

▼ ケーブル管理アームを取り外す

ケーブル管理アーム (CMA) を取り外すには、この手順に従います。

この手順を始める前に、[Figure 12, “CMA コンポーネント,” on page 61](#) を参照して、CMA コネクタ A、B、C、および D を確認します。CMA コネクタは取り付けられたときと逆の順番で、つまり、最初にコネクタ D、次に C、次に B、最後に A を取り外してください。

この手順の全体を通して、CMA の 4 つのコネクタのいずれかを取り外したあとに、CMA がそれ自体の重さで垂れ下がらないようにしてください。

Note - この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

1. サーバーの引き出し時にラックが前方に倒れないように、ラックのすべての転倒防止装置を伸ばします。



Caution - 作業員が負傷する危険性を低減するために、ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばしてから、ラックからサーバーを引き出してください。

ラックの固定手順については、“[取り付け用にラックを固定する](#)” on page 52 を参照してください。

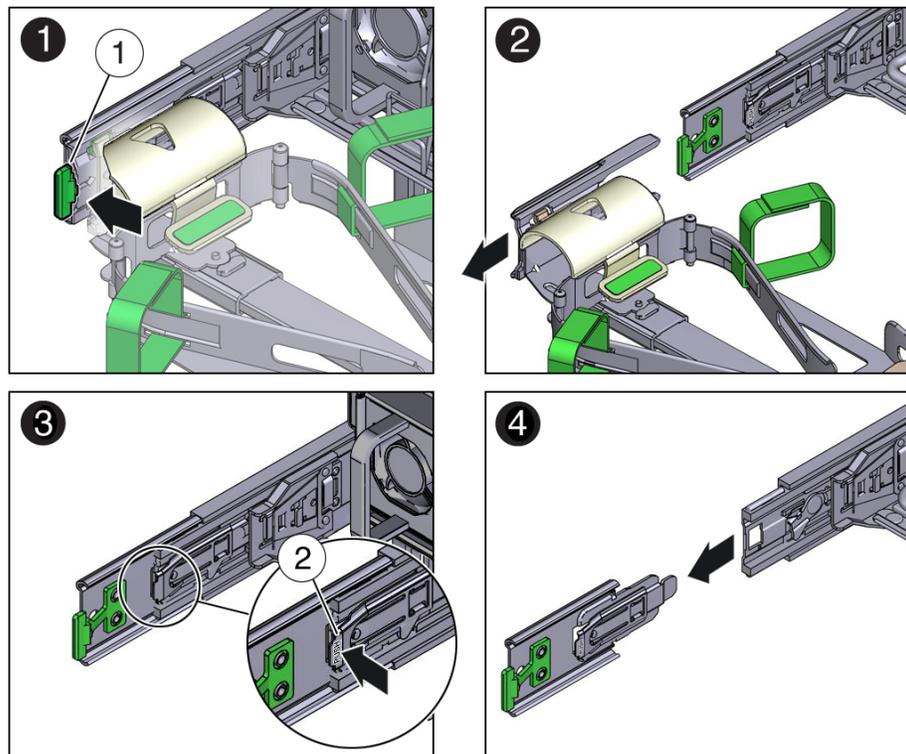
2. CMA を取り外しやすくするため、サーバーをラックの前面から約 13 cm (5 インチ) 引き出します。
3. CMA からケーブルを取り外すには:
 - a. サーバーの背面からすべてのケーブルを外します。
 - b. 該当する場合は、ケーブルを束ねるために取り付けられた追加のベルクロストラップを取り外します。
 - c. ケーブルを固定している 6 つのベルクロストラップを外します。
 - d. 3 つのケーブルカバーを完全に開いた位置まで開きます。
 - e. CMA からケーブルを取り外して横に置きます。

4. コネクタ D を取り外すには:

- a. スライドレールのラッチ部品の緑色のリリース爪 (吹き出し番号 1) を左側に押し、コネクタ D をスライドさせて左側スライドレールから外します [図枠 1 および 2]。
コネクタ D をスライドさせて左側スライドレールから外したとき、コネクタのスライドレールラッチ部品部分の位置はそのままです。次の手順で外します。

Note - コネクタ D を外したあと、決して CMA がそれ自体の重さで垂れ下がらないようにしてください。この手順の残りの部分では、残りのすべてのコネクタを外して CMA を平らな面に置くことができるようになるまで、CMA を支えておく必要があります。

FIGURE 22 コネクタ D の取り外し



図の説明

- 1 コネクタ D のリリース爪 (緑色)

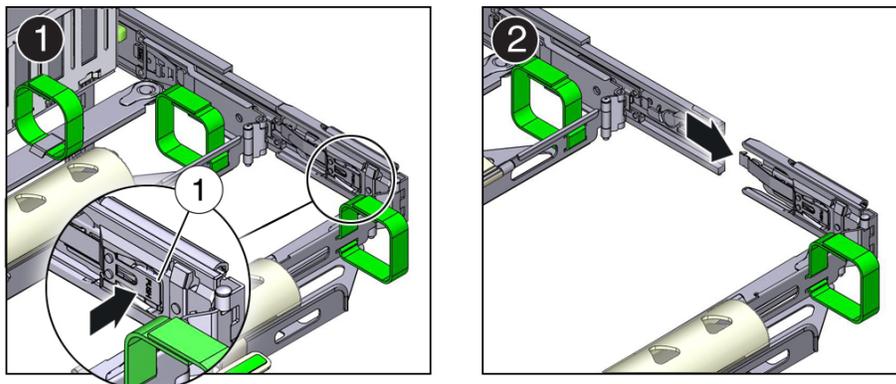
2 スライドレールのラッチ部品のリリース爪 (PUSH というラベル付き)

- b. 右手で CMA を支えて、左手の親指でコネクタ D のラッチ部品の PUSH というラベルの付いたリリース爪 (吹き出し番号 2) を左側に押し、左側スライドレールからラッチ部品を引き出して、横に置いておきます [図枠 3 および 4]。

5. コネクタ C を取り外すには:

- a. 左腕を CMA の下に置いて CMA を支えます。
- b. 右手の親指で PUSH (吹き出し番号 1) のラベルの付いたコネクタ C のリリース爪を (右に) 押し、コネクタ C を右側スライドレール [図枠 1 および 2] から引き出します。

FIGURE 23 コネクタ C の取り外し



図の説明

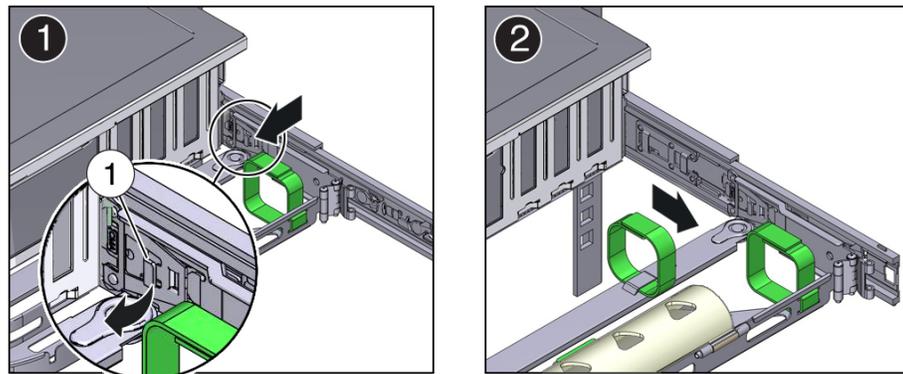
- 1 コネクタ C のリリース爪 (PUSH というラベル付き)

6. コネクタ B を取り外すには:

- a. 右腕を CMA の下に置いて CMA を支え、右手でコネクタ B の後端をつかみます。

- b. 左手の親指で、コネクタ B のリリースレバーを左側に引っ張って右側スライドレールから外し (吹き出し番号 1)、右手でコネクタをスライドレールから引き出します [図枠 1 および 2]。

FIGURE 24 コネクタ B の取り外し

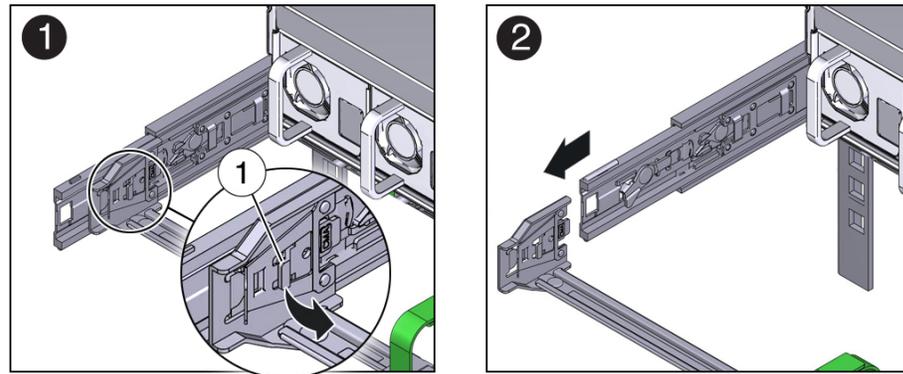


図の説明

- 1 コネクタ B のリリースレバー

7. コネクタ A を取り外すには:
 - a. 左腕を CMA の下に置いて CMA を支え、左手でコネクタ A の後端をつかみます。
 - b. 右手の親指で、コネクタ A のリリースレバーを右側に引っ張って左側スライドレールから外し (吹き出し番号 1)、左手でコネクタをスライドレールから引き出します [図枠 1 および 2]。

FIGURE 25 コネクタ A の取り外し



図の説明

1 コネクタ A のリリースレバー

8. CMA をラックから取り外して平らな面の上に置きます。
9. サーバーの前面に移動して、サーバーをラックに押し込みます。

関連情報

- “ケーブル管理アームを取り付ける” on page 60

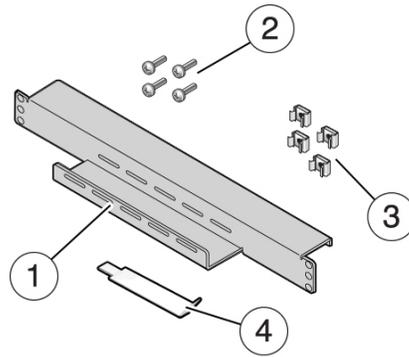
▼ ケーブル溝付き出荷用留め具を取り付ける

ラック内のサーバーを出荷する場合、そのサーバーの下に1つ以上のラックユニットスペースが空いている場合は、サーバーの損傷を防ぐためケーブル溝付き出荷用留め具を取り付ける必要があります。ラック内の各サーバーで、この要件を満たす留め具を使用する必要があります。

ケーブル溝付き出荷用留め具は別注文できるオプションです。ケーブル溝付き出荷用留め具の注文方法の詳細は、Oracle の販売担当者に確認してください。

1. ケーブル溝付き出荷用留め具と付属コンポーネントを開梱します。
取り付けには次のコンポーネントが必要になります。

FIGURE 26 ケーブル溝付き出荷用留め具の取り付けに必要なコンポーネント



図の説明

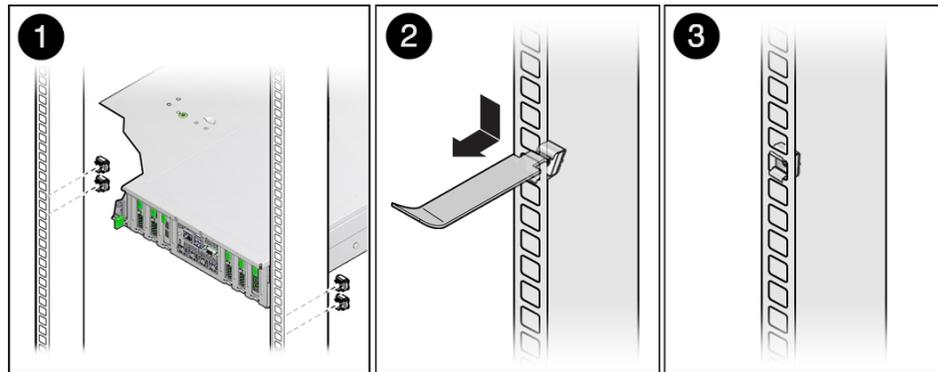
- 1 ケーブル溝付き出荷用留め具
- 2 4本の 16 mm M6 ねじ
- 3 ケージナット (4本)
- 4 ケージナット挿入ツール

2. 角穴 RETMA レールで構成されているラックの場合、ケージナット 4 つを次のように取り付けます。

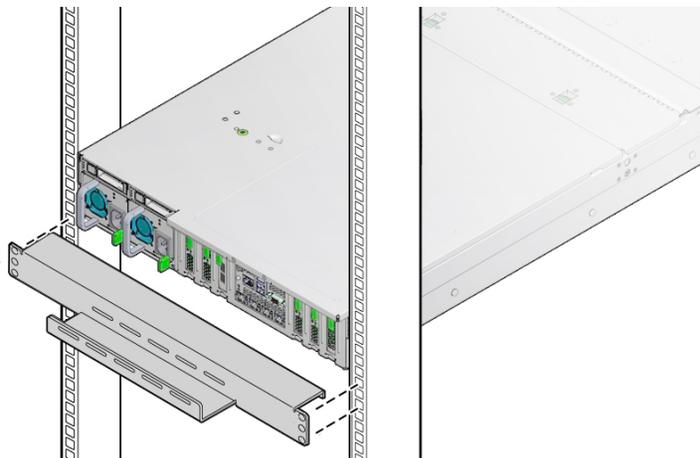
Note - ねじ式 RETMA レールで構成されているラックの場合、この段階は不要です。

- a. 装置の位置合わせテンプレートまたは装置のほかのドキュメントを利用し、サーバーの背面パネル下方、シャーシの両サイドに沿って 1 番目と 3 番目のレール穴を確認します。[1]
- b. ケージナットを取り出し、ケージナットの下の方の口先をレール穴の 1 つに引っかけます。
- c. ケージナット取り付け工具をレール穴に通し、ケージナットの上の方の口先に引っかけます。[2]
- d. ケージナットの上の方の口先がカチッと音を立てるまで、取り付け工具を使用してケージナットを穴の中に引き込んで締め込みます。

- e. 残りのケージナットについても段階 2a - 段階 2d を繰り返します。

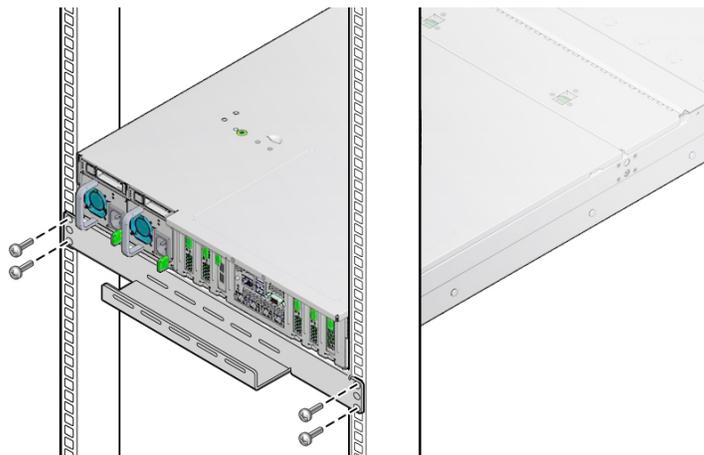


3. ケーブル溝を上向きにして、サーバーシャーシ背面の底の下に留め具をスライドさせ、留め具の上部の穴とサーバー背面パネル下方にある 1 番目のレール穴を整合させます。



4. プラスのねじ回し (Phillips の 2 番) を使用し、16 mm M6 ねじ 4 本を使用して留め具をラックに固定します。

留め具がサーバーシャーシの下部にしっかり収まっていることを確認します。



5. 必要に応じて、サーバーのバックパネルから出ているケーブルをケーブル溝に収めます。

サーバーの配線

このセクションでは、データおよびサーバー管理用のケーブルと電源コードをサーバーに接続する手順について説明します。

説明	リンク
コネクタポートの場所を確認します。	“背面のケーブル接続およびポート” on page 81
サーバーの Ethernet ポートについて学習します。	“Ethernet ポート” on page 83
サーバーにケーブルを接続します。	“データケーブルを接続する” on page 84
サーバーに電源コードを接続します。	“電源コードを接続する” on page 85

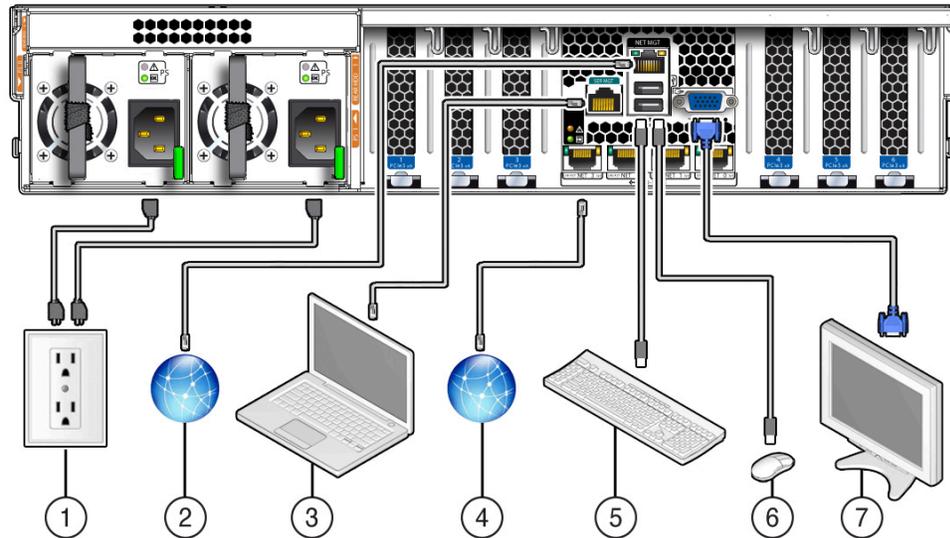
関連情報

- 「設置手順の概要」13 ページの
- “ケーブル管理アームを取り付ける” on page 60
- “Oracle ILOM への接続” on page 87
- “Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定” on page 109

背面のケーブル接続およびポート

次の図に、Oracle Server X5-2L の背面のケーブルコネクタとポートの位置、およびそれらに接続する主なケーブルとデバイスを示します。

FIGURE 27 背面パネルのケーブル接続のリファレンス



No.	ケーブルポートまたは拡張スロット	説明
1	電源装置 0 の入力電源 電源装置 1 の入力電源	<p>サーバーには、各電源装置に 1 つずつ、計 2 つの電源装置コネクタがあります。</p> <p>サーバーにデータケーブルを接続し終わるまでは、電源ケーブルを電源装置に接続しないでください。サーバーがスタンバイ電源モードになり、AC 電源ケーブルを電源に接続すると、Oracle ILOM サービスプロセッサが初期化されます。サーバーが端末、PC、またはワークステーションに接続されていないと、60 秒後にシステムメッセージが失われる場合があります。</p> <p>Note - 設置済み電源装置の中に AC 電源に接続されていないものがあると冗長性が失われる可能性があるため、Oracle ILOM は障害を示すシグナルを送信します。</p>
2	ネットワーク管理ポート (NET MGT)	<p>サービスプロセッサの NET MGT ポートは、Oracle ILOM サービスプロセッサへのオプションの接続です。NET MGT ポートは、デフォルトでは、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用するように構成されています。サービスプロセッサの NET MGT ポートでは、10/100/1000BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。</p>
3	シリアル管理ポート (SER MGT)	<p>サービスプロセッサの SER MGT ポートは、RJ-45 ケーブルを使用しており、Oracle ILOM サービスプロセッサへのデフォルトの接続です。このポートはサーバーへのローカル接続を行い、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) コマンドのみを認識します。端末または端末エミュレータは通常、このポートに接続します。</p>

No.	ケーブルポートまたは拡張スロット	説明
		Note - このポートは、ネットワークへの接続をサポートしていません。
4	Ethernet ポート (NET 3、NET 2、NET 1、NET 0)	4つの10ギガビット Ethernet ポートにより、システムをネットワークに接続できます。詳細は、“Ethernet ポート” on page 83を参照してください。 Note - シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。
5、6	USB ポート (USB 0、USB 1)	2つの USB ポートはホットプラグ対応です。サーバーの実行中に、システムの動作に影響を与えることなく、USB ケーブルや周辺デバイスを接続したり切り離したりできます。
7	ビデオポート (VGA)	15ピンのビデオケーブルを使用すると VGA ビデオデバイスをサーバーに接続できます。オプションで、オペレーティングシステムのインストール時に VGA ポートに接続することもできます。

関連情報

- “Ethernet ポート” on page 83
- “データケーブルを接続する” on page 84
- “電源コードを接続する” on page 85

Ethernet ポート

サーバーには、サーバーの背面パネルの左から右に、NET 3、NET 2、NET 1、および NET 0 のラベルの付いた、4つの RJ-45 10ギガビット Ethernet (10GbE) ネットワークコネクタがあります。これらのポートを使用して、サーバーをネットワークに接続します。

Note - シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET2 および NET3 は機能しません。

各 NET ポートの上にある LED は、ポートごとに、左側がリンク/動作状態インジケータ、右側が速度インジケータです。次の表に、Ethernet の転送速度と速度 LED の色の一覧を示します。

接続タイプ	IEEE 用語	速度 LED の色	転送速度
Fast Ethernet	100BASE-TX	消灯	100M ビット/秒
ギガビット Ethernet	1000BASE-T	オレンジ色	1,000M ビット/秒
10ギガビット Ethernet	10GBASE-T	緑色	10,000M ビット/秒

関連情報

- “背面のケーブル接続およびポート” on page 81

- “データケーブルを接続する” on page 84
- “電源コードを接続する” on page 85

▼ データケーブルを接続する

サーバーのケーブル接続の位置を確認するには、[Figure 27, “背面パネルのケーブル接続のリファレンス,” on page 82](#) を参照してください。

1. (推奨) ホストへの直接接続のためのサーバー配線を行うには、次を実行します。
 - a. VGA モニターをサーバーの VGA ポートに接続します。
 - b. USB キーボードおよびマウスをサーバーの USB コネクタに接続します。
2. サービスプロセッサ (SP) への接続のためのサーバー配線を行うには、次を実行します。
 - **SP へのローカルシリアル接続の場合** –サーバーのシリアル管理ポート (SER MGT) と端末デバイスとをシリアルケーブルで接続します。

この接続で、SP との最初の通信が行われます。端末デバイスを次の設定で構成します: 115200 ボー、8 データビット、1 ストップビット、パリティなし。

DTE 間の通信の場合、付属の RJ-45 クロスオーバーアダプタと標準 RJ-45 ケーブルを使用して、ヌルモデム接続を設定します。ヌルモデム接続では、送信および受信の信号がクロスオーバーします。
 - **SP へのリモート Ethernet 接続の場合** –サーバーのネットワーク管理ポート (NET MGT) と、SP に将来接続されるネットワークとを Ethernet ケーブルで接続します。

DHCP および IPv6 ステートレス自動構成がデフォルトで有効であるため、ネットワーク上の DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターによって SP に自動的に IP アドレスが割り当てられます。
3. ネットワークアクセスの場合、サーバーの NET ポート (NET3-0) とサーバーの通信先となるネットワークとを Ethernet ケーブルで接続します。

Note - シングルプロセッサシステムでは、Ethernet ポート NET 2 および NET 3 は機能しません。

関連情報

- “背面のケーブル接続およびポート” on page 81
- “Ethernet ポート” on page 83

▼ 電源コードを接続する



Caution - “データケーブルを接続する” on page 84で説明した SP やホストのネットワーク接続が完了するまで、電源コードをサーバーに接続しないでください。サーバーに含まれるサービスプロセッサ (SP) は、ホストシステムの構成やブートを行うために使用します。SP やホストのネットワークケーブルを先に接続しておけば、ホストシステムの構成や SP メッセージの表示を適切に行えます。

1. 設置された各電源装置について、アースされた 1 本のサーバー電源コードをアースされたコンセントに接続します。

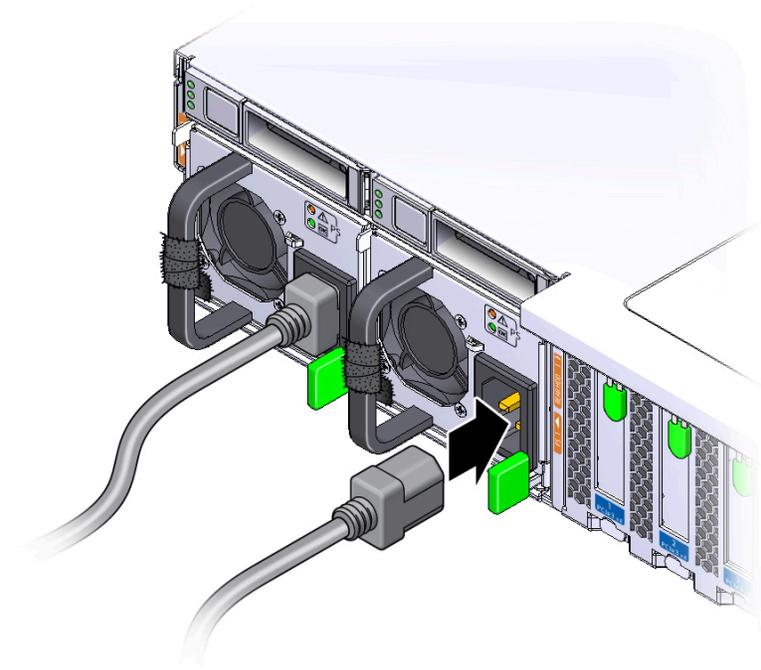
Note - サーバーには電源装置が 2 基搭載されています。それらをそれぞれ異なる電源に接続することで、電源の冗長性を確保します。サーバーは 1 つの電源で動作できますが、電源が 1 つだけだと冗長性が低下します。

2. サーバー電源コードをサーバーのバックパネルの電源装置 AC コネクタに接続し、ベルクロストラップでサーバーに固定します。

電源が接続されると、サーバーはブートしてスタンバイ電源モードに入ります。

- SP が起動するときに SP OK/障害 LED が点滅し、SP の準備ができるまで、主電源/OK LED は点灯しません。
- 数分後に主電源/OK LED がスタンバイ点滅パターンで点滅 (0.1 秒間オン、2.9 秒間オフ) し、SP (および Oracle ILOM) が使用できる状態であることを示します。スタンバイ電源モードでは、この時点でサーバーはまだ初期化されていませんし、全電力も投入されていません。

ステータスインジケータ LED の位置については、「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」31 ページのおよび「バックパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ、PCIe スロット」36 ページのを参照してください。



Caution - すべてのファン、コンポーネントヒートシンク、エアバッフル、および上部カバーを取り付けないかぎり、サーバーを稼働させないでください。十分な冷却メカニズムが機能していない状態でサーバーを動作させた場合、サーバーコンポーネントに損傷が生じる可能性があります。

Note - インストール済みのオペレーティングシステムを構成する準備、またはオペレーティングシステムの新規インストールを実行する準備が整うまで、主電源をサーバー全体に供給しないようにしてください。この時点では、電源は SP と電源装置のファンにのみ供給されます。

関連情報

- “背面のケーブル接続およびポート” on page 81
- “Ethernet ポート” on page 83

Oracle ILOM への接続

Oracle Server X5-2L は Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) バージョン 3.2.4 が搭載された状態で出荷されます。Oracle ILOM はサービスプロセッサ (SP) に組み込まれるシステム管理ファームウェアです。次の機能を備えています。

- 拡張されたサーバーの管理およびモニタリング機能
- Oracle System Assistant への接続とサーバーのリモート設定を可能にするリモートコンソール機能

Oracle ILOM 機能の完全なリストは、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 ドキュメントライブラリを参照してください。

このセクションでは、使用しているサーバーで Oracle ILOM にアクセスし起動する方法を説明します。

説明	リンク
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェースについて学習します。	“Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース” on page 88
シリアルポートに接続された端末を使用してローカルで Oracle ILOM にログインします。	“ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン” on page 88
Ethernet 接続を使用してネットワーク経由で Oracle ILOM にログインします。	“ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン” on page 88
サービスプロセッサのネットワーク設定を表示または変更します。	“サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更” on page 93
Oracle ILOM 経由でホストコンソールにアクセスします。	“Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス” on page 100
サービスプロセッサ接続をトラブルシューティングします。	“サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング” on page 105

関連情報

- 「設置手順の概要」13 ページの
- “データケーブルを接続する” on page 84

Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース

次の表に、Oracle ILOM のコンポーネントと機能を示します。Oracle ILOM の詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 のドキュメントライブラリを参照してください。

コンポーネント	機能
ハードウェア	<ul style="list-style-type: none"> ■ ファン、ストレージドライブ、電源装置など、各コンポーネントのステータスと構成をモニターする組み込みのサービスプロセッサ (SP) チップセット。 ■ 背面パネルの 2 つの外部接続: NET MGT ポート Ethernet 接続、および SER MGT ポート RJ-45 シリアル管理接続。
インタフェース	<ul style="list-style-type: none"> ■ Web ブラウザのインタフェース ■ SSH コマンド行インタフェース (CLI) ■ IPMI v2.0 CLI ■ SNMP v3 インタフェース

関連情報

- <http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 ドキュメントライブラリ

ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

RJ-45 シリアル管理ポート (SER MGT) を使用すると、ローカルで Oracle ILOM コマンド行インタフェースにログインできます。これを行うには、このセクションの手順に従います。

- “ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする” on page 88

関連情報

- “リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン” on page 89

▼ ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする

ローカルで Oracle ILOM にログインする場合は、サービスプロセッサ (SP) の IP アドレスを知っている必要はありません。

Note - Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するには、Oracle ILOM にはじめてログインしたあとで、デフォルト管理者アカウント (root) のデフォルトパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

1. 端末デバイスをサーバーのシリアル管理 (SER MGT) ポートに接続します。
手順は、“データケーブルを接続する” on page 84を参照してください。
2. 端末で Enter キーを押します。
Oracle ILOM のログインプロンプトが表示されます。
3. Oracle ILOM のユーザー名を入力して Enter キーを押します。
パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
4. ユーザー名に関連付けられているパスワードを入力して Enter キーを押します。
正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

関連情報

- “リモートから Oracle ILOM にログインする (Web)” on page 89
- “リモートから Oracle ILOM にログインする (CLI)” on page 91

リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

サーバーのネットワークポートの1つを使用すると、リモートから Oracle ILOM の Web インタフェースまたはコマンド行インタフェース (CLI) にログインできます。

これを行うには、このセクションのいずれかの手順に従います。

- “リモートから Oracle ILOM にログインする (Web)” on page 89
- “リモートから Oracle ILOM にログインする (CLI)” on page 91

▼ リモートから Oracle ILOM にログインする (Web)

リモートから Oracle ILOM にログインする場合は、サービスプロセッサ (SP) の IP アドレスまたはホスト名を知っている必要があります。SP の IP アドレスがわからない場合は、“サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更” on page 93を参照してください。

Note - Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するには、Oracle ILOM にはじめてログインしたあとで、デフォルト管理者アカウント (root) のデフォルトパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

応答時間を短縮するため、Web ブラウザのプロキシサーバーを無効にします (有効になっている場合)。

1. サーバー管理ポートをネットワークに接続します。

デフォルトで NET MGT ポートがサーバーの管理ポートです。しかし、サーバー上のほかの NET ポートの 1 つを使用してサイドバンド管理を有効にすることも可能です。

ネットワーク接続のためのサーバーのケーブル配線の詳細は、“[データケーブルを接続する](#)” on page 84 を参照してください。サイドバンド管理の有効化の詳細は、“[サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更](#)” on page 93 を参照してください。

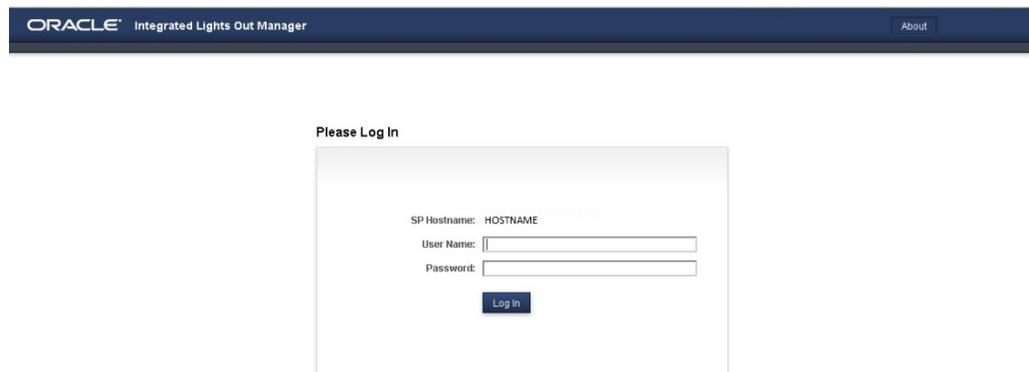
2. Web ブラウザを開きます。

Oracle ILOM でサポートされている Web ブラウザのリストは、『*Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド - ファームウェアリリース 3.2.x*』を参照してください。

3. Web ブラウザのアドレスフィールドにサービスプロセッサ (SP) の IP アドレスまたはホスト名を入力し、Enter キーを押します。

例: <https://198.51.100.26>

Oracle ILOM Web インタフェースのログインページが表示されます。



4. ユーザー名とパスワードを入力します。
5. 「Log In」 をクリックします。
「System Information」 -> 「Summary Information」 ページが表示されます。

The screenshot displays the Oracle ILOM web interface. The top navigation bar includes 'About', 'Refresh', and 'Logout' buttons. The main content area is titled 'Summary Information' and contains the following sections:

- General Information:** A table listing system details such as System Type (Rack Mount), Model (SUN SERVER X5-2L), QPart ID (Q10544), Part Number (X5-2L), Serial Number (123456789), System Identifier (~), System Firmware Version (3.2.4.0), Primary Operating System (Not Available), Host Primary MAC Address (00:10:e0:40:34:20), ILOM Address, and ILOM MAC Address (00:10:E0:40:34:24).
- Actions:** A panel with controls for Power State (ON), Locator Indicator (OFF), Oracle System Assistant (Version: 1.0.0.82425), System Firmware Update, and Remote Console.
- Status:** A table showing overall status (OK) and details for various subsystems:

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: Two Intel Xeon Processor E5 V3 Series Installed RAM Size: 0 GB	Processors: 2 / 2 (Installed / Maximum)
Memory	OK		DIMMs: 0 / 24 (Installed / Maximum)
Power	OK	Permitted Power Consumption: 708 watts Actual Power Consumption: 137 watts	PSUs: 2 / 2 (Installed / Maximum)
Cooling	OK	Inlet Air Temperature: 22 °C	Chassis Fans: 16 / 16 (Installed / Maximum)

これで、Oracle ILOM にログインしました。Oracle ILOM の使用方法については、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 のドキュメントライブラリを参照してください。

関連情報

- “ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする” on page 88
- “サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更” on page 93

▼ リモートから Oracle ILOM にログインする (CLI)

リモートから Oracle ILOM にログインする場合は、サービスプロセッサ (SP) の IP アドレスまたはホスト名を知っている必要があります。SP の IP アドレスがわからない場合は、“サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更” on page 93 を参照してください。

Note - Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するには、Oracle ILOM にはじめてログインしたあとで、デフォルト管理者アカウント (root) のデフォルトパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

1. サーバー管理ポートをネットワークに接続します。

デフォルトで NET MGT ポートがサーバーの管理ポートです。しかし、サーバー上のほかの NET ポートの 1 つを使用してサイドバンド管理を有効にすることも可能です。

ネットワーク接続のためのサーバーのケーブル配線の詳細は、“[データケーブルを接続する](#)” on page 84 を参照してください。サイドバンド管理の有効化の詳細は、“[サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更](#)” on page 93 を参照してください。

2. 端末ウィンドウを開きます。

3. 次の構文を使用して、Oracle ILOM のユーザー名とサーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を指定します。

■ `ssh -l username host`

または

■ `ssh username@host`

ここで、*host* はサーバー SP の IP アドレスまたはホスト名です。

例: `ssh root@198.51.100.26`

パスワードの入力を求める Oracle ILOM のプロンプトが表示されます。

4. ユーザー名に関連付けられているパスワードを入力して Enter キーを押します。

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

Oracle ILOM の使用方法については、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 のドキュメントライブラリを参照してください。

関連情報

- “[ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする](#)” on page 88
- “[サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更](#)” on page 93

サービスプロセッサのネットワーク設定の表示または変更

このセクションでは、サービスプロセッサ (SP) のデフォルトのネットワーク設定に関する情報と Oracle ILOM でこれらの設定を表示および変更する手順について説明します。

- “ネットワークのデフォルト設定” on page 93
- “サービスプロセッサの IP アドレスリクエストのタイムアウト” on page 94
- “サービスプロセッサの一般的なネットワーク設定を表示または変更する (Web)” on page 94
- “サービスプロセッサの一般的なネットワーク設定を表示または変更する (CLI)” on page 95
- “サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する (Web)” on page 96
- “サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する (CLI)” on page 97
- “サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する (Web)” on page 98
- “サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する (CLI)” on page 99

SP のネットワーク設定は Oracle System Assistant または BIOS 設定ユーティリティーからでも表示または変更できます。SP ネットワークインタフェースの別の構成方法または Ethernet コントローラのネットワーク設定の構成方法の詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

ネットワークのデフォルト設定

Oracle Server X5-2L は、Oracle ILOM が IPv4 または IPv6 ネットワーク環境で完全に動作することを可能にする IPv4 と IPv6 のデュアルスタック設定をサポートしています。

- IPv4 構成の場合、DHCP がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサービスプロセッサに自動的に割り当てます。
- IPv6 構成の場合、IPv6 ステートレス自動設定がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てます。

一般的な構成では、デフォルト設定を受け入れます。

Note - DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターによって割り当てられたネットワークパラメータを確認するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

次の手順に従って、割り当てられた設定が正しく動作していることをテストし、Oracle ILOM への接続をローカルおよびリモートで確立できます。

- ローカルでログインするには、“[ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする](#)” on page 88を参照してください。
- リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 リンクローカルアドレスを使用し、“[リモートから Oracle ILOM にログインする \(CLI\)](#)” on page 91の手順に従います。

サービスプロセッサの IP アドレスリクエストのタイムアウト

“[ネットワークのデフォルト設定](#)” on page 93の説明のとおり、Oracle Server X5-2L では DHCP と IPv6 のステートレス自動構成がデフォルトで有効になっています。したがって、サービスプロセッサ (SP) は自動的に IP アドレスをリクエストします。10 秒以内に DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに到達できない場合、SP 要求はタイムアウトになります。タイムアウト発生後は、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターが SP によって定期的にチェックされます。

ネットワーク上に DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターが存在しない場合、または SP の IP アドレスの表示または割り当てを行う必要がある場合は、これらのセクションの手順に従ってください。

- “[サービスプロセッサの一般的なネットワーク設定を表示または変更する \(CLI\)](#)” on page 95
- “[サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する \(CLI\)](#)” on page 97
- “[サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する \(CLI\)](#)” on page 99

▼ サービスプロセッサの一般的なネットワーク設定を表示または変更する (Web)

1. **Oracle ILOM Web** インタフェースにログインします。
手順については、“[リモートから Oracle ILOM にログインする \(Web\)](#)” on page 89を参照してください。
2. 「**Oracle ILOM Administration**」 -> 「**Connectivity**」 ページに移動します。
3. **SP ネットワークインタフェースが有効になっていることを確認**します。
「General Settings」パネルで、「State」フィールドの「Enabled」チェックボックスにチェックマークが付いていることを確認します。
4. サイドバンド管理を有効にするには、「**Management Port**」ドロップダウンリストから **NET_n** ポートを 1 つ選択します。

Note - Ethernet ポート NET2 および NET3 は、単一プロセッサシステムでは機能しないため、サイドバンド管理に使用することはできません。

5. VLAN タグ付けを有効にするには、次の手順に従います。
 - a. 「802.1Q Tagging」フィールドの「Enabled」チェックボックスにチェックマークを付けます。
 - b. 「VLAN ID」フィールドに、VLAN ID を 1 - 4079 の間の整数で入力します。

VLAN タグ付けの詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド - ファームウェアリリース 3.2.x』の「デフォルトの接続構成プロパティの変更」を参照してください。
6. 「Save」をクリックします。

▼ サービスプロセッサの一般的なネットワーク設定を表示または変更する (CLI)

1. Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインします。

手順については、次のいずれかの手順を参照してください。

 - “ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする” on page 88
 - “リモートから Oracle ILOM にログインする (CLI)” on page 91

Note - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定を変更すると接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

2. /SP/network ターゲットに移動します。
-> `cd /SP/network`
3. 現在のネットワーク設定を表示するには `show` コマンドを発行します。
-> `show`
4. SP ネットワークインタフェースが有効になっていることを確認します。
`state` プロパティが `disabled` に設定されている場合は、次を入力します。
-> `set state=enabled`
5. サイドバンド管理を有効にするには、次のコマンドを入力します。

-> **set pendingmanagementport=NETn**

-> **set commitpending=true**

ここで、*n* は 0、1、2、または 3 で、使用可能な 10G ビット Ethernet ポートに対応します。デフォルトで、pendingmanagementport は NET MGT ポート (MGMT) に設定されます。

Note - Ethernet ポート NET2 および NET3 は、単一プロセッサシステムでは機能しないため、サイドバンド管理に使用することはできません。

6. **VLAN タグ付けを有効にするには、次のコマンドを入力します。**

-> **set pendingvlan_id=[VLAN_ID]""]**

-> **set commitpending=true**

ここで、*VLAN_ID* は 1 - 4079 の間の整数です。pendingvlan_id を "" に設定すると VLAN タグ付けが無効になります。VLAN タグ付けの詳細は、『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド - ファームウェアリリース 3.2.x』の「デフォルトの接続構成プロパティの変更」を参照してください。

▼ サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する (Web)

1. **Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。**

手順については、「[リモートから Oracle ILOM にログインする \(Web\)](#)」 on page 89 を参照してください。

2. 「**ILOM Administration**」 -> 「**Connectivity**」 ページに移動します。

3. 「**IPv4**」 パネルで、現在の IPv4 アドレスを確認します。

4. ネットワーク上の DHCP サーバーからサービスプロセッサ (SP) に IPv4 アドレスを割り当てるには、次の手順に従います。

a. 「**IP Discovery Mode**」 フィールドで 「**DHCP**」 を選択します。

b. 「**Save**」 をクリックします。

5. SP の静的 IPv4 アドレスを構成するには、次の手順に従います。

a. 「**IP Discovery Mode**」 フィールドで 「**Static**」 を選択します。

b. SP の IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイを入力します。

- c. 「Save」をクリックします。

▼ サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する (CLI)

1. Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
手順については、次のいずれかの手順を参照してください。
 - “ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする” on page 88
 - “リモートから Oracle ILOM にログインする (CLI)” on page 91

Note - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定を変更すると接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

2. `/SP/network` ターゲットに移動します。
-> `cd /SP/network`
3. 現在のネットワーク設定を表示するには `show` コマンドを発行します。
-> `show`
4. ネットワーク上の DHCP サーバーからサービスプロセッサ (SP) に IPv4 アドレスを割り当てるには、次のコマンドを発行します。
-> `set pendingipdiscovery=dhcp`
-> `commitpending=true`
5. SP の静的 IPv4 アドレスを構成するには、次のコマンドを発行します。
-> `set pendingipdiscovery=static pendingipaddress=ip_address
pendingipnetmask=netmask pendingipgateway=gateway commitpending=true`

Note - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、`commitpending` を `true` に設定してネットワーク設定の変更をコミットすると、Oracle ILOM 接続が切断されるので、新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

関連情報

- “サービスプロセッサの IP アドレスリクエストのタイムアウト” on page 94
- “サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する (CLI)” on page 99

▼ サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する (Web)

1. **Oracle ILOM Web** インタフェースにログインします。
手順については、“[リモートから Oracle ILOM にログインする \(Web\)](#)” on page 89を参照してください。
2. 「**Oracle ILOM Administration**」 -> 「**Connectivity**」 ページに移動します。
3. 「**IPv6**」 パネルで、現在の IPv6 アドレスを確認します。
4. サービスプロセッサ (SP) に対する IPv6 アドレスの自動構成を有効にするには、次の手順に従います。
 - a. 「**State**」 フィールドの 「**Enabled**」 チェックボックスにチェックマークを付けます。
 - b. 次の 「**Autoconfig**」 オプションのいずれかを選択します。
 - 「**Stateless**」 (デフォルト設定) – Oracle ILOM は動的 IPv6 アドレスのプレフィックスを IPv6 ルーターから自動的に学習します。
 - 「**None**」 – IPv6 自動構成は無効です。
 - c. 次の 「**DHCPv6 Autoconfig**」 オプションのいずれかを選択します。
 - 「**DHCPv6 Stateless**」 – Oracle ILOM はサーバー SP の DNS 情報を DHCPv6 ネットワークサーバーから自動的に学習します。
 - 「**DHCPv6 Stateful**」 – Oracle ILOM はサーバー SP の動的 IPv6 アドレスおよび DNS 情報を DHCPv6 ネットワークサーバーから自動的に学習します。
 - 「**None**」 – DHCPv6 自動構成は無効です。
 - d. 「**Save**」 をクリックします。
5. SP の静的 IPv6 アドレスを構成するには、次の手順に従います。
 - a. 「**State**」 フィールドの 「**Enabled**」 チェックボックスにチェックマークを付けます。
 - b. 次のように 「**Static IP Address**」 フィールドにアドレスを入力します。
IPv6_address/subnet_mask_length_in_bits
例: 2001:db8:0:0:0:0:0:0/64
 - c. 「**Save**」 をクリックします。

▼ サービスプロセッサの IPv6 アドレスを表示または変更する (CLI)

1. Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインします。

手順については、次のいずれかの手順を参照してください。

- “ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする” on page 88
- “リモートから Oracle ILOM にログインする (CLI)” on page 91

Note - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定を変更すると接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

2. `/SP/network/ipv6` ターゲットに移動します。

-> `cd /SP/network/ipv6`

3. `show` コマンドを入力して、デバイスで構成されている IPv6 ネットワーク設定を表示します。

-> `show`

4. サービスプロセッサ (SP) に対する IPv6 アドレスの自動構成を有効にするには、次のコマンドを発行します。

-> `set state=enabled autoconfig=autoconfig_option`

ここで、`autoconfig_option` は次のいずれかです。

- `stateless` (デフォルト設定) – Oracle ILOM は動的 IPv6 アドレスのプレフィックスを IPv6 ルーターから自動的に学習します。
- `dhcpv6_stateless` – Oracle ILOM はサーバー SP の DNS 情報を DHCPv6 ネットワークサーバーから自動的に学習します。
- `dhcpv6_stateful` – Oracle ILOM はサーバー SP の動的 IPv6 アドレスおよび DNS 情報を DHCPv6 ネットワークサーバーから自動的に学習します。
- `disabled` – 自動構成は無効です。

IPv6 の自動構成オプションは、設定すると即時に有効になります。/`network` ターゲットでこれらの変更を確定する必要はありません。

Note - `dhcpv6_stateless` オプションまたは `dhcpv6_stateful` オプションが有効になっている場合、それと同時に `stateless` 自動構成オプションを有効にすることができます。ただし、`dhcpv6_stateless` 自動構成オプションと `dhcpv6_stateful` 自動構成オプションを同時に有効にしないでください。

5. SP の静的 IPv6 アドレスを構成するには、次のコマンドを発行します。

```
-> set state=enabled pendingstaticipaddress=IPv6_address/  
subnet_mask_length_in_bits  
-> set /SP/network commitpending=true
```

Note - デバイスに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、デバイスとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成する必要があります。

関連情報

- “サービスプロセッサの IP アドレスリクエストのタイムアウト” on page 94
- “サービスプロセッサの IPv4 アドレスを表示または変更する (CLI)” on page 97

Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス

Oracle ILOM 経由でホストコンソールに接続すると、実際にホストで行なっているようにアクションを実行できます。ホストに接続すると、次のタスクを実行できます。

- サーバーの BIOS 設定ユーティリティにリモートアクセスします。
- サーバーにオペレーティングシステムをインストールします。
- サーバーのオペレーティングシステムを構成します。
- サーバーのその他のソフトウェアの構成やインストールを行います。
- Oracle ILOM 経由で Oracle System Assistant にアクセスします。

手順については、次のセクションを参照してください。

- “マウスモードを設定する” on page 100
- “グラフィカルリモートホストコンソールにアクセスする (Web)” on page 101
- “シリアルリモートホストコンソールにアクセスする (CLI)” on page 104

▼ マウスモードを設定する

Oracle ILOM で「Mouse Mode」プロパティを設定し、Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスでのマウスの動きを最適化できます。設定できるマウスモードは「Absolute」または「Relative」で、Oracle ILOM に接続するオペレーティングシステムの要件に従って設定する必要があります。システムの適切なマウスモードを決定するには次のガイドラインを参照してください。

- Windows および Oracle Solaris オペレーティングシステムでは、マウスモードを Absolute に設定します。

- Linux オペレーティングシステムの新しいバージョン (Oracle Linux 6.x、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6.x、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 以降など) では、マウスモードを Absolute に設定します。
- Linux オペレーティングシステムの古いバージョン (Oracle Linux 5.x、RHEL 5.x、SLES 10 など) では、マウスモードを Relative に設定し、マウスが正常に動作しない場合に Absolute に切り替えます。
- Oracle VM および VMware ESXi では、マウスモードの設定は適用されません。

マウスモードの選択に関する詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド - ファームウェアリリース 3.2.x』を参照してください。

マウスモードを設定するには、次の手順を実行します。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。**
“リモートから Oracle ILOM にログインする (Web)” on page 89を参照してください。
2. 「Remote Control」->「KVMS」ページに移動し、「Mouse Mode」ドロップダウンリストからマウスモードを選択します。
3. 「Save」をクリックします。

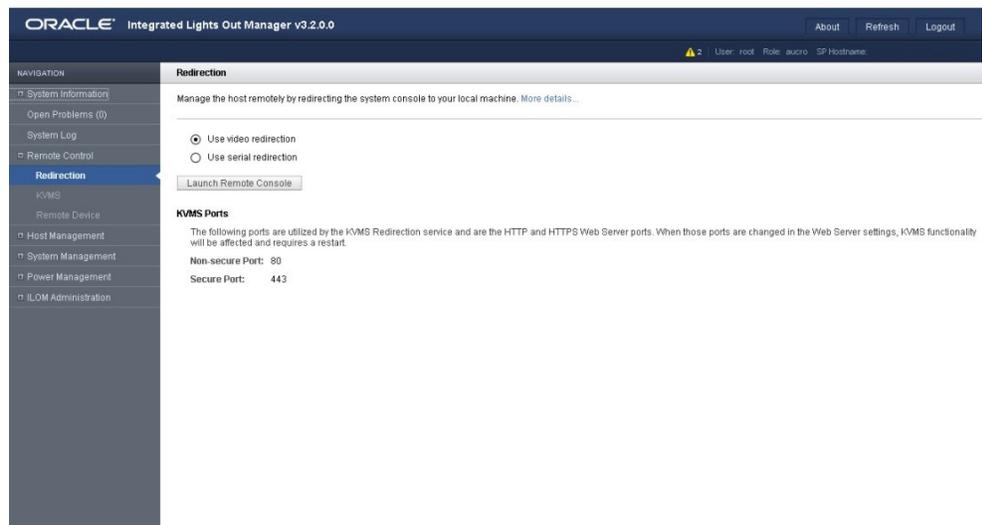
▼ グラフィカルリモートホストコンソールにアクセスする (Web)

Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスを使用すると、リモートシステムからホストコンソールにアクセスできます。開始する前に、リモートシステムが次の要件を満たしていることを確認してください。

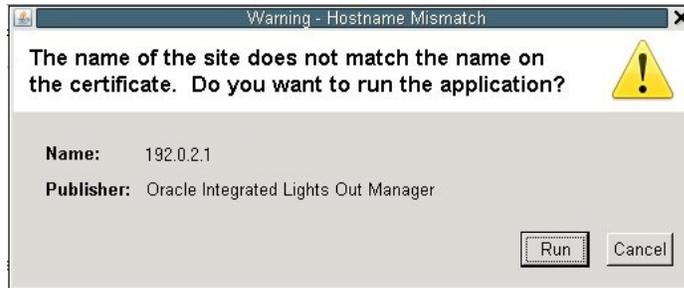
- マウスモードが正しく設定されていること (“マウスモードを設定する” on page 100を参照)。
- Oracle Server X5-2L のいずれかの Ethernet 管理ポートにアクセスできるネットワークにシステムが接続されていること。
- Java Runtime Environment (JRE) 1.6 以降がインストールされていること。IPv4 ネットワークでは、32 ビットまたは 64 ビット Java Developer Kit (JDK) が必要です。IPv6 ネットワークでは、32 ビットまたは 64 ビット JDK 170636 以降が必要です。
- システムが Oracle Solaris オペレーティングシステムを実行している場合、CD/DVD-ROM ドライブへのリモートアクセスを可能にするには、ボリューム管理を無効にします。
- システムが Windows オペレーティングシステムを実行している場合は、Internet Explorer セキュリティ強化を無効にします。

詳しい設定手順については、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド - ファームウェアリリース 3.2.x』の「リモートシステムコンソールプラスの初回設定」の手順を参照してください。

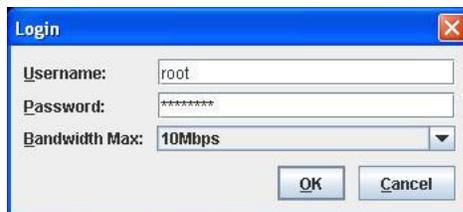
1. 管理者権限のあるアカウントを使用して、Oracle ILOM にログインします。
「リモートから Oracle ILOM にログインする (Web)」 on page 89 を参照してください。
2. 「Remote Control」 -> 「Redirection」 ページに移動します。
「Redirection」 ページが表示されます。



3. 「Redirection」 ページで、「Use Video Redirection」を選択し「Launch Remote Console」をクリックします。
次の点に注意してください。
 - リモートコンソールのリダイレクションに Windows システムを使用している場合、「Launch Remote Console」をクリックしたあとに、「Hostname Mismatch」警告ダイアログボックスが表示されることがあります。その場合は「Run」をクリックしてクリアします。



- 「Invalid Credentials」の警告ダイアログボックスが表示されることがあります。その場合は「OK」をクリックしてクリアします。
- 「Login」ダイアログボックスが表示される場合があります。その場合、ユーザー名とパスワードを再入力して「OK」をクリックします。



Note - 「Login」ダイアログボックスは、シングルサインオンが無効の場合またはサポートされていない場合にのみ表示されます。

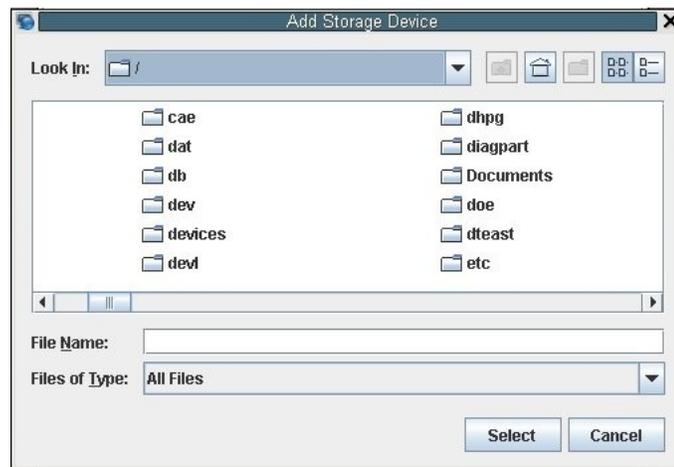
「Oracle ILOM Remote System Console Plus」画面が表示されます。

4. リモートシステム上の1つ以上のストレージデバイスをホストコンソールにリダイレクトするには、次の手順に従います。
 - a. Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスのタイトルバーで、自分にフルコントロール権限が付与されていることを確認します。
 - フルコントロール権限がある場合は、タイトルバーに "(Full Control)" と表示されます。
 - 画面のタイトルバーに "(Full Control)" と表示されない場合は、「KVMS」メニューで「Take Full-Control」を選択します。
 - b. 「KVMS」メニューでストレージを選択します。

「Storage Devices」ダイアログボックスが表示されます。

ストレージドライブデバイス (CD、DVD、フロッピー、USB デバイスなど) は自動的に検出され、「Storage Devices」ダイアログボックスに一覧表示されます。ドライブ内でブート可能メディアが検出されない場合、ダイアログボックス内でそのドライブの横にロックアイコンが表示されます。

- c. 「Storage Devices」ダイアログボックスにストレージイメージ (DVD イメージなど) を追加するには、次の手順に従います。
 - i. 「Add」をクリックします。
「Add Storage Device」ダイアログボックスが表示されます。



- ii. 追加するイメージファイルを選択し、「Select」をクリックします。

- d. 「Storage Devices」ダイアログボックスでリダイレクトするストレージメディアを選択し、「Connect」をクリックします。

▼ シリアルリモートホストコンソールにアクセスする (CLI)

開始する前に、Oracle ILOM のプロパティを構成して、シリアルホストコンソールを簡単に表示できるようにしたり、ロギングを有効にしたりできます。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド - ファームウェアリリース 3.2.x』を参照してください。

この手順では、リモートからホストコンソールにアクセスする方法を説明します。ローカルでホストコンソールに接続するには、“[ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする](#)” on page 88を参照してください。

1. 管理者権限のあるアカウントを使用して、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。

手順については、“[リモートから Oracle ILOM にログインする \(CLI\)](#)” on page 91を参照してください。

2. Oracle ILOM プロンプト (->) で、`start /HOST/console` と入力します。

シリアルコンソールの出力が画面上に表示されます。

Note - シリアルコンソールが使用中の場合は、`stop /HOST/console` コマンドに続いて `start /HOST/console` コマンドを入力することで、シリアルコンソールを停止してから再起動します。

3. ESC キーを押してから "(" 文字 (Shift キー + 9) を入力して、Oracle ILOM コンソールに戻ります。

サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング

このセクションでは、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) に関して発生する可能性のある次の2つの問題の対処方法を示します。

- Oracle ILOM SP がハングアップしたためリセットする必要があります。
- システム管理者が root アカウントのパスワードを忘れてしまったため、回復する必要があります。

これらの問題の対処手順については、次の各セクションを参照してください。

- “[サーバーのバックパネルからサービスプロセッサをリセットする](#)” on page 105
- “[root アカウントのパスワードを回復する](#)” on page 106

▼ サーバーのバックパネルからサービスプロセッサをリセットする

Oracle ILOM SP がハングアップして、Oracle ILOM Web インタフェースまたは Oracle ILOM CLI コマンドを使用してリセットできない場合は、次の手順に従ってサーバーのバックパネルから Oracle ILOM SP をリセットします。

- サーバーのバックパネルにある SP リセット用のピンホールボタンをスタイラスで押します。

SP リセット用ピンホールは、サーバーのバックパネルの USB ポートの下にあります。詳細は、[Oracle Server X5-2L サービスマニュアル](#) の“背面パネルのピンホールスイッチ”を参照してください。

SP がリブートされます。Oracle ILOM での作業を続けるには、再度ログインする必要があります。

▼ root アカウントのパスワードを回復する

システム管理者は、構成済みの Oracle ILOM デフォルトパスワードを使用して、構成済みの Oracle ILOM ローカル root アカウントまたはローカル root アカウントのパスワードを回復できます。

root アカウントのパスワードを回復するには、Oracle ILOM に対するローカルのシリアル管理ポート (SER MGT) 接続が必要です。また、Oracle ILOM で Physical Presence State が有効になっている場合 (デフォルト)、ユーザーは自分がサーバーの前に居ることを証明する必要があります。

root アカウントのパスワードを回復するには、次の手順を実行します。

1. **Oracle ILOM に対してローカルのシリアル管理接続を確立し、default ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインします。**

例: SUNSP-0000000000 login: **default**

Press and release the physical presence button

Press return when this is completed...

2. **サーバーの前に自分が居ることを証明します。**
サーバーの前に自分がいることを証明するには、サーバー前面のロケータボタンを押します。
ロケータボタンの位置については、[図1](#) を参照してください。
3. **シリアルコンソールに戻り、Enter キーを押します。**
パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
4. **default ユーザーアカウントのパスワード defaultpassword を入力します。**
5. **アカウントのパスワードをリセットするか、または root アカウントを作成し直します。**

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド - ファームウェアリリース 3.2.x』の「ローカルユーザーアカウントの構成」を参照してください。

Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定

Oracle System Assistant はシステムのソフトウェアとファームウェアの設定に適したアプリケーションです。Oracle System Assistant は、一部の Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うための組み込みのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。

Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Linux、または Windows オペレーティングシステムのインストール、Oracle VM Server ソフトウェアのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、およびサーバーハードウェアの構成を行うことができます。

Note - Oracle Solaris インストールの場合、Oracle System Assistant は推奨されるドライバやツールをインストールしません。Linux、Oracle VM Server、および Windows の場合、Oracle System Assistant は推奨されるドライバやツールのうち、その特定のオペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアでサポートされているものをインストールします。Oracle System Assistant を使ってオペレーティングシステムをインストールする際のインストール可能なオプションソフトウェアの一覧については、Oracle System Assistant の ReadMe を参照してください。

このセクションでは、Oracle System Assistant を使用して、サーバーのソフトウェアおよびファームウェアを設定する方法について説明します。次のタスクについて説明します。

説明	リンク
Oracle System Assistant にアクセスします。	“Oracle System Assistant へのアクセス” on page 110
Oracle System Assistant を使用してソフトウェアおよびファームウェアを設定します。	“Oracle System Assistant を使用してソフトウェアとファームウェアを設定する” on page 113
Oracle System Assistant を使用してオペレーティングシステムおよびドライバを設定します。	“オペレーティングシステムおよびドライバの設定” on page 114

関連情報

- 「[設置手順の概要](#)」 13 ページの
- [“データケーブルを接続する” on page 84](#)

- 『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)

Oracle System Assistant へのアクセス

Oracle System Assistant にアクセスするには、次のいずれかの方法を使用します。

- “Oracle System Assistant をローカルで起動する” on page 110
- “Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する” on page 112

関連情報

- “Oracle System Assistant を使用してソフトウェアとファームウェアを設定する” on page 113
- “オペレーティングシステムおよびドライバの設定” on page 114

▼ Oracle System Assistant をローカルで起動する

Oracle System Assistant をローカルで起動するには、操作員がサーバーの近くにおいて、次に対するアクセス権を保有している必要があります。

- VGA モニター
- USB キーボード
- USB マウス

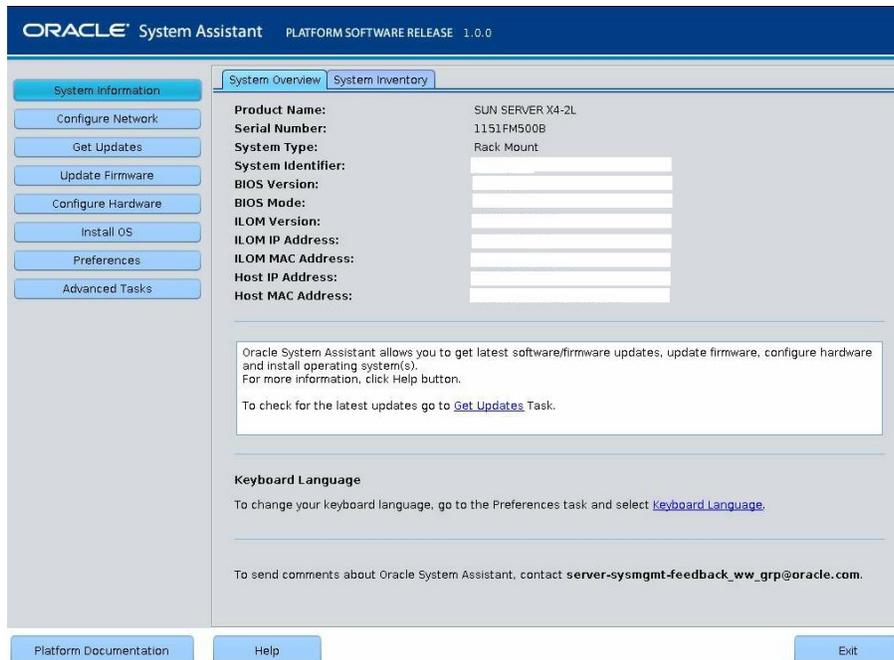
1. **サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。**
サーバーがスタンバイ電源モードの場合は、サーバーのフロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。
2. **サーバーにローカル接続します。**
“サーバーの配線” on page 81 の配線手順に従います。
3. **サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して、サーバーに全電力を投入します。**
サーバーがブートし、電源投入時自己診断 (POST) メッセージとブートメッセージがモニターに表示されます。
サーバーの近くに待機し、サーバーを観察します。ブートプロセスに割り込む必要があります。

BIOS 画面が表示されます。



4. **Oracle System Assistant を起動するように求めるプロンプトが表示されたら、F9 ファンクションキー (シリアル接続では Ctrl+O) を押します。**

Oracle System Assistant アプリケーションが起動し、「System Overview」画面が表示されます。



▼ Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する

Oracle ILOM を使えば、Oracle System Assistant をローカルまたはリモートで起動できます。

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

手順については、「リモートから Oracle ILOM にログインする (Web)」 on page 89 を参照してください。

「System Information」 -> 「Summary Information」 画面が表示されます。

2. サーバーの電源が切断されていることを確認します。

「Actions」 パネルの「Power State」フィールドにサーバーの電源状態が表示されます。

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: Two Intel Xeon Processor E5 V3 Series Installed RAM Size: 16 GB	Processors: 2 / 2 (installed / Maximum)
Memory	OK		DIMMs: 2 / 24 (installed / Maximum)
Power	OK	Permitted Power Consumption: 723 watts Actual Power Consumption: 256 watts	PSUs: 2 / 2 (installed / Maximum)
Cooling	OK	Inlet Air Temperature: 30 °C Exhaust Air Temperature: 36 °C	Chassis Fans: 8 / 8 (installed / Maximum) PSU Fans: Not Supported
Storage	Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks: 8 / 14 (installed / Maximum)
Networking	OK		Ethernet NICs: 4 (installed)

3. 画面右上の領域にある「Actions」パネルで、Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。

Note - サーバーの電源が入っている場合、停止するよう求めるプロンプトが表示されます。「Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する」 on page 157 を参照してください。

4. Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスを起動するには、「Yes」をクリックします。

リモートコンソールのウィンドウが表示され、サーバーの電源が投入され、Oracle System Assistant アプリケーションが起動し、「System Overview」画面が表示されます。

Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定

Oracle System Assistant は、サーバーの設定や構成を単純化するために使用します。Oracle System Assistant の使用方法の詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

- “Oracle System Assistant を使用してソフトウェアとファームウェアを設定する” on page 113

▼ Oracle System Assistant を使用してソフトウェアとファームウェアを設定する

- Oracle System Assistant を使用して、次の表に示したタスクを実行します。

Note - Oracle System Assistant で実行できるタスクの完全なリストは、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

タスク	Oracle System Assistant の画面
1 システム情報とシステムインベントリを確認します。	System Information
2 ネットワーク接続を設定します。	Configure Network
3 使用している Oracle System Assistant のバージョンを更新します。	Get Updates
4 Oracle ILOM、BIOS、エキスパンダ、ディスク、HBA、または HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。	Update Firmware
5 Oracle ILOM を構成します。	「Configure Hardware」->「Service Processor Configuration」
6 RAID を構成します。 Note - インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	「Configure Hardware」->「RAID Configuration」
7 BIOS をデフォルト設定に戻します。	「Configure Hardware」->「Restore BIOS Defaults」

タスク	Oracle System Assistant の画面
8 Oracle Solaris、Linux、Oracle VM、または Windows オペレーティングシステムまたはドライバをインストールします。 Note - インストール済みの OS がシステムに付属していた場合は、このオプションを使用しないでください。	Install OS 詳細は、“オペレーティングシステムおよびドライバの設定” on page 114またはインストールする予定の OS のインストールガイドを参照してください。

オペレーティングシステムおよびドライバの設定

インストール済みのオペレーティングシステム (OS) を構成したり、サーバーでサポートされている OS をインストールしたりできます。次の表に、OS のインストールと構成に関する情報の取得方法を示します。

実行するタスク	構成またはインストールする OS	使用するツールまたはドキュメント
インストール済みの OS を構成する	インストール済みの Oracle Solaris OS	“インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムの構成” on page 133
	インストール済みの Oracle Linux	“インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムの構成” on page 141
	インストール済みの Oracle VM	“インストール済みの Oracle VM 3.3 ソフトウェアの構成” on page 147
OS をインストールし、ドライバを更新する	Oracle Solaris OS、Linux OS、Oracle VM、または Windows OS	Oracle System Assistant または OS のインストールガイド: <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Server X5-2L Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイドの“Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール” ■ Oracle Server X5-2L Linux オペレーティングシステムインストールガイドの“Linux オペレーティングシステムのインストール” ■ Oracle Server X5-2L Oracle VM インストールガイドの“Oracle VM のインストール” ■ Oracle Server X5-2L Windows Server オペレーティングシステムインストールガイドの“Windows Server オペレーティングシステムのインストール”
	VMware ESXi	OS のインストールガイド: Oracle Server X5-2L VMware ESXi インストールガイドの“VMware ESXi のインストール”

OS インストール用のサーバードライブの構成

このセクションには、サーバーストレージドライブを RAID (Redundant Array of Independent Disks) ボリュームに構成するための手順が含まれます。

説明	リンク
RAID 構成ツールについて学習します。	“RAID 構成ツール” on page 115
RAID 構成オプションについて学習します。	“RAID 構成の要件” on page 116
Oracle System Assistant を使用してサーバーストレージドライブの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	“Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成” on page 118
LSI MegaRAID BIOS ユーティリティを使用してサーバーストレージドライブの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	“BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成” on page 124

関連情報

- 「[設置手順の概要](#)」13 ページの
- ホストバスアダプタ (HBA) のドキュメントコレクション (<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/oracle-storage-networking-190061.html>)

RAID 構成ツール

このサーバーストレージドライブは Oracle Storage 12 Gb/s SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (7110117) をサポートしており、これには RAID 構成用のユーティリティが含まれています。

RAID の構成時に使用する手順は、選択されているサーバーストレージ BIOS モード (UEFI またはレガシー BIOS) によって変わります。Oracle System Assistant (推奨) または BIOS RAID 構成ユーティリティのどちらかを使用すると HBA で RAID を構成できます。次の表では、構成ツール別、BIOS モード別の RAID 構成手順へのリンクを示します。

RAID 構成ツール	サポートされる BIOS モード	RAID 構成手順
Oracle System Assistant	UEFI およびレガシー BIOS	“ストレージドライブ上での RAID の構成” on page 118

RAID 構成ツール	サポートされる BIOS モード	RAID 構成手順
BIOS 構成ユーティリティ	<ul style="list-style-type: none"> ■ UEFI ■ レガシー BIOS 	<ul style="list-style-type: none"> ■ “UEFI ブートモードでの RAID を構成する” on page 124 ■ “レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成” on page 129

RAID 構成の要件

ストレージドライブを RAID ボリュームとして再構成するタスクはオプションです。デフォルトで、サーバー上の各物理ドライブは RAID 0 ボリュームとして構成されています。ドライブを再構成する場合は Oracle System Assistant を使用することをお勧めします。サーバーに Oracle System Assistant がインストールされていない場合は、BIOS RAID 構成ユーティリティを使用すると、サーバー上に RAID を構成できません。

サーバーのストレージドライブを構成する際は、次のオプションを選択できます。

- **オプション 1** – インストール済みオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアを注文した場合、それらのオペレーティングシステムまたはソフトウェアは事前構成の RAID 0 ボリュームにインストールされています。ドライブを再構成する場合は、インストール済みのオペレーティングシステムを消去できます。
このオプションの場合は、このセクションをスキップして、次のいずれかのセクションに進みます。
 - “インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムの構成” on page 133
 - “インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムの構成” on page 141
 - “インストール済みの Oracle VM 3.3 ソフトウェアの構成” on page 147
- **オプション 2** – オペレーティングシステムを新規インストールする場合で、複数のサーバーストレージドライブを使用して 1 つ以上の RAID ボリュームを構成するときは、オペレーティングシステムをインストールする前にサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成する必要があります。
 - サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、“Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成” on page 118 に進み、サーバーに設置されている内蔵 HBA に応じてタスクを選択します。
 - サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、“BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成” on page 124 に進みます。
- **オプション 3** – OS の新規インストールを行います。複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成しません。

Note - オプション 3 を選択する場合は、単一のストレージドライブで RAID ボリュームを構成して、そのボリュームをブート可能にする必要があります。そうしないと、内蔵 HBA がインストールに使用するストレージドライブを特定できなくなります。

- サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、“[ストレージドライブ上での RAID の構成](#)” on page 118 に進み、単一のストレージドライブ上に RAID を構成します。
- サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、“[BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成](#)” on page 124 に進み、単一のストレージドライブ上に RAID を構成します。
- **オプション 4** - OS の新規インストールを行います。サーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成しません。

詳細は、インストールするオペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。

- [Oracle Server X5-2L Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール”
- [Oracle Server X5-2L Linux オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Linux オペレーティングシステムのインストール”
- [Oracle Server X5-2L Windows Server オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Windows Server オペレーティングシステムのインストール”
- [Oracle Server X5-2L Oracle VM インストールガイド](#) の“Oracle VM のインストール”
- [Oracle Server X5-2L VMware ESXi インストールガイド](#) の“VMware ESXi のインストール”

オペレーティングシステムのインストール後に RAID ボリュームを作成する方法については、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

関連情報

- “[Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成](#)” on page 118
- “[BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成](#)” on page 124

Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成

Oracle System Assistant を使用して、サーバー上に RAID を構成します。サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、BIOS ユーティリティを使用すると RAID を構成できます。

Note - Oracle System Assistant を使用すると、R0、R1、R5、または R10 の RAID を構成できます。R6、R50、または R60 の RAID を構成する必要がある場合は、BIOS RAID 構成ユーティリティを使用する必要があります。“[BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成](#)” on page 124 を参照してください。

次の手順を参照してください。

- “[Oracle System Assistant へのアクセス](#)” on page 110
- “[ストレージドライブ上での RAID の構成](#)” on page 118

関連情報

- “[RAID 構成の要件](#)” on page 116
- “[BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成](#)” on page 124

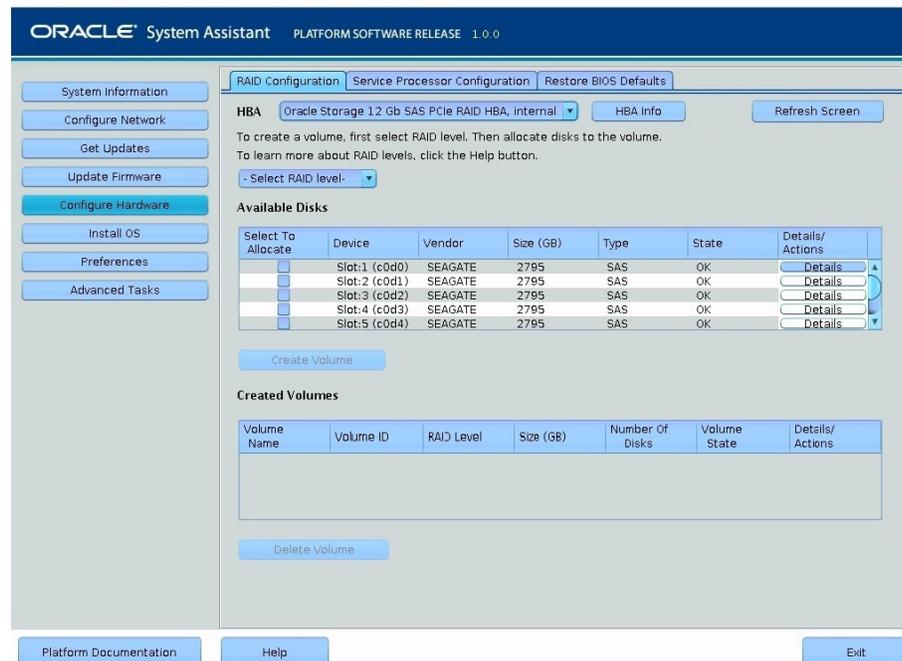
▼ ストレージドライブ上での RAID の構成

Note - Oracle によってプリインストールされた OS を使用しない場合、OS をインストールする前にドライブにブート可能ボリュームを作成する必要があります。ドライブに HBA によって作成されたボリュームがない場合、システムはドライブを認識しません。ブートドライブとして使用する予定のドライブに複数のボリュームがある場合は、OS のインストール先ボリュームをブートデバイスとして設定する必要があります。

1. **Oracle System Assistant を起動します。**
“[Oracle System Assistant へのアクセス](#)” on page 110 を参照してください。
Oracle System Assistant の「System Overview」画面が表示されます。
2. 「System Overview」画面で、BIOS モードが、オペレーティングシステムをインストールするときに使用する予定のブートモード (UEFI またはレガシー BIOS) に設定されていることを確認します。

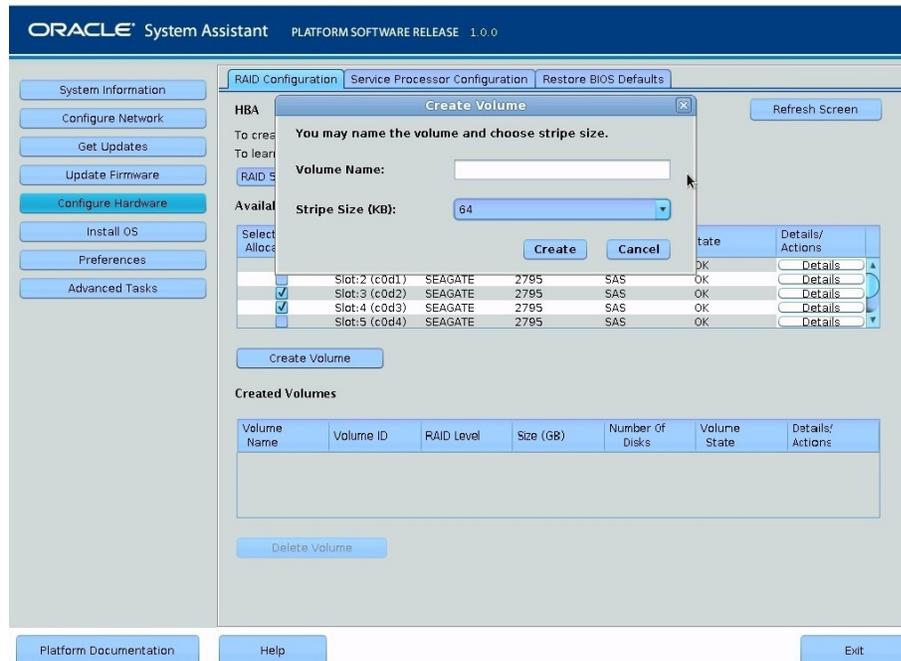
Note - RAID 構成で使用する BIOS モードは、その RAID 構成を使用する予定のオペレーティングシステムの BIOS ブートモードと一致する必要があります。BIOS モードを UEFI からレガシー BIOS に切り替える手順やその逆を行う手順については、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

3. 「Configure Hardware」 ボタンをクリックして、「RAID Configuration」 タブを選択します。
「RAID Configuration」 画面が表示されます。
4. 「HBA」 リストボックスで、「Oracle Storage 12 Gb SAS PCIe RAID HBA, Internal」を選択します。



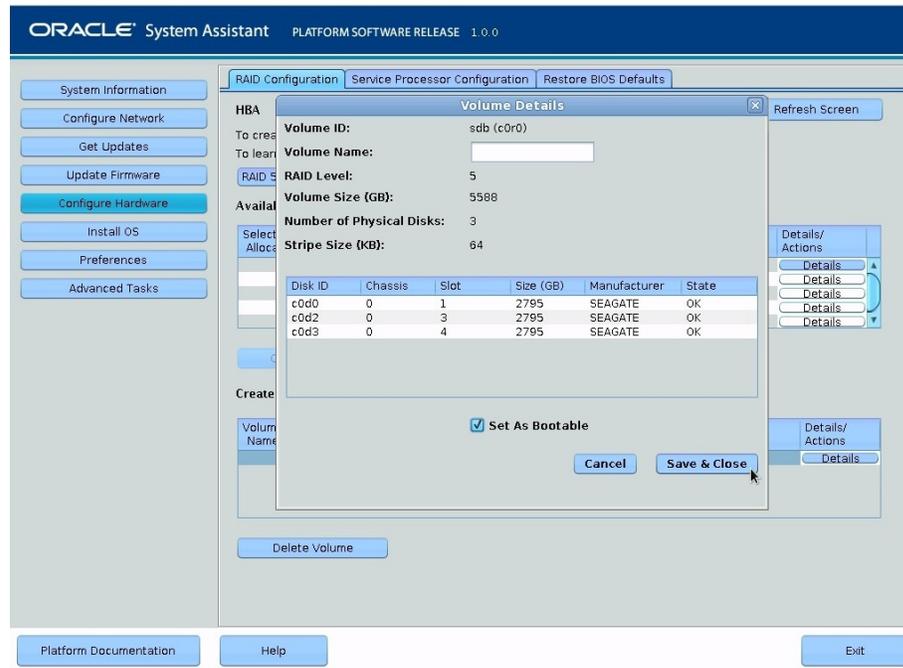
5. 「Select RAID Level」 リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。
Oracle System Assistant は、RAID 0、RAID 1、RAID 5、および RAID 10 をサポートしています。
6. 「Available Disks」 表で、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択して、「Create Volume」 ボタンをクリックします。

「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



7. 「Create Volume」ダイアログボックスで次を行います。
 - a. (オプション) ボリューム名を入力します。
 ボリューム名の入力はオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。
 - b. ボリュームのストライプサイズを選択します。
 - c. 「Create」をクリックします。
 「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。
 ボリュームの作成が完了すると、「Created Volumes」表にボリュームが表示されます。
8. ボリュームをブート可能に設定するには、次の手順を実行します。
 - a. 「Created Volumes」表の「Details/Actions」列で、ブート可能として設定するボリュームの「Details」ボタンをクリックします。

「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。



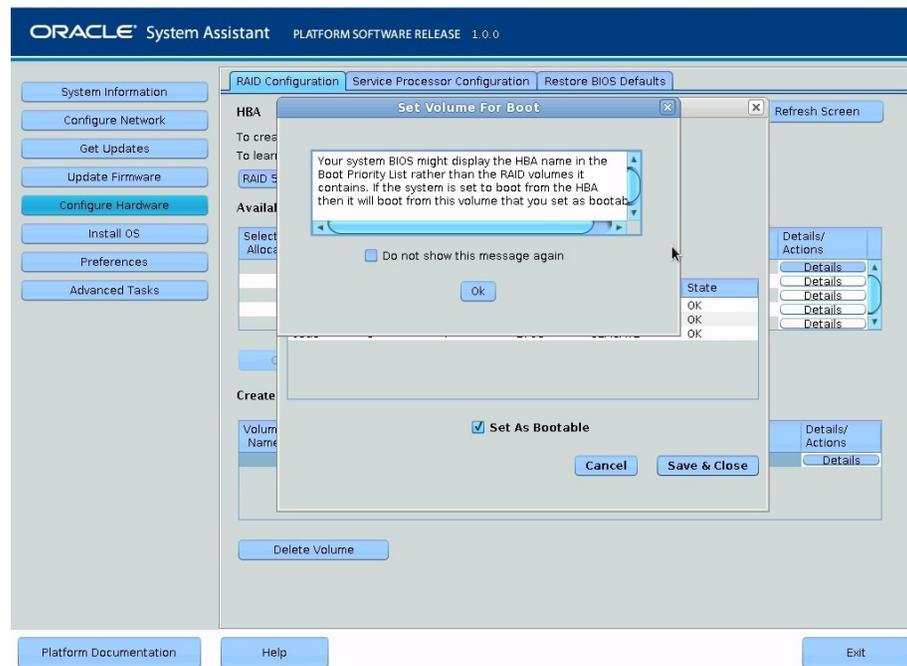
- b. (オプション) 「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、変更します。

以前にボリューム名を入力していない場合は、「Volume Details」ダイアログボックスでもう一度入力する機会が得られます。以前にボリューム名を入力している場合はここで変更できますが、名前を完全に削除することはできません。

Note - ボリューム名を付けるかはオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックしていつでもボリューム名を変更できますが、ボリューム名をいったん割り当てたあとで削除することはできません。

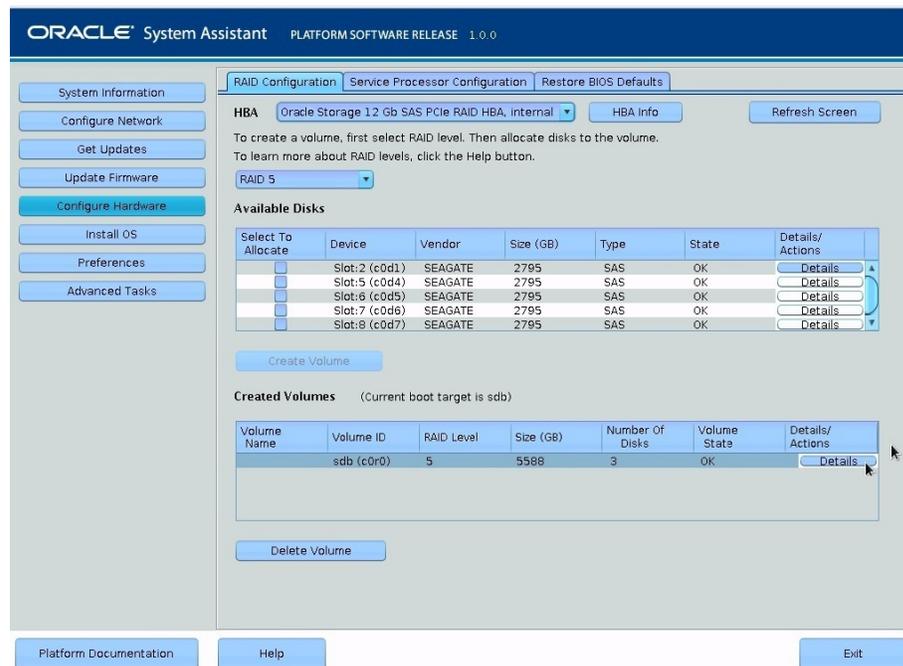
- c. 「Set As Bootable」チェックボックスを選択します。
- d. 「Save & Close」をクリックします。

「Set Volume For Boot」 確認ダイアログが表示されます。



e. 「OK」をクリックします。

「RAID Configuration」画面が表示され、その RAID ボリュームが現在のブートデバイスとして表示されます。



9. ボリュームをグローバルホットスペアとして指定するには、次の手順を実行します。それ以外の場合は、ステップ 10 に進みます。
 - a. 「Created Volumes」表の「Details/Actions」列で、グローバルホットスペアとして設定するボリュームの「Details」ボタンをクリックします。
「Disk Details」ダイアログボックスが表示されます。

- b. 「Set as Hot Spare」チェックボックスにチェックマークを付けます。

Note - 最大 256 のホットスペアを作成できます。

- c. 「Save」をクリックします。
「Disk Details」ダイアログボックスが閉じます。
10. ボリュームを削除するには、次の手順を実行します。

- a. 「Created Volumes」表で削除するボリュームを選択します。
- b. 「Delete Volume」ボタンをクリックします。

BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成

Oracle System Assistant を使えば RAID を構成できますが、Oracle System Assistant が使用できない場合は、HBA ファームウェア内に存在する BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用できます。

これらのユーティリティーの使用方法については、次のセクションを参照してください。

- [“UEFI ブートモードでの RAID を構成する” on page 124](#)
- [“レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成” on page 129](#)

関連情報

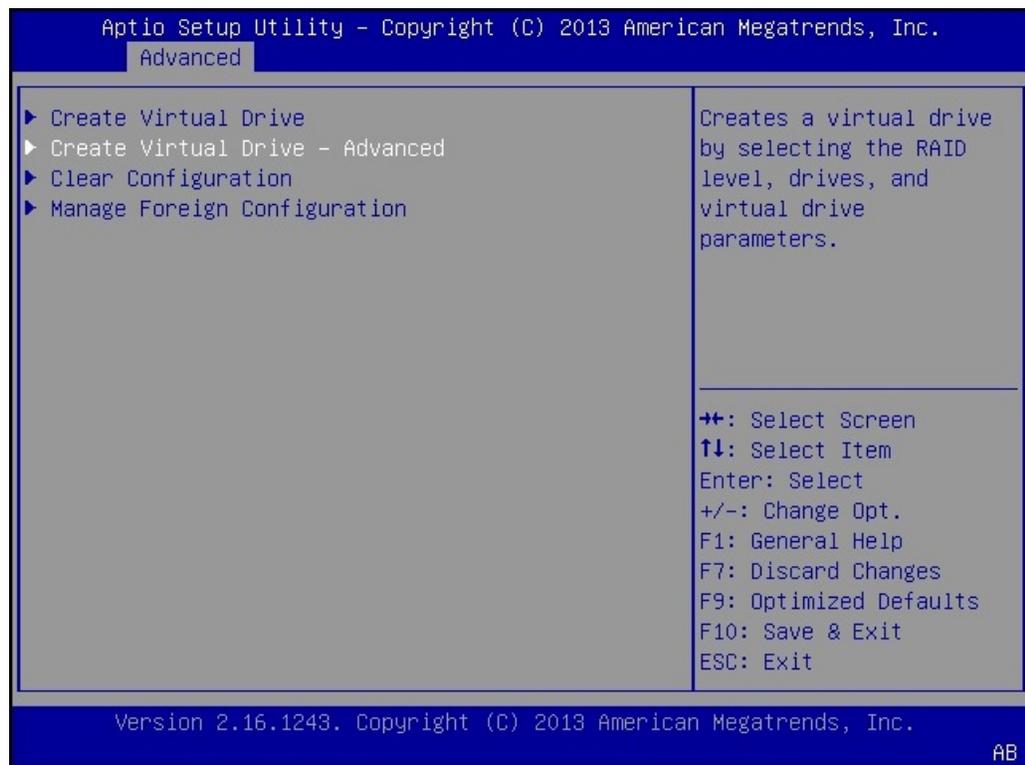
- [“RAID 構成の要件” on page 116](#)
- [“Oracle System Assistant を使用した複数のストレージドライブによる RAID ボリュームの構成” on page 118](#)

▼ UEFI ブートモードでの RAID を構成する

1. ローカルまたは Oracle ILOM 経由でホストコンソールにアクセスします。
手順については、[“データケーブルを接続する” on page 84](#)または[“Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス” on page 100](#)を参照してください。
2. サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
たとえば、サーバーをリセットするには:
 - ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒) 押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押して電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web インタフェース**から「Host Management」->「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。「Save」、「OK」の順にクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で `reset /System` コマンドを発行します。

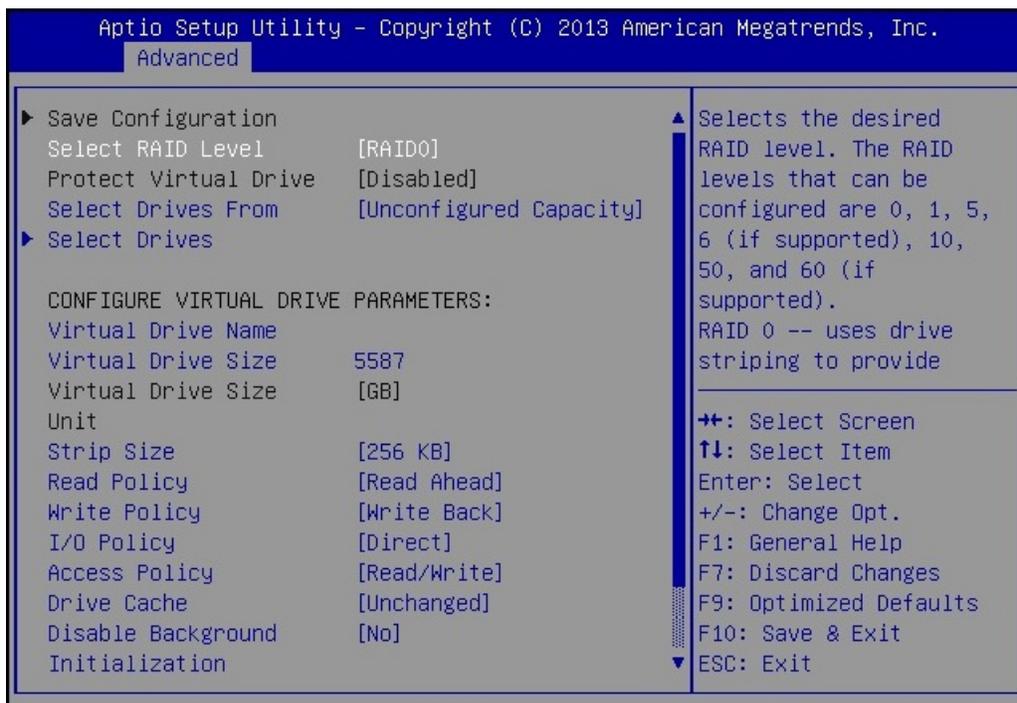
電源投入時自己診断 (POST) シーケンスが開始します。

3. BIOS 画面の指示に従って F2 ファンクションキー (シリアル接続の場合は Ctrl + E キー) を押し、BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
しばらくすると、BIOS 設定ユーティリティが表示されます。
4. 「Advanced」メニューに移動し、「LSI MegaRAID Configuration Utility」を選択します。
「LSI Human Interface Interaction (HII) Configuration Utility」メニューが表示されます。



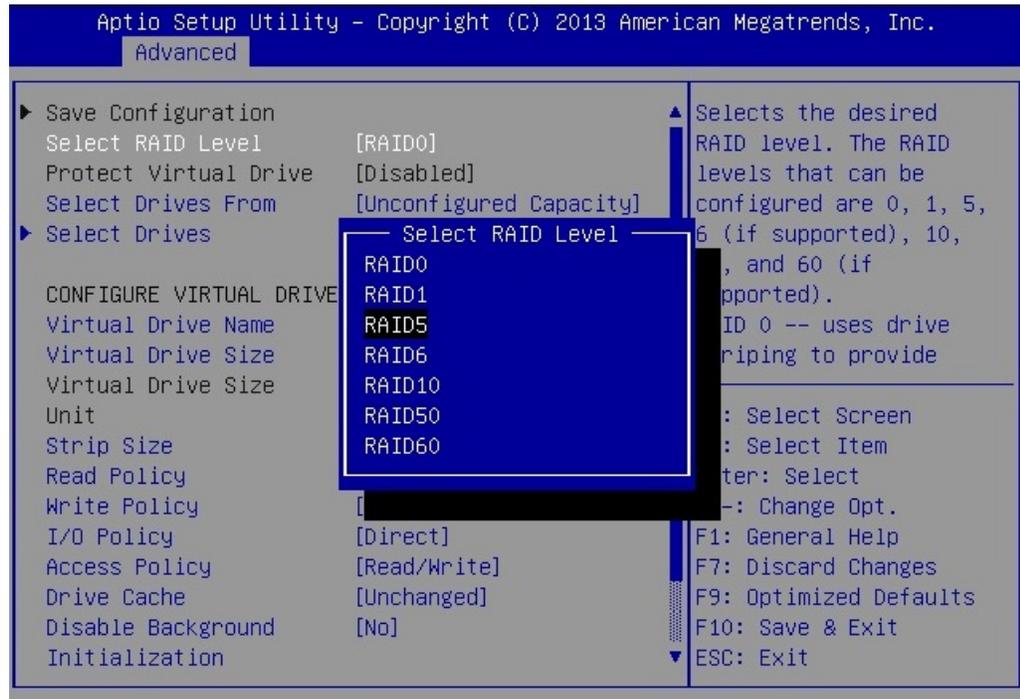
5. 「Create Virtual Drive – Advanced」を選択し、Enter を押します。
または、「Create Virtual Drive」オプションを選択して、RAID 構成ウィザードを表示します。「Create Virtual Drive」メニューで作成した仮想ドライブの詳細設定は構成できません。

「Create Virtual Drive – Advanced」メニュー画面が表示されます。



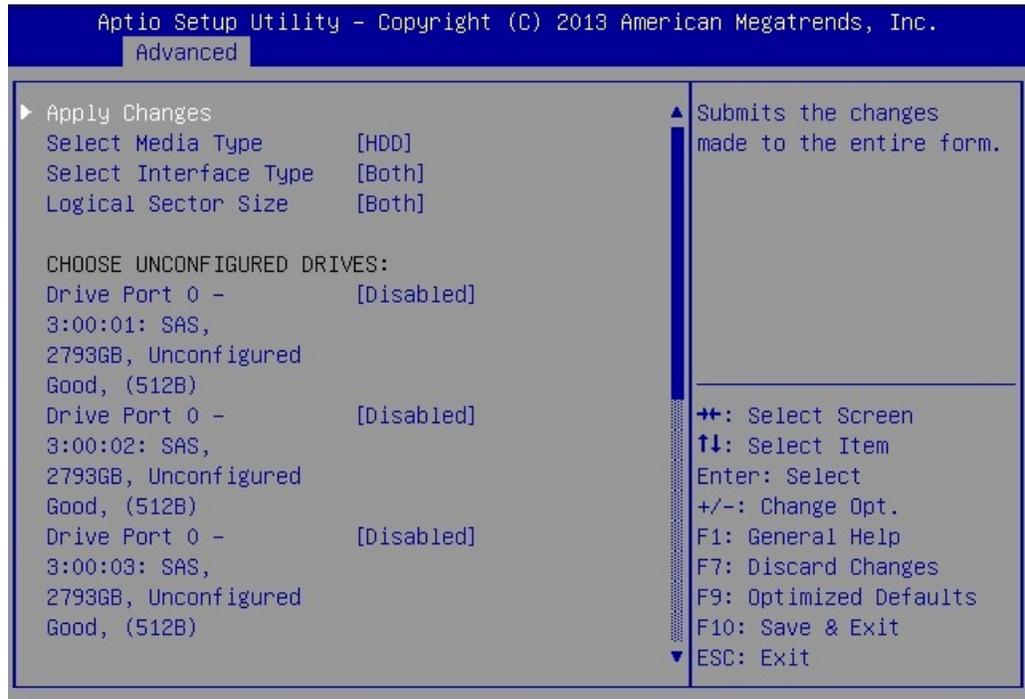
6. 「Select RAID Level」オプションを選択し、Enter を押します。

「Select RAID Level」ダイアログボックスが表示されます。



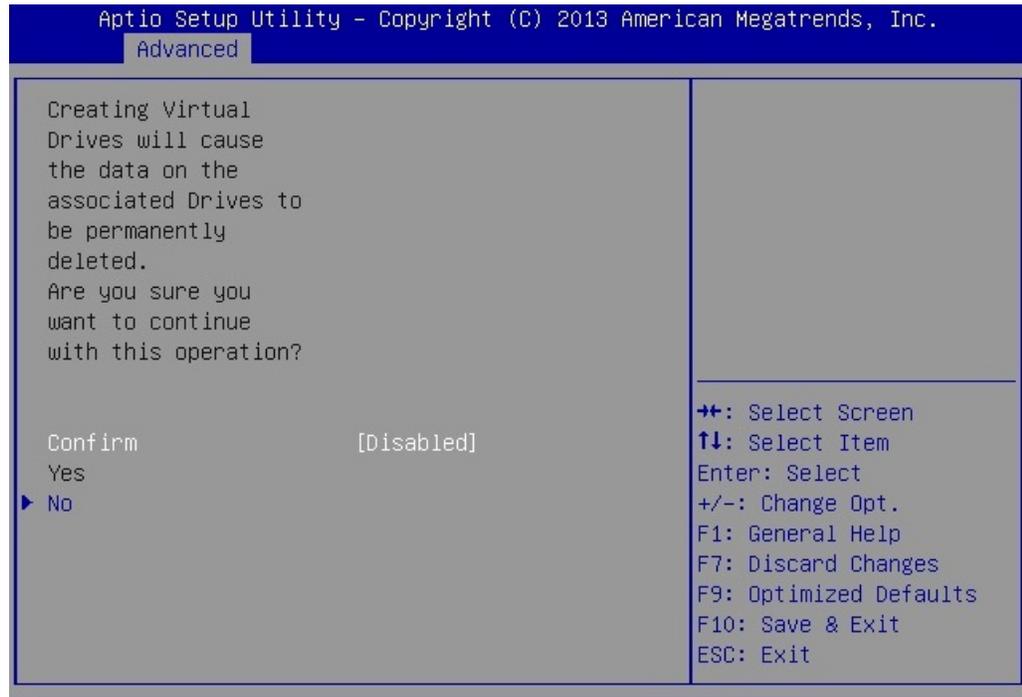
7. 目的の RAID レベルを選択し、Enter を押します。
8. 「Select Drives」オプションを選択し、Enter を押します。

ドライブ選択画面が表示されます。



9. ドライブ選択画面で、メディアタイプ、インタフェースタイプ、および RAID 構成に含めるドライブを選択します。
10. 「Apply Changes」を選択し、Enter を押します。

RAID 構成の確認画面が表示されます。



11. 続行することを確認し、**Enter** を押します。
これで、RAID の構成が完了します。

レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成

これらのユーティリティの使用方法については、次を参照してください。

- “レガシー BIOS ブートモードで RAID を構成する” on page 129
- “LSI MegaRAID 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームをブート可能にする” on page 130

▼ レガシー BIOS ブートモードで RAID を構成する

BIOS RAID 構成ユーティリティは HBA ファームウェアにあります。この手順は、次のいずれかに該当する場合に使用します。

- OS をインストールするハードドライブを使用して RAID を構成する場合で、サーバーに Oracle System Assistant が用意されていないか Oracle System Assistant を使用しない場合。
- オペレーティングシステムをインストールする予定のストレージドライブを使用して、RAID ボリュームレベル 5、6、50、60 を作成する場合。

Note - Oracle System Assistant は、Oracle Storage 12 Gb/s SAS PCIe RAID HBA で RAID 0、1、5、および 10 をサポートします。

- RAID ボリュームは作成しないが、OS をインストールする予定のハードドライブが初期化されていない。
1. **1 台以上の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成します。**
<http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/index.aspx> にある『MegaRAID SAS Software User's Guide』に記載された手順を参照してください。
 2. **複数の仮想ドライブを作成した場合は、1 つの仮想ドライブをブート可能にします。**
手順については、“[LSI MegaRAID 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームをブート可能にする](#)” on page 130 を参照してください。

Note - 『MegaRAID SAS Software User's Guide』には、仮想ドライブをブート可能にするための手順は記載されていません。

▼ LSI MegaRAID 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームをブート可能にする

サーバーで BIOS 構成ユーティリティを使用して複数の RAID ボリュームを作成した場合は、この手順を実行し、RAID ボリューム (仮想ドライブ) をブート可能にします。

次のいずれかに該当する場合、この手順を実行する必要はありません。

- Oracle System Assistant を使用してボリュームを作成し、そのボリュームをブート可能にしてある場合。
- BIOS RAID 構成ユーティリティを使用して仮想ドライブを 1 つだけ作成してある場合。

この手順を開始する前に、少なくとも 1 つの仮想ドライブまたは RAID ボリュームを BIOS 構成ユーティリティを使用して作成します (“[レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成](#)” on page 129 を参照してください)。

1. ローカルまたは Oracle ILOM 経由でホストコンソールにアクセスします。

手順については、“データケーブルを接続する” on page 84 または “Oracle ILOM 経由でのホストコンソールへのアクセス” on page 100 を参照してください。

2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。

たとえば、サーバーをリセットするには:

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒) 押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押して電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースから「Host Management」->「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。「Save」をクリックし、「OK」をクリックします。
- Oracle ILOM CLI で「reset /System」と入力します

電源投入時自己診断 (POST) シーケンスが開始します。

3. BIOS による POST 実行中に Press <Ctrl><H> for WebBIOS... というプロンプトが表示されたら、すぐに Ctrl+H キーの組み合わせを押して、LSI MegaRAID ユティリティにアクセスします。

「Virtual Drive Management」画面が表示されます。

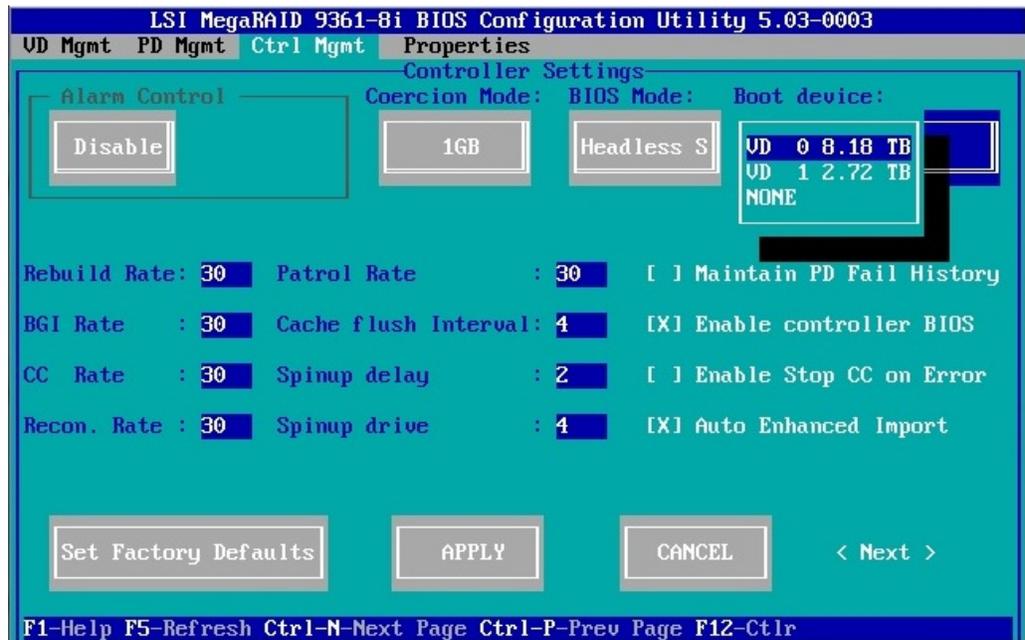
```

LSI MegaRAID 9361-8i BIOS Configuration Utility 5.03-0003
UD Mgmt PD Mgmt Ctrl Mgmt Properties
----- Virtual Drive Management -----
[-] LSI MegaRAID 9361-8i (Bus 0x03, Dev 0x00)
  [-] No Configuration Present !
  [-] Unconfigured Drives
    [-] P0:00:01: Ready: 2.72 TB
    [-] P0:00:02: Ready: 2.72 TB
    [-] P0:00:03: Ready: 2.72 TB
    [-] P0:00:04: Ready: 2.72 TB
    [-] P0:00:05: Ready: 2.72 TB
    [-] P0:00:06: Ready: 2.72 TB
    [-] P0:00:07: Ready: 2.72 TB
    [-] P0:00:08: Ready: 2.72 TB
  Drive:
  State: Ready
  Vendor: SEAGATE
  Encl. Position: 0
  Slot          : 1
F1-Help F2-Operations F5-Refresh Ctrl-N-Next Page Ctrl-P-Prev Page F12-Ctrl

```

4. Ctrl-N を 2 度押して、「Ctrl Mgmt」画面に移動します。

「Controller Settings」画面が表示されます。



5. 下矢印を使用して「Boot Device」フィールドに移動します。
6. ブート可能にする仮想ドライブを選択し、Enter を押します。
7. 「Apply」ボタンに移動し、Enter を押します。
この手順の実行方法の詳細は、http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspxにある LSI の『MegaRAID SAS Software User's Guide』を参照してください。
8. Esc キーを押して LSI MegaRAID ユーティリティを終了します。

インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムの構成

このセクションでは、注文済みの場合にサーバーにインストール済みのオプションの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステム (OS) の構成方法について説明します。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

Note - インストール済み Oracle Solaris オペレーティングシステムのサポートされているバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs> にある『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。

説明	リンク
Oracle Solaris のインストール済みのイメージに関する BIOS ブートモードの制限を確認します。	“Oracle Solaris のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限” on page 133
インストール済みオペレーティングシステム上での RAID の制限を確認します。	“インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限” on page 134
オペレーティングシステムのオプションを確認します。	“オペレーティングシステムのオプション” on page 134
構成時に必要な情報を収集します。	“Oracle Solaris の構成ワークシート” on page 135
インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成します。	“インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムを構成する” on page 137
Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメントを確認します。	“Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント” on page 140

関連情報

- 「設置手順の概要」13 ページの

Oracle Solaris のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限

Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステム (OS) イメージはレガシー BIOS ブートモードで事前にサーバーにインストールされています (注文済みの場合)。した

がって、インストール済みのイメージを使用するには、レガシー BIOS ブートモード (デフォルト) でサーバーをブートする必要があります。UEFI ブートモードでサーバーをブートすると、サーバーは Oracle Solaris のインストール済みのイメージをブートせず、そのイメージを使用することはできません。UEFI ブートモードに切り替えて Oracle Solaris を使用する場合は、Oracle Solaris OS の新規インストールを実行する必要があります。

関連情報

- [「UEFI の概要」38 ページの](#)

インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限

デフォルトで、サーバー上の各物理ドライブは RAID 0 ボリュームとして構成されています。インストール済み Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステム (OS) を注文した場合、OS はこれらの RAID 0 のドライブの 1 つにインストールされています。使用環境に合うようにサーバーのドライブを再構成するオプションがあります。ただし、ドライブの再構成によりインストール済みの OS やドライブ上のその他のデータが消失する可能性があります。

サーバーのストレージドライブの構成の詳細は、[“OS インストール用のサーバードライブの構成” on page 115](#)を参照してください。オペレーティングシステムのインストールの詳細は、[“オペレーティングシステムのオプション” on page 134](#)を参照してください。

オペレーティングシステムのオプション

サーバーでは複数のオペレーティングシステムがサポートされています。したがって、サーバー上で Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール済みバージョンを必ず使用する必要はありません。Oracle Solaris オペレーティングシステムまたは別のオペレーティングシステム (Linux、Oracle VM、Windows、VMware ESXi など) の新規インストールまたは新しいバージョンのインストールを行う場合、それがサポートされているバージョンであれば、インストールできます。サポートされているオペレーティングシステムのリストについては、<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs>にある『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。

サポートされているオペレーティングシステムのインストール手順については、次を参照してください。

- Oracle Solaris の場合は、[Oracle Server X5-2L Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド](#)の“Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール”を参照してください。

- Oracle VM Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Oracle VM インストールガイドの“Oracle VM のインストール”](#)を参照してください。
- Oracle Linux、Red Hat Enterprise Linux、および SUSE Linux Enterprise Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Linux オペレーティングシステムインストールガイドの“Linux オペレーティングシステムのインストール”](#)を参照してください。
- Windows Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Windows Server オペレーティングシステムインストールガイドの“Windows Server オペレーティングシステムのインストール”](#)を参照してください。
- VMware ESXi の場合は、[Oracle Server X5-2L VMware ESXi インストールガイドの“VMware ESXi のインストール”](#)を参照してください。

Oracle Solaris の構成ワークシート

オペレーティングシステムの構成を開始する前に、次の表の構成ワークシートを使用して、必要な情報を収集します。オペレーティングシステムの構成に当てはまる情報のみを収集する必要があります。

TABLE 10 Oracle Solaris オペレーティングシステム構成ワークシート

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	英語 (C-7 ビット ASCII)*
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムはネットワークに接続されていますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークに接続されている ■ ネットワークに接続されていない*
DHCP	ネットワークインタフェースの構成に、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用できますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワークアドレスを記入します。	IP アドレス	DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。 例: 192.168.100.1
	サブネット	DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 システムがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.255.0
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
ネームサービス	ネームサービス	該当する場合は、このシステムで使うネームサービスを入力してください。 ■ NIS

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
		<ul style="list-style-type: none"> ■ DNS ■ LDAP ■ なし*
ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。	
NIS	NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定するか、それともインストールプログラムに検索させるか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 検索する*
DNS	<p>DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つの IP アドレスを入力する必要があり、最大で 3 つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p>	
LDAP	<p>LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する次の情報を入力します。</p> <p>プロファイル名:</p> <p>プロファイルサーバー:</p> <p>LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。</p> <p>プロキシバインド識別名:</p> <p>プロキシバインドパスワード:</p>	
デフォルトルート	デフォルトのルート IP アドレスを指定しますか、それとも OS インストールプログラムに検索させますか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 検出する ■ なし*
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 地域* ■ GMT からの時差 ■ タイムゾーンファイル
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

関連情報

- [“インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムを構成する” on page 137](#)
- [“Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント” on page 140](#)

▼ インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムを構成する

構成ワークシートが完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムを構成します。

1. **Oracle ILOM にログインしていない場合、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで Ethernet 接続からログインします。**

“Oracle ILOM への接続” on page 87を参照してください。

2. 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。

- サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースで**、「Host Management」->「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスで「Power On」をクリックします。「Save」、「OK」の順にクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI で**、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースで**、「Host Management」->「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスで「Reset」をクリックします。「Save」、「OK」の順にクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI で**、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. 次のいずれかの方法を使用してリモートホストコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM Web インタフェースから**「Remote Control」->「Redirection」を選択し、「Launch Remote Console」ボタンをクリックしてビデオコンソールリダイレクションを起動します。
- **Oracle ILOM CLI で**、次を入力します。

```
-> start /HOST/console
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

サーバーがブートし、GRUB メニューが表示されます。

```
GNU GRUB Version 1.99 ,5.11.0.175.2.3.0.0.0
```

```
Oracle Solaris 11.2 SRU4 - Serial Port ttya
Oracle Solaris 11.2 SRU4 - Graphics Adapter
```

Note - デフォルトでは、システムは出力をシリアルポートに表示します。「GRUB」メニューでオプションを選択しない場合は、5 秒後に「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムはシリアルポートに出力を送信して続行します。

4. 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択してから、**Enter** を押します。

表示の出力先を引き続きシリアルにするのか、ビデオポートに接続されたデバイスに切り替えるのかを選択できます。

- **Oracle ILOM CLI (またはシリアルポート接続)** を使用している場合は、シリアルポートオプションを選択します。

```
Oracle Solaris 11.2 SRU4 - Serial Port ttya
```

- **Oracle ILOM リモートコンソールプラス (または直接ビデオ接続)** を使用している場合は、ビデオポートオプションを選択します。

```
Oracle Solaris 11.2 SRU4 - Graphics Adapter
```

Note - 表示をビデオポートに出力することを選択した場合、デバイスをサーバーの VGA コネクタに接続し、入力デバイス (USB キーボードまたはマウス) に接続してから、そのデバイスから構成を完了する必要があります。デバイスをサーバーに接続する方法については、「[サーバーの配線](#)」 on page 81 を参照してください。リモート KVM のように機能する Oracle ILOM リモートコンソールプラス機能を使用することもできます。

5. **Oracle Solaris 11.2 SRU4 の構成が開始したら、画面のプロンプトに従ってオペレーティングシステムを構成します。**

事前に収集した組織とネットワーク環境に関する情報を使用します。

表示される画面は、ネットワーク情報をサーバーに割り当てるために選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって異なります。

6. システムの **root** パスワード (必須) とユーザーアカウントの情報を入力して、構成手順は終了です。

Note - セキュリティーを高めるには、スタンドアロンのユーザーアカウントを作成します。

7. **Oracle Solaris 11 SRU4 の構成が完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。**
 - **Oracle ILOM Web インタフェース**でリモートコンソールウィンドウを閉じたあと、Oracle ILOM からログアウトします。
 - **Oracle ILOM CLI**で、Esc キーのあとに (キー (**Shift+9**) を押したあと、Oracle ILOM からログアウトします。

関連情報

- “Oracle ILOM への接続” on page 87
- “Oracle Solaris の構成ワークシート” on page 135

Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール

Oracle Solaris 11 OS を再インストール、または別バージョンの Oracle Solaris OS をインストールする場合は、関連する Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

Oracle Solaris OS のソフトウェアは、次のサイトからダウンロードできます。

- Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次にアクセスしてください。
<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris11/downloads/index.html>
- Oracle Solaris パッチをダウンロードするには、次にアクセスしてください。
<http://support.oracle.com>

関連情報

- “インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムを構成する” on page 137
- “Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント” on page 140

Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Solaris 11.2 オペレーティングシステムのドキュメントは、Oracle ドキュメントの Web サイトで入手できます。

http://docs.oracle.com/cd/E26502_01/index.html

Oracle Solaris 11.2 Information Library で次のドキュメントを見つけます。このドキュメントに記載されている x86 システムに固有の手順に従ってください。

- インストール情報については、これらのドキュメントを参照してください。
 - 『Oracle Solaris 11.2 システムのインストール』
 - 『Oracle Solaris 11.2 カスタムインストールイメージの作成』
- システムのアップグレードについては、『Oracle Solaris 11.2 ソフトウェアの追加と更新』を参照してください。

サーバーに特に適用される Oracle Solaris 11.2 に関するパッチおよびその他の最新情報については、次の『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs>

Oracle Solaris 11.2 のパッチおよび手順については、次の場所にある My Oracle Support の Web サイトにアクセスし、該当するページを参照してください。

<http://support.oracle.com>

関連情報

- “Oracle Solaris の構成ワークシート” on page 135
- “インストール済みの Oracle Solaris 11.2 SRU4 オペレーティングシステムを構成する” on page 137

インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムの構成

このセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステム (OS) の構成方法について説明します (注文済みの場合)。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

Note - インストール済み Oracle Linux オペレーティングシステムの使用可能なバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs> にある『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。

説明	リンク
Oracle Linux のインストール済みのイメージに関する BIOS ブートモードの制限を確認します。	“Oracle Linux のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限” on page 141
使用しているサーバー環境の Oracle Linux 構成ワークシートに記入します。	“Oracle Linux 6.5 構成ワークシート” on page 143
インストール済みの Oracle Linux OS を構成します。	“インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムを構成する” on page 144
Oracle Linux オペレーティングシステムを更新し登録します。	“Oracle Linux の登録と自動更新の有効化” on page 146
Oracle Linux 6.5 のドキュメントを確認します。	“Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムのドキュメント” on page 146

関連情報

- 「設置手順の概要」13 ページの

Oracle Linux のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限

Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステム (OS) イメージはレガシー BIOS ブートモードで事前にサーバーにインストールされています (注文済みの場合)。したがって、インストール済みのイメージを使用するには、レガシー BIOS ブートモード (デフォルト)

ト)でサーバーをブートする必要があります。UEFI ブートモードでサーバーをブートすると、サーバーは Oracle Linux のインストール済みのイメージをブートせず、そのイメージを使用することはできません。UEFI ブートモードに切り替えて Oracle Linux 6.5 を使用する場合は、Oracle Linux 6.5 OS の新規インストールを実行する必要があります。

インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限

デフォルトで、サーバー上の各物理ドライブは RAID 0 ボリュームとして構成されています。インストール済み Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステム (OS) を注文した場合、OS はこれらの RAID 0 のドライブの 1 つにインストールされています。使用環境に合うようにサーバーのドライブを再構成するオプションがあります。ただし、ドライブの再構成によりインストール済みの OS やドライブ上のその他のデータが消失する可能性があります。

サーバーのストレージドライブの構成の詳細は、“[OS インストール用のサーバードライブの構成](#)” on page 115 を参照してください。オペレーティングシステムのインストールの詳細は、“[オペレーティングシステムのオプション](#)” on page 134 を参照してください。

オペレーティングシステムのオプション

サーバーでは複数のオペレーティングシステムがサポートされています。したがって、サーバー上で Oracle Linux オペレーティングシステムのインストール済みバージョンを必ず使用する必要はありません。Oracle Linux オペレーティングシステムの新しいバージョンや Oracle Solaris、Windows などの別のオペレーティングシステムをインストールする場合は、サポートされているバージョンをインストールしてください。サポートされているオペレーティングシステムの完全なリストについては、<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs> にある『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。

サポートされているオペレーティングシステムのインストール手順については、次を参照してください。

- Oracle Solaris の場合は、[Oracle Server X5-2L Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール”を参照してください。
- Oracle VM Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Oracle VM インストールガイド](#) の“Oracle VM のインストール”を参照してください。
- Oracle Linux、Red Hat Enterprise Linux、および SUSE Linux Enterprise Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Linux オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Linux オペレーティングシステムのインストール”を参照してください。

- Windows Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Windows Server オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Windows Server オペレーティングシステムのインストール”を参照してください。
- VMware ESXi の場合は、[Oracle Server X5-2L VMware ESXi インストールガイド](#) の“VMware ESXi のインストール”を参照してください。

Oracle Linux 6.5 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成プロセスを開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報のみを収集する必要があります。

TABLE 11 Oracle Linux オペレーティングシステム構成ワークシート

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle Linux の root パスワード	使用する root パスワードを選択して出荷時デフォルトのパスワードを置き換えます。文字および長さに制限はありません。	
ネットワークインターフェース	ネットワークに接続するサーバー (eth#) のインターフェースを選択します。(Linux を稼働させた後、 <code>ifconfig -a</code> コマンドを使用してサーバーのネットワークポートを識別しやすくなります。)	
ネットワーク構成 (DHCP を使用しない場合)	サーバーの IP アドレスを指定します。 例: 198.51.100.1	
	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	
	サーバーにゲートウェイを介してアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。	
	DNS (Domain Name Server) の IP アドレスを指定します。1 つの DNS のみが必要です。	

関連情報

- “インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムを構成する” on page 144

▼ インストール済みの Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムを構成する

構成ワークシートが完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Linux オペレーティングシステムを構成します。

1. **Oracle ILOM にログインしていない場合、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで Ethernet 接続からログインします。**

“Oracle ILOM への接続” on page 87を参照してください。

2. 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。

- サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースで**、「Host Management」->「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスで「Power On」をクリックします。「Save」、「OK」の順にクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI で**、プロンプトに次のコマンドを入力します。
-> **start /System**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /System (y/n)? **y**
Starting /System
- サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースで**、「Host Management」->「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスで「Reset」をクリックします。「Save」、「OK」の順にクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI で**、プロンプトに次のコマンドを入力します。
-> **reset /System**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to reset /System (y/n)? **y**
Performing hard reset on /System

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. 次のいずれかの方法を使用してリモートホストコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM Web インタフェースから**「Remote Control」->「Redirection」を選択し、「Launch Remote Console」ボタンをクリックしてビデオコンソールリダイレクションを起動します。
- **Oracle ILOM CLI で**、次を入力します。
-> **start /HOST/console**

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

サーバーがブートし、GRUB メニューが表示されます。GRUB メニューで、Oracle Linux Server Unbreakable Enterprise Kernel と Red Hat 互換カーネルのどちらを使用するかを選択します。

```
GNU GRUB version 0.97 (640K lower / 1703968K upper memory)
```

```
Oracle Linux Server Unbreakable Enterprise Kernel (3.8.13-16.2.1.el6uek.x86_64)
Oracle Linux Server Red Hat Compatible Kernel (2.6.32-431.el6.x86_64)
```

4. **GRUB メニューで一時停止するには、Enter 以外のキーをどれか押します。そうしなかった場合は 5 秒後に、強調表示されたインストールオプションが使用されます。**
5. **GRUB メニューで、上下の矢印キーを使用してインストールオプションを選択してから、Enter を押します。**

■ **Unbreakable Enterprise Kernel。例:**

```
Oracle Linux Server Unbreakable Enterprise Kernel (3.8.13-16.2.1.
el6uek.x86_64)
```

■ **Red Hat 互換カーネル。例:**

```
Oracle Linux Server Red Hat Compatible Kernel (2.6.32-431.el6.
x86_64)
```

Note - すべてのエンタープライズアプリケーションで、Oracle Linux と Unbreakable Enterprise Kernel を使用します。

6. **Oracle Linux OS にログインします。**

インストールオプションを選択したあと、Oracle Linux が起動し、Linux システムのログインが表示されます。例:

```
systemname login:
```

初回ログインの場合は、**root** アカウントと出荷時デフォルトの root パスワード (**root**) を使用します。

7. **ログインしたあと、標準の Linux ツールを使用してサーバーの構成を完了します。次のタスクが含まれます。**
 - セキュリティーのため、**root** の出荷時デフォルトのパスワードを変更します。
 - ネットワークのサーバーを構成します (DHCP を使用しない場合)。“[Oracle Linux 6.5 構成ワークシート](#)” on page 143 を参照してください。

- 必要に応じて、インターネットアクセス用のプロキシを構成します。
 - サーバーを登録し更新します。“Oracle Linux の登録と自動更新の有効化” on page 146を参照してください。
 - 目的のパッケージをインストールします。
8. 構成が完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。
- **Oracle ILOM Web インタフェース**でリモートコンソールプラスのウィンドウを閉じ、Oracle ILOM からログアウトします。
 - **Oracle ILOM CLI**で、Esc キーのあとに (キー (**Shift+9**) を押したあと、Oracle ILOM からログアウトします。

関連情報

- “Oracle ILOM への接続” on page 87
- “Oracle Linux 6.5 構成ワークシート” on page 143

Oracle Linux の登録と自動更新の有効化

Oracle Linux を構成したあと、システムを Oracle に登録してサブスクリプションを有効にし、ソフトウェアの自動更新を受信するようにしてください。これにより、サーバーで最新版のオペレーティングシステムが実行されることが保証されます。手順については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/articles/servers-storage-admin/yum-repo-setup-1659167.html>

Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Linux 6.5 オペレーティングシステムのドキュメントは、Oracle ドキュメントの Web サイトで入手できます。

http://docs.oracle.com/cd/E37670_01/index.html。

インストール済みの Oracle VM 3.3 ソフトウェアの構成

このセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle VM Server ソフトウェアの構成方法について説明します (注文済みの場合)。インストール済みのイメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

Note - インストール済み Oracle VM のサポートされているバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs> にある『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。

説明	リンク
Oracle VM のインストール済みのイメージに関する BIOS ブートモードの制限を確認します。	“Oracle VM のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限” on page 147
インストール済みオペレーティングシステム上での RAID の制限について学習します。	“インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限” on page 148
インストール済み Oracle VM Server と Oracle VM Manager の互換性要件について学習します。	“インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件” on page 148
必要な構成情報を収集します。	“Oracle VM Server 構成ワークシート” on page 149
インストール済みの Oracle VM Server を構成します。	“インストール済み Oracle VM Server を構成する” on page 150
Oracle VM のドキュメントを確認します。	“Oracle VM のドキュメント” on page 153

関連情報

- [「設置手順の概要」13 ページの](#)

Oracle VM のインストール済みのイメージの BIOS ブートモード制限

Oracle VM Server ソフトウェアのイメージは、レガシー BIOS ブートモードでサーバーにプリインストールされます。したがって、インストール済みのイメージを使用する

には、レガシー BIOS ブートモード (デフォルト) でサーバーをブートする必要があります。UEFI ブートモードでサーバーをブートすると、サーバーは Oracle VM のインストール済みのイメージをブートせず、そのイメージを使用することはできません。Oracle VM 3.3 は UEFI をサポートしません。UEFI ブートモードに切り替える場合は、UEFI をサポートするオペレーティングシステムをインストールする必要があります。

インストール済みオペレーティングシステムの RAID の制限

デフォルトで、サーバー上の各物理ドライブは RAID 0 ボリュームとして構成されています。インストール済み Oracle VM Server ソフトウェアを注文した場合、ソフトウェアはこれらの RAID 0 のドライブの 1 つにインストールされています。使用環境に合うようにサーバーのドライブを再構成するオプションがあります。ただし、ドライブの再構成によりインストール済みの OS やドライブ上のその他のデータが消失する可能性があります。

サーバーのストレージドライブの構成の詳細は、“[OS インストール用のサーバードライブの構成](#)” on page 115 を参照してください。オペレーティングシステムのインストールの詳細は、“[オペレーティングシステムのオプション](#)” on page 148 を参照してください。

インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件

システムにインストール済みの Oracle VM Server ソフトウェアを使用する場合は (注文済みの場合)、Oracle VM インフラストラクチャーの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、Oracle VM Manager をアップグレードしてバージョンを一致させてください。

Oracle VM Manager ソフトウェアのアップグレードについては、『[Oracle VM インストールおよびアップグレードガイド](#)』を参照してください。Oracle VM のドキュメントは、次で入手できます。

http://docs.oracle.com/cd/E50245_01/index.html

オペレーティングシステムのオプション

サーバーでは複数のオペレーティングシステムがサポートされています。したがって、サーバー上で Oracle VM Server ソフトウェアのインストール済みバージョンを必ず使用する必要はありません。Oracle VM Server ソフトウェアの新しいバージョン

や Oracle Solaris、Windows などのオペレーティングシステムをインストールする場合は、サポートされているバージョンをインストールしてください。サポートされているオペレーティングシステムの完全なリストについては、<http://www.oracle.com/goto/X5-2L/docs> にある『Oracle Server X5-2L プロダクトノート』を参照してください。

サポートされているオペレーティングシステムのインストール手順については、次を参照してください。

- Oracle Solaris の場合は、[Oracle Server X5-2L Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Oracle Solaris オペレーティングシステムのインストール”を参照してください。
- Oracle VM Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Oracle VM インストールガイド](#) の“Oracle VM のインストール”を参照してください。
- Oracle Linux、Red Hat Enterprise Linux、および SUSE Linux Enterprise Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Linux オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Linux オペレーティングシステムのインストール”を参照してください。
- Windows Server の場合は、[Oracle Server X5-2L Windows Server オペレーティングシステムインストールガイド](#) の“Windows Server オペレーティングシステムのインストール”を参照してください。
- VMware ESXi の場合は、[Oracle Server X5-2L VMware ESXi インストールガイド](#) の“VMware ESXi のインストール”を参照してください。

Oracle VM Server 構成ワークシート

インストール済み Oracle VM Server の構成を開始する前に、このセクションのワークシートを使用して必要な情報を収集してください。

TABLE 12 Oracle VM Server 構成ワークシート

構成情報	説明または例	回答
Oracle VM Server パスワード	root	root パスワードを選択します。文字および長さに制限はありません。
	Oracle VM エージェント	Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは 6 文字以上である必要があります。
ネットワークインターフェイス	サーバーの管理に使用するインターフェイスを入力します。	
ネットワーク構成	静的 IP アドレス	サーバーの IP アドレスを指定します。静的 IP アドレスは必須です。 例: 198.51.100.1
	ネットマスク	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。

構成情報	説明または例	回答
	例: 10.255.255.0	
ゲートウェイ	サーバーにゲートウェイ経由でアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。	
DNS サーバー	DNS (Domain Name Server) の IP アドレスを指定します。1 つの DNS のみが必要です。	
ホスト名	サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。 例: myhost.hs.example.com	

▼ インストール済み Oracle VM Server を構成する

これらの手順では、サーバーにインストール済みの Oracle VM Server を構成する方法についてのみ説明します。Oracle VM には、Oracle VM Manager など、別のコンポーネントもあり、仮想マシン環境をサポートするには、これらのコンポーネントがインストールされているか、すでに稼働している必要があります。

1. **Oracle ILOM にログインしていない場合、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで Ethernet 接続からログインします。**
[“Oracle ILOM への接続” on page 87](#)を参照してください。
2. 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
 - **サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。**
 - **Oracle ILOM Web インタフェースで、**「Host Management」->「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスで「Power On」をクリックします。「Save」、「OK」の順にクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI で、**次のように入力します。
 -> `start /System`
 次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
 Are you sure you want to start /System (y/n)? y
 Starting /System
 - **サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。**
 - **Oracle ILOM Web インタフェースで、**「Host Management」->「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスで「Reset」をクリックします。「Save」、「OK」の順にクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI で、**次のように入力します。
 -> `reset /System`
 次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing hard reset on /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. 次のいずれかの方法を使用してリモートホストコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM Web インタフェース**から「Remote Control」->「Redirection」を選択し、「Launch Remote Console」ボタンをクリックしてビデオコンソールリダイレクションを起動します。
- **Oracle ILOM CLI**で、次を入力します。

```
-> start /HOST/console
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

サーバーがブートし、GRUB メニューが表示されます。

```
GNU GRUB version 0.97 (619K lower / 2068064K upper memory)
```

```
Oracle VM Server-ovs (xen-4.1.3 2.6.39-300.22.2.e15uek)
```

```
Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.1.3 2.6.39-300.22.2.e15uek)
```

4. **GRUB** メニューで一時停止するには、**Enter** 以外のキーをどれか押します。そうしなかった場合は 5 秒後に、強調表示されたインストールオプションが使用されます。

5. 「**GRUB**」メニューで、上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択します。

Note - メニューに 2 つの選択肢、つまり、通常ブートとシリアルコンソール対応のブートが表示されます。

- **出力をビデオポートに表示する (デフォルトオプション)** には、次に示すリストの最初のオプションを選択し、Enter キーを押します。

```
Oracle VM Server - ovs (xen-4.1.3 2.6.39-300.22.2.e15uek)
```

- **出力をシリアルポートに表示するには**、リストの 2 番目のオプションを選択し、Enter を押します。

```
Oracle VM Server - ovs serial console (xen-4.1.3 2.6.39-300.22.2.e15uek)
```

構成プロセスが進み、次の画面が表示されます。

```
Starting OVM console server: [ OK ]
Starting OVM ovmwatch services: [ OK ]
Starting ovs-agent: Starting ovs-agent services:
OK ]
[ OK ]

Configuring Oracle VM...

Enter new root password:
Confirm password:

Enter new Oracle VM Agent password:
Confirm password:

Configuring network.
```

6. 画面をスクロールダウンして、root のパスワードと Oracle VM Agent のパスワードを設定および確認します。

Note - root および Oracle VM Agent のパスワードの入力を求めるプロンプトは、Oracle VM Server を最初にブートしたときだけ表示されます。

7. プロンプトに従ってオンボードのネットワークインタフェースコントローラ (NIC) を選択し、ネットワークに関するほかの必須構成情報を構成および入力します。

```
This tool is used to select the NIC used by the OVM Manager.
You can exit at any time by pressing CTRL-C.

Here's the list of current available network interfaces.
eth0 eth1 eth2 eth3

Please select interface(s) to be used for OVM management.
These interfaces will be configured for redundancy.
eth1
```

Note - ネットワークインタフェース eth2 および eth3 は Ethernet ポート NET2 および NET3 に対応しています。これらは、シングルプロセッサシステムでは機能しません。

8. すべての構成内容が正しければ、「Y」と入力し、Enter キーを押して設定を保存します。

```
Are these settings correct?(Y/n)
```

すべての設定を入力して保存すると、システムが Oracle VM Server コンソールセッションをロードします。例:

```
Oracle VM Server 3.0.2 Console [Alt-F2 for login console]

Local hostname      : lynxp-ovm.us.oracle.com
Manager UUID       : 0004fb0000010000a060c639d1075957
Hostname           : None
Server IP          : None
Server Pool       : None
Clustered         : No
Server Pool Virtual IP : None
Cluster state     : Offline
Master Server     : No
Cluster type      : None
Cluster storage   : None

OVS Agent         : Running
VMs running       : 0
System memory     : 4087
Free memory       : 2439
Uptime            : 0 days, 4 hours, 33 minutes_
```

これで、仮想オペレーティングシステムを作成するための、インストール済み Oracle VM Server の構成が完了します。

関連情報

- [“Oracle ILOM への接続” on page 87](#)
- [“Oracle VM Server 構成ワークシート” on page 149](#)

Oracle VM のドキュメント

Oracle VM ソフトウェアの使用および更新に関するすべての情報は、次にある Oracle VM ドキュメントを参照してください。

http://docs.oracle.com/cd/E50245_01/

システム電源の制御

このセクションでは、サーバーを電源から切断し、リセットする方法について説明します。

説明	リンク
エラーが発生したらサーバーの電源を切断します。	“サーバーの電源切断による正常停止” on page 155 “サーバーの電源切断による即時停止” on page 157
サーバーをリセットします。	“サーバーをリセットする” on page 159

関連情報

- [「設置手順の概要」13 ページの](#)
- <http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 ドキュメントライブラリ

サーバーの電源切断による正常停止

サーバーを正常に停止するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) 対応のオペレーティングシステムでは、この手順により適切な順序でのオペレーティングシステムの停止が実行されます。ACPI 対応のオペレーティングシステムを稼働していないサーバーは、即座に停止してスタンバイ電源モードになります。

Note - サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを取り外す必要があります。

- [“電源ボタンを使用して正常に停止する” on page 156](#)
- [“Oracle ILOM CLI を使用して正常に停止する” on page 156](#)
- [“Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する” on page 157](#)

▼ 電源ボタンを使用して正常に停止する

1. サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押してから離します。
サーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。スタンバイ電源モードの場合は、サーバーのフロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。
2. スタンバイ電源モードから完全に電源を切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。電源/OK LED は消灯します。

関連情報

- 「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」 31 ページの
- “Oracle ILOM CLI を使用して正常に停止する” on page 156
- “Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する” on page 157
- “電源ボタンを使用して即時停止する” on page 158

▼ Oracle ILOM CLI を使用して正常に停止する

1. **admin (a)** および **reset and host control (r)** 権限を持つアカウントを使用して、**Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI)** にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。
2. CLI プロンプトで、次のコマンドを入力してサーバーの正常な電源停止を実行します。

```
-> stop /System
```


サーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。スタンバイ電源モードの場合は、サーバーのフロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。
3. サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。電源/OK LED は消灯します。

関連情報

- “電源ボタンを使用して正常に停止する” on page 156
- “Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する” on page 157
- “電源ボタンを使用して即時停止する” on page 158

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する

1. **admin (a)** 役割権限を持つアカウントを使用して、Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」->「Summary Information」ページが表示されます。

2. 左側のペインで、「Host Management」->「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスから「Graceful Shutdown and Power Off」を選択します。

3. 「Save」、「OK」の順にクリックします。

ホストサーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。スタンバイ電源モードの場合は、サーバーのフロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。

4. サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。

サーバーは完全に停止します。電源/OK LED は消灯します。

関連情報

- “電源ボタンを使用して正常に停止する” on page 156
- “Oracle ILOM CLI を使用して正常に停止する” on page 156
- “電源ボタンを使用して即時停止する” on page 158

サーバーの電源切断による即時停止

サーバーを即時停止するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。この方法を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。



Caution - データ損失の可能性があります。 即時停止方法を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

Note - サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを取り外す必要があります。

- “電源ボタンを使用して即時停止する” on page 158

- [“Oracle ILOM CLI を使用して即時停止する” on page 158](#)
- [“Oracle ILOM Web インタフェースを使用して即時停止する” on page 159](#)

▼ 電源ボタンを使用して即時停止する

1. 電源ボタンを少なくとも 4 秒間押し続けて、主電源を強制的に遮断し、サーバーをスタンバイ電源モードに移行させます。

サーバーが即座に停止して、スタンバイ電源モードに移行します。スタンバイ電源モードの場合は、サーバーのフロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。

2. スタンバイ電源モードから完全に電源を切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。

サーバーが即座に停止します。電源/OK LED は消灯します。

関連情報

- 「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」31 ページの
- [“Oracle ILOM CLI を使用して即時停止する” on page 158](#)
- [“Oracle ILOM Web インタフェースを使用して即時停止する” on page 159](#)

▼ Oracle ILOM CLI を使用して即時停止する

1. **admin (a)** および **reset and host control (r)** 権限を持つアカウントを使用して、**Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI)** にログインします。

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

2. **CLI** プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
-> stop -f /System
```

サーバーが即座に停止して、スタンバイ電源モードに移行します。スタンバイ電源モードの場合は、サーバーのフロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。

3. スタンバイ電源モードから完全に電源を切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。

サーバーが即座に停止します。電源/OK LED は消灯します。

関連情報

- [“電源ボタンを使用して即時停止する” on page 158](#)

- [“Oracle ILOM Web インタフェースを使用して即時停止する” on page 159](#)

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用して即時停止する

1. **admin (a)** 役割権限を持つアカウントを使用して、**Oracle ILOM SP Web** インタフェースにログインします。

Oracle ILOM SP Web インタフェースの「System Information」->「Summary Information」ページが表示されます。

2. 左側のペインで、「Host Management」->「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Immediate Power Off」を選択します。

3. 「Save」、「OK」の順にクリックします。

サーバーが即座に停止してスタンバイ電源に移行します。スタンバイ電源モードの場合は、サーバーのフロントパネルの電源/OK LED がゆっくり点滅します。

4. スタンバイ電源モードから完全に電源を切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。

サーバーが即座に停止します。電源/OK LED は消灯します。

関連情報

- [“Oracle ILOM CLI を使用して即時停止する” on page 158](#)
- [“電源ボタンを使用して即時停止する” on page 158](#)

サーバーをリセットする

サーバーをリセットする場合は、サーバーの電源を再投入する必要はありません。リセットではホストの電源は切断されませんが、プロセッサが再初期化されます。このプロセスでは一部のレジスタ情報が維持されます。これが重要な理由は、システムホストで混乱が生じシステム回復を行うときにエラー情報を利用できる可能性があるためです。次のいずれかのセクションの手順に従ってサーバーをリセットします。



Caution - データ損失の可能性があります。サーバーをリセットすると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

- [“Oracle ILOM CLI を使用してサーバーをリセットする” on page 160](#)

- [“Oracle ILOM Web インタフェースを使用してサーバーをリセットする” on page 160](#)

▼ Oracle ILOM CLI を使用してサーバーをリセットする

1. **admin (a)** 役割権限を持つアカウントを使用して、**Oracle ILOM SP コマンド行インタフェース (CLI)** にログインします。

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

2. **CLI** プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

関連情報

- [“Oracle ILOM Web インタフェースを使用してサーバーをリセットする” on page 160](#)

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用してサーバーをリセットする

1. **admin (a)** 役割権限を持つアカウントを使用して、**Oracle ILOM Web インタフェース** にログインします。

Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」->「Summary」ページが表示されます。

2. 左側のペインで、「Host Management」->「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスで「Reset」をクリックします。

3. 「Save」、「OK」の順にクリックします。

サーバーがリセットされます。

関連情報

- [“Oracle ILOM CLI を使用してサーバーをリセットする” on page 160](#)

設置の問題のトラブルシューティング

このセクションでは、トラブルシューティング情報、技術サポートワークシート、およびシステムシリアル番号の場所に関する情報を提供します。

説明	リンク
よくある問題の解決方法を確認します。	“設置のトラブルシューティング” on page 161
トラブルシューティングと診断のリファレンスです。	“トラブルシューティングと診断のリファレンス” on page 163
情報を収集し、技術サポートに連絡します。	“技術サポート情報ワークシート” on page 163
システムのシリアル番号を確認します。	“システムのシリアル番号の確認” on page 164

関連情報

- [「設置手順の概要」13 ページの](#)
- <http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.2 ドキュメントライブラリ

設置のトラブルシューティング

サーバーの設定中に問題が発生した場合は、次の表のトラブルシューティング情報を参照してください。

Note - 詳細なトラブルシューティング情報については、[Oracle Server X5-2L サービスマニユアル](#) の“[トラブルシューティングと診断](#)”を参照してください。

問題	可能な解決方法
サーバーの電源がオンなのに、モニターの電源がオンになりません。	<ul style="list-style-type: none">■ モニターの電源がオンになっていることを確認してください。■ モニターの電源コードが電源コンセントに接続されていることを確認してください。■ モニターの電源コードがモニターに接続されていることを確認してください。■ 電源コンセントに電力が供給されていることを確認してください。確認するには、別のデバイスを差し込んでテストしてください。

問題	可能な解決方法
取り出しボタンを押しても DVD をメディアトレイから取り出せません。	<ul style="list-style-type: none"> ■ マウスを動かすか、キーボード上のいずれかのキーを押してください。ドライブが低消費電力モードになっている可能性があります。 ■ サーバーにインストールされているユーティリティソフトウェアを使用して、DVD を取り出してください。 ■ デバイス内のメディアが使用されておらず、オペレーティングシステムによってマウントされていないことを確認してください。
モニター画面にビデオが表示されません。	<ul style="list-style-type: none"> ■ モニターケーブルがビデオコネクタに接続されていることを確認してください。 ■ モニターを別のシステムに接続した場合に動作することを確認してください。 ■ 別のモニターがある場合は、そのモニターを元のシステムに接続して動作するかどうかを確認してください。 ■ POST および BIOS の完了後に、モニターにビデオ出力が表示されなくなり、点滅するカーソルのみが表示される場合は、オペレーティングシステムの構成を確認して、シリアル回線上で排他的に出力をリダイレクトするように構成されているかどうかを調べてください。
フロントパネルにある電源ボタンを押しても、サーバーの電源がオンになりません。	<p>Oracle サービス担当者に連絡する必要がある場合は、次の状況を書き留めておいてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ システムのフロントパネルにある電源/OK LED が点灯していることを確認してください。(電源コードが、システムおよび接地電源コンセントに接続されていることを確認してください)。 ■ 電源コンセントに電力が供給されていることを確認してください。確認するには、別のデバイスを差し込んでテストしてください。 ■ 電源の投入後、5 分以内にモニターが同期することを確認してください。(モニターの緑色の LED が点滅を停止し、点灯状態になります)。 ■ Oracle ILOM の障害管理設定をチェックして、障害のあるコンポーネントや間違った電源管理設定によってシステムの電源が入らない状態になっていないか確認してください。
キーボードまたはマウスが操作に反応しません。	<ul style="list-style-type: none"> ■ マウスおよびキーボードのケーブルが、サーバー上のオンボード USB 2.0 コネクタに接続されていることを確認してください。 ■ サーバーの電源がオンで、前面の電源/OK LED が点灯していることを確認してください。
サーバーがハングアップしたり、動かなくなったりします。マウスやキーボード、またはアプリケーションから応答がありません。	<p>ネットワーク上の別のサーバーからシステムにアクセスしてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 別のシステム上で、「ping IP-address-of-server」と入力します。 2. 応答が返されたら、telnet、ssh、または rlogin のいずれかを使用してサーバーにログインします。 3. 正常にログインしたら、ps コマンドを使用して、実行中のプロセスを一覧表示します。 4. kill process-ID コマンドを使用して、応答していないプロセスや実行されるべきでないプロセスを終了します。 5. プロセスを 1 つ終了するたびに、サーバーの応答性を確認します。 <p>この手順を使用して問題を解決できない場合は、サーバーの電源を再投入します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 電源ボタンを押してサーバーの電源をオフにしてから、20 - 30 秒間待機します。 2. もう一度電源ボタンを押して、システムの電源を再投入します。

関連情報

- 「設置手順の概要」 13 ページの
- 「サーバーの機能とコンポーネント」 29 ページの
- Oracle Server X5-2L サービスマニュアルの“トラブルシューティングと診断”

トラブルシューティングと診断のリファレンス

『Oracle Server X5-2L サービスマニュアル』には、問題のトラブルシューティングに関する製品固有の情報が記載されています。Oracle Server X5-2L サービスマニュアルの“トラブルシューティングと診断”を参照してください。

『Oracle x86 サーバー診断ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)には、Oracle の x86 サーバー用に使用できるさまざまなツールについての情報が記載されています。

ナレッジ記事、ホワイトペーパー、製品アップデートは、次の Oracle サポートポータルから入手できます。

<http://support.oracle.com>

技術サポート情報ワークシート

トラブルシューティング情報を使用しても問題を解決できない場合は、次の表を使用して、Oracle サービス担当者に伝える必要がある情報を収集してください。

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	
システムモデル	
オペレーティングシステム	
システムシリアル番号 (この番号の表示位置については、“システムのシリアル番号の確認” on page 164を参照してください。)	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題の概要と、問題が発生したときに実行した操作内容	

必要なシステム構成情報	お客様の情報
IP アドレス	
サーバー名 (システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

関連情報

- [Oracle Server X5-2L サービスマニュアルの“システムコンポーネントについて”](#)
- <http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 サーバー 診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド Oracle ILOM 3.2 搭載サーバー用』

システムのシリアル番号の確認

システムの保守を依頼するときに、使用しているサーバーのシリアル番号が必要になることがあります。あとで使用するときのために、この番号を記録しておいてください。次のいずれかの方法を使用して、サーバーのシリアル番号を確認します。

- サーバーのフロントパネルで、シャーシの左側とステータス LED の下を確認します。
- サーバーのパッケージに付属している Customer Information Sheet (CIS) を確認します。このシートにシリアル番号が記載されています。
- Oracle ILOM Web インタフェースから、Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」->「Summary Information」ページに移動します。
- Oracle ILOM CLI で「show /System」コマンドを入力します。

関連情報

- 「フロントパネルのステータスインジケータ、コネクタ、ドライブ」31 ページの

サイト計画のチェックリスト

このセクションでは、サイト準備のためのリファレンスチェックリストを提供します。次のトピックを取り上げます。

- “準備のためのチェックリスト” on page 165

準備のためのチェックリスト

次のチェックリストを使えば、サイトでサーバーを受け取る前に、Oracle Server X5-2Lの物理要件、電気要件、および環境要件に対する計画を立案したり、それらの要件を解決したりしやすくなります。

- “搬入経路およびデータセンターのチェックリスト” on page 165
- “データセンター環境のチェックリスト” on page 166
- “施設の電源のチェックリスト” on page 167
- “ラックマウントのチェックリスト” on page 167
- “安全性のチェックリスト” on page 169
- “Auto Service Request のチェックリスト” on page 169
- “納入のチェックリスト” on page 170

搬入経路およびデータセンターのチェックリスト

サーバーを設置する前に次の施設要件を確認してください。

TABLE 13 搬入経路およびデータセンタールームのチェックリスト

データセンタールームのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
梱包された装置を搬入できる搬入経路を確認してありますか。				
すべてのドアと搬入経路が搬入のための幅と高さの要件を満たしていますか。開梱後の幅についてはどうですか。				
新しいハードウェアの移動パス上に傾斜、階段、または段差がありますか。				

データセンタールームのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
搬入経路に衝撃の原因となる障害物がないことを確認しましたか。				
装置を上階に搬入する場合、搬入用エレベータは使用できますか。				
ラックの場所が割り当てられていますか。				
ラック内に新しいサーバーのための空きスペースがありますか。				
フロアレイアウトは装置の保守アクセス要件を満たしていますか。				
サーバー保守のための十分なスペースがありますか。				
キャビネット安定化対策は考慮されていますか。				
ハードウェアの設置場所で規格外の長さのケーブルは必要ですか。				
床から天井までの高さが 2914 mm (約 9.6 フィート) 以上ありますか。				
上げ床の深さが 460 mm (18 インチ) 以上ありますか。				

関連情報

- [“ラックの要件” on page 50](#)

データセンター環境のチェックリスト

次のチェックリストを使用して、サーバーがデータセンター環境の要件を満たしていることを確認してください。

TABLE 14 データセンター環境のチェックリスト

データセンター環境のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
コンピュータールームの通気処理は温度および湿度要件を満たしていますか。				
設置フロアレイアウトは通気要件を満たしていますか。				
あるラックからの排気が別のラックの吸気口から入らないように装置が配置されていますか。				
有孔床タイルごとに 400 CFM 以上の通気が確保されていますか。				
データセンターの空調設備によって前面から背面への十分な通気が確保されますか。				
局所的に高温にならないように十分な通気が確保されていますか。				

データセンター環境のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
データセンターは環境の要件を継続して満たすことができますか。				
通気フロアタイルが追加で必要な場合に入手できますか。				

関連情報

- [「通気のガイドライン」24 ページの](#)

施設の電源のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する施設電源要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

TABLE 15 施設の電源のチェックリスト

施設の電源のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
装置および周辺装置に必要な動作電圧と電流レベルを把握していますか。				
各ラックの 2 m (6.5 フィート) 以内に十分な数の電源コンセントがありますか。				
電源コンセントに適切な差し込み口が付いていますか。				
ラックにオプションのアースケーブルを接続しますか。				
装置の回路遮断器は、電圧および通電能力の点で適していますか。				
電力周波数は装置の仕様を満たしていますか。				
システムの電力が 2 つの異なるグリッドから供給されますか。				
装置に電力を供給する無停電電源装置がありますか。				

関連情報

- [「電力の要件」20 ページの](#)

ラックマウントのチェックリスト

サーバーをラックまたはキャビネット内に設置する前に、次のチェックリストに記入してください。

TABLE 16 ラックマウントのチェックリスト

ラックマウントのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
前方取り付け面と後方取り付け面の距離が、最小値 610 mm と最大値 915 mm の間 (24 インチから 36 インチの間) になっていますか。				
前方取り付け面の前のクリアランスの奥行き (前面キャビネットドアまでの距離) が 25.4 mm (1 インチ) 以上ありますか。				
対象のラックが次の最小荷重を満たしていますか。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 19 kg/RU ■ 合計 785 kg 				
ラックは 4 ポストラック (前方と後方の両方でマウント) ですか。 2 ポストのラックとは互換性がありません。				
ラックの水平方向の開口部と装置の垂直距離が、ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 の標準に準拠していますか。				
ラックが RETMA レールをサポートしていますか。				
ラックが Oracle ケーブル管理アーム (CMA) をサポートしていますか。				
ラックが Oracle の通気孔付きソリッドフィルターパネルの設置に対応していますか。				
Ethernet 配線ハーネスをラックに取り付けることができますか。				
ラック内に、ケーブルハーネスと配電盤 (PDU) のための十分なスペースがありますか。				
シリアル番号が記載されたラベルを印刷し、対象のラックに貼ることができますか。				
ラックが、Oracle の標準 PDU の設置に対応していますか。 対応していない場合は、このチェックリストを終了してください。				
顧客は同一の PDU ペアを用意できますか。				
顧客は 2 つの PDU (PDU 当たり 110kVA) を用意できますか。				
顧客は、1 つの PDU が故障した場合にも電源要件をサポートする単一の PDU と回路を用意できますか。				
顧客は、単一 PDU のすべての回路に電力負荷が均等に割り振られることを保証できますか。				
顧客は、PDU のための適切な電力ドロップを提供できますか。				

安全性のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する安全性要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

TABLE 17 安全性のチェックリスト

安全性のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
緊急電源切断機能がありますか。				
データセンタールームに防火システムがありますか。				
コンピュータールームに適切な消火装置がありますか。				
静電気防止フロアが設置されていますか。				
フリーアクセスフロアの下に障害物や閉塞物はありませんか。				

関連情報

- Oracle Server X5-2L 安全およびコンプライアンスに関するガイド

Auto Service Request のチェックリスト

サーバーで Auto Service Request を使用する場合は、次のチェックリストに記入してください。

TABLE 18 Auto Service Request のチェックリスト

Auto Service Request のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
Auto Service Request を登録するための Oracle オンラインアカウントがありますか。				
My Oracle Support のカスタマサポート ID (CSI) 番号を持っていますか。				
Auto Service Request Manager を含むサーバーのホスト名と IP アドレスがわかりますか。				
システムにプロキシサーバーは必要ですか。必要な場合は、プロキシサーバーのホスト名と IP アドレスを記入してください。				
自動サービス・リクエストの技術担当者の情報を登録しましたか。この情報には、担当者の氏名と電子メールアドレスを含めてください。				

納入のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する納入要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

TABLE 19 納入のチェックリスト

納入のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
データセンター担当者の連絡先情報がありますか。				
データセンターにセキュリティー制御またはアクセス制御がありますか。				
ベンダーの担当者がデータセンターに入室する際に身元確認や入室許可は必要ですか。必要な場合、どのような機関による証明を受ければよいですか。				
身元確認は何日前までに済ませる必要がありますか。				
セキュリティーや入室に関して、ほかに注意することはありますか。				
設置担当者のコンピュータルームへの入室は許可されていますか。				
データセンターではノートパソコン、携帯電話、カメラの使用が許可されていますか。				
建物には搬入口がありますか。				
配達、開梱、準備のための場所がありますか。				
配達場所は建物内部ですか。				
納入場所が建物内部でない場合、設置場所で梱包を解くことができますか。				
開梱、準備のための場所は雨風から保護されていますか。				
建物に十分な搬入場所がありますか。				
各種のハードウェアコンポーネントが熱衝撃を受けないように開梱場所の室温が管理されていますか。				
ハードウェアの設置に十分な運搬要員が確保できますか。				
梱包を解く作業とごみの片付けについては手配済みですか。				
納入やごみ撤去に関する制限がありますか。				
配達用トラックの長さ、幅、高さ制限がありますか。				
コンピュータルームへの段ボールなどの梱包材の持ち込みは可能ですか。				
搬入口へのアクセス時間に制約はありますか。ある場合、時間的制約を指定してください。				
装置を搬入口に降ろす際に、運搬車両にテールリフトは必要ですか。				

関連情報

- [「サーバーの物理仕様」17 ページの](#)
- [Oracle Server X5-2L 安全およびコンプライアンスに関するガイド](#)

索引

あ

- 安全性のチェックリスト, 169
- インストール後のタスク
 - Oracle Linux, 146
- インストール済みオペレーティングシステム
 - Oracle Solaris、構成, 135
 - Oracle VM、構成, 147
- エアフロー要件, 24
- オプションのコンポーネント、取り付け, 27
- オペレーティングシステム
 - Oracle Linux OS
 - ユーザードキュメント, 146
 - Oracle Linux, 構成, 143
 - Oracle Solaris OS
 - インストール済みソフトウェアの構成, 135
 - Oracle VM
 - インストール済みソフトウェアの構成, 147
 - インストール済みソフトウェアの構成, 140

か

- 環境仕様, 21
- 緊急停止, 157, 158
- ケーブル管理アーム (CMA)
 - サーバーへの取り付け, 60
 - 取り外し, 73
- 工具不要スライドレール構成部品、取り付け, 56
- 固定部品、取り付け, 53

さ

- サーバー
 - 電源のリセット, 124, 130
- サーバーの重量, 26
- サーバーの設置
 - ESD の予防措置, 26

- オプションのコンポーネント, 27
- トラブルシューティング, 161
- サーバーの設置、必要な工具, 26
- サーバーのリセット, 159
- サポートワークシート, 163
- 施設の電源のチェックリスト, 167
- 出荷用梱包箱
 - 損傷の確認, 25
- 出荷用梱包箱の内容, 25
- 仕様
 - 適合規格, 24
 - 物理, 17
- シリアル管理 (SER MGT) ポート, 82
- スペース、エアフロー, 24
- 正常停止, 155
- 即時停止, 157

た

- チェックリスト
 - Auto Service Request, 169
 - 安全性, 169
 - 施設の電源, 167
 - データセンター環境, 166
 - 納入, 170
 - 搬入経路, 165
 - ラックマウント, 168
- 通気要件, 24
- データセンター環境のチェックリスト, 166
- 適合規格の仕様, 24
- 電圧, 20
- 電気仕様
 - サーバーの入力電流, 20
 - 電圧, 20
- 電源切断
 - 緊急停止, 157

正常停止, 155
電源投入時自己診断 (POST), 161
電源ボタン、位置, 156
電流, 20
トラブルシューティング, 161

な

ネットワーク管理 (NET MGT) ポート、位置, 82
納入のチェックリスト, 170

は

配線、必要なケーブル接続, 81
搬入経路およびデータセンターのチェックリスト, 165
ビデオポート、位置, 82
物理仕様, 17

や

ユーザードキュメント, 140

ら

ラックへのサーバーの設置, 49
ラックへの設置, 49
ラックマウント
キット, 49
ラックの固定, 52, 69, 73
レール構成部品, 49
ラックマウントのチェックリスト, 168
レール構成部品, 49

わ

ワークシート、サポート, 163

A

Auto Service Request のチェックリスト, 169

E

ESD の予防措置, 26
Ethernet 接続
Oracle ILOM へのログイン
CLI の使用, 92
Web インタフェースの使用, 90
Ethernet ポート, 82

I

IPMI, 88

O

Oracle ILOM インタフェース
SNMP v3, 88
SSH コマンド行, 88
Web ブラウザ, 88
Oracle Linux OS
インストール済みソフトウェアの構成, 141
Oracle Linux OS、インストール済みソフトウェアの構成, 144
Oracle Solaris OS、インストール済みソフトウェアの構成, 135, 137

R

root アカウントのパスワード、回復, 106

S

Secure Shell (SSH) コマンド行インタフェース, 88
SNMP v3 インタフェース, 88
SP のリセット
ピンホールボタンの使用, 105

U

USB ポート, 82

V

VMware ESXi

サーバーの電源リセット, 124, 130

W

Web ブラウザインタフェース, 88

